
流転の悪役

柳之助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流転の悪役

【Nコード】

N5567Q

【作者名】

柳之助

【あらすじ】

佐山御言と新庄運切の息子佐山竜人。己の過去と軋みの意味を知るために異世界へと旅立つ。

まず降り立ったのは、乙女舞う乱世。

悪役の姓を持つ少年は何を見て、何を知るか。

多重クロス予定なので原作が増えてます。ご了承ください。

2月7日、原作に戯言シリーズ、人間シリーズを追加しました。

序章 旅立ち（前書き）

受け継いだのは力。
契約したのは意志。
託されたのは想い。

序章 旅立ち

日本、東京の奥多摩の地下施設、日本UCATの廊下を歩く少年がいた。

黒髪黒目に黒いＴシャツ、ジーパンを着た彼はある部屋の前に止まり、中に入る。

中には二人。

両端だけ白い黒髪のスーツの男性イスに座る、佐山・御言。

腰までの長い黒髪に彼の隣りに立つスーツの女性、新庄・運切。

その二人に向け、

「何の用だ？」

「それが親に向ける言葉かね？」

「あんただけに行ってるんだよ、ヒヒ親父」

「ほう？つまり、新庄君が目に入ってないとかいかな？！眼医者を紹介しよう。その使えない目、少しはマシになるだろう」

「まず、あんたが精神科に行け」

「ちょっと二人共、ケンカしない！佐山君、話があるんでしょ？」

新庄の制止に、短い応酬が終わり、佐山が口を開く。

「君がここに来るきっかけとなった事をおぼえているかね？」

突然の質問に眉を顰めながら、

「十五年前、つまり全竜交渉^{レヴァイアサンロード}の二年後、あんたたち二人の前に行きなり『門』が開いてそこから俺が出てきた。それで……」

「子体次元振動を調べたが、1stから10th、LowにTopのどのG^{ギア}とも違い、身元不明で私たちの養子になった。ここまではいいかね？」

「ああ」

「では次の質問だ。君の全竜交渉^{レヴァイアサンロード}はどうなっている？」

「……一か月前にTop・Gの命刻さんで終わった」

要領を得ない質問する佐山に疑問を持ち、新庄を見る。
彼女は苦笑しながら、

「実はその時にメッセージがあっただよ、十五年間育ててくれた」

「は……？」

突然の告白に目が点になる。
が、佐山は構わずに続ける。

「と、いうわけで十五年たったわけだ、いまから尊秋多学院に行きたまえ」

「いやいやいやいや、いきなり何言い出すんだよ！いまから？急すぎるわ！」

「だが、行けば知ることができるだろう。君の過去と軋みの原因を」
少年の軋み。かつての佐山の狭心症のようなものではなく、もつと感覚的なものが少年にあった。

何も言えなくなった少年に新庄が声をかける。

「嫌なら行かなくてもいいんだよ？君のしたいようにしたらそれでいい」

少年はしばらく考え、

「行く、そして知りに行く。俺の過去と軋みの意味を」

言った。

その答えに佐山は笑みを浮かべ、アタッシュケースを取り出した。

「受け取りたまえ、旅立つ君への贈り物だよ」

中には白いグラブが入っている。

概念兵器ゲオルギウス。

それにプラスとマイナスのチップと見覚えのないチップがもう二枚ある。

「なんだそれ……？」

「私と新庄君はこれを私たちの親から受け継いだ。このゲオルギウスは新庄・由起夫そのものであり、かつての概念戦争の結果の一つだ。そして、これは言うなれば全竜交渉の結果と言っていていいだろう。」

「

真新しい二つのチップ。それは、

「Coreチップと名付けた。簡単に言えばこれをゲオルギウスに
はめて使えば概念核と同じように使える。かつて戸田命刻が使用し
た賢石刀を元に作った。それとおまけで概念条文も自由に扱える」

「そんなのどうやってつくったんだよ？」

「詳しくは秘密だ。あえていうならば隠居中の御老体の全財産半分
を使った。あの老人は金だけは貯めているからね」

「いいのか……？」

「構わんよ。なぜなら、」

言葉を一度区切り、

「なぜなら、一人息子への贈り物ならば私は金に糸目をつけん」

不覚にも、感動してしまった。

「君は私と新庄君の子供だ。子供のために親が金をかけるのは当然
だろう？」

不敵に笑う佐山に優しく微笑む新庄。

少年は改めて実感する。自分にも家族がいることを。

「では行ってきたまえ。わが息子よ、これから先つらいことも苦し

「いこともあるだろう」

「でも、忘れないでボクたちは君の家族で無条件で君の味方だから」

「故に、自らの意志で進みたまえ」

その言葉に、零れそうな涙に耐えながら。

「返事はどうした？」

答えた。

「――T e s . . ! !」

我、契約せり。

少年の名前は佐山竜人。

悪役の姓を持ち、竜を担う人という名を持った少年は、己の意志を持って進み行く。

序章 旅立ち（後書き）

柳之助です。

よろしくお願いします

第一章 日常（前書き）

それはありふれた日々。
しかし、何よりも大切なもの。

第一章 日常

太陽が昇る。

暗い夜から明るい朝へ。

その時間帯に木と土壁でできた家からまだ幼い少年が目覚めます。少年は顔を洗い、手ぬぐいを持って家を出て裏に回る。

そこで、両手をゆるく構え、半身になり、突然動き出す。右拳を突き出し、引き戻し、左拳を突き出す。

足さばきは、時に円を描くように、時にまっすぐ動く。その動きは止まらずに一時間ほど続いた。

「ふう……」

……まだまだだな。

流れる汗を拭き、一息ついたところで、

「竜人くん、ご飯よ」

家の中から女性の声が聞こえた。

「今行きまーす」

その声に答え、家に入る。

佐山竜人、この世界に来てから朝はだいたいこんな感じである。

父と母に送り出され尊秋多学院の屋上に向かったらそこに『門』

が有り、それをくぐった。

そして、気付いたら竜人はこの世界にいたのだ。
身体年齢五歳程、荒野の真ん中で。

…… あれはびびったなあ

どうしていいかわからなかったが、何故か服のサイズは合って、
アタッシューケースを引きづっていたら、

「はい。竜人くん、ご飯」

「ありがとうございます」

机の向こう側にいる夫婦に拾われたのだ。

燃えるような赤い長髪の女性、結衣。

青い髪に褐色の肌の男性、鋼。

結衣も鋼もとてもいい人だった。

すくなくともUCATの変態どもとは比べ物にならないくらい。
出会ってから二年間も居候させてくれている。

「はい、恋。ご飯、大盛りね」

「……（コクッ）」

竜人の隣りに座り、茶碗山盛りのご飯を受け取った少女。

母譲りの赤髪に父譲りの褐色の肌。

つぶらな瞳は子犬のようだ。

彼女の名は恋。

この幼い無口の少女は食べる量が竜人の数倍だ。
食べる速度も速いので必然的に、

「恋、米つぶ付いてるぞ」

「……………ん」

「ほら、こっち向け」

布巾で大量についた米つぶを取ってやる。
気持ち良さそうに目を細める恋。
それを見て竜人も苦笑して、

「よし、いいぞ」

「……………ん」

再び食べ始める。
そんな恋を見て、竜人は思う。

……………こいつがああ呂布ねえ……………

呂布奉先

三国志において最強の武将と云われた英傑。
方天画戟を振り、愛馬赤兔と共に大地を駆ける。
そう云われている彼は、

「……………ん？」

竜人の視線に気づいて、こちらを向く恋。
視線が合う。

……かわいいなあ！まったく！

思わず心の中で叫んでしまうほど可憐な少女になっている。
しかし、顔には出さず、

「なんでもないよ」

「……………ん。竜人もちゃんと食べる」

「おう」

そんな二人を結衣は頬に手を当てあらあらと微笑み、鋼は何も言わずに食事続けた。

この二年間、わりとありふれた風景だった。

第二章 幸いの笑み（前書き）

それはよく耳にするけれど、
目にすることはあまりない。

第二章 幸いの笑み

とある村のとある家。

その裏の空き地に二つの影があつた。

ひとつは黒い髪に黒い目の幼い少年。

両手に白いグラブをはめている。

もうひとつは青い髪に褐色の肌の男性。

こちらは何も付けていない。

竜人と鋼だ。

お互いが拳を放ちあう。

動きが多いのは竜人だ。

七歳程度の小さい体を生かし、動き回る。

鋼はあまり動かずに竜人を迎え撃つ。

竜人が前に出ようとすれば、鋼の拳に止められる。

鋼が拳を放った時には、そこに竜人はもういない。

膠着状態。

それがしばらく続き、打ち破るために竜人が新たな動きを見せた。

前に出たのだ。

すぐに鋼の拳が迫る。

それを、逸らし、捌き、受け流す。

一歩ずつ、小さく、ゆつくりと、確かに進む。

拳の応酬は苛烈さをます。

もはや弾幕のようだ。

うまく受け流せなければ、骨が碎けるだろう拳の前に竜人はひる

まず進む。

そして、ようやく竜人の間合いに鋼が入った。

それと同時に左右から拳が来る。

それを竜人は受け流すのではなく、体を小さくして前に出た。

左右の拳は空振りし、鋼の腹に軽く拳が添えられる。

それを、

「……！！」

射出した。

ただの一撃ではない。

足の指先、踵、足首、膝、腰、肩、肘、手首、それらを連動させて零距离で撃つ。

地面が軽く陥没する程の一撃だ。

その一撃に鋼は、

「ぬ……！！」

腹で受け止めた。

互いに静止する。

一秒、十秒、三十秒あまり経ってから、

「……終わりにしよう」

「そうですね」

竜人が鋼から離れて手首を回し、グラブを外す。

「……気の扱いには大分慣れたようだな」

「ええ、先生が良かったので」

「いや、お前の努力の証だろう」

気。

Low-Gやその他のGには無かったものだ。

生命エネルギーのようなものなのだろうが、よくわからない。身体強化の符よりも応用が効き、攻撃にも防御にも使える。

竜人の零距离の一撃やそれを鋼が腹で防いだのも気の一撃だった。

もつとも、意識的に気が使える人は少ないらしい。

鋼はその少ない使い手だった。

気に限らず、十二のGに無い概念がもう一つあった。

真名だ。

親しい人のみに教える本当の名前。

それ以外の人には姓名や字を呼ばせるらしい。

恋の場合なら、呂が姓、布が名、奉先が字、恋が真名だ。

鋼や結衣も真名で、竜人は姓名が佐山、字は無しで真名を竜人としている。

「……………ありがとうございます」

鋼は謙遜ではなく本心で思っているだろうが事実だった。

この男は強い。

おそらく概念能力無しなら、かつての全竜交渉部隊にも劣らないだろう。
チームレヴァイアサン

それでも彼らの方が強いだろうが。

思い返されるのは、養父である佐山・御言に命じられて行った竜人レヴァイアサンロードの全竜交渉その六番目。

6th-Gとのそれは出雲・覚との模擬戦。

一度でも有効打を決めればよかったのだがそれが大変だった。

……あのマジ打撃が通用しないんだよねあ

気や符で強化しているのではなく、生来の体でだ。

結局、エロ本で意識を逸らしてから金的を狙い、なんとか合格だった。

あまり思い出したくない記憶を思い返していたら、袖を引かれて、

「……………もう終わり？」

恋だ。

上目づかい付きのそれは、

……ぐはあ

竜人の心を打ち抜いた。

鋼に目を向ける。

彼は頷き、

「……行商人が来ているのだったな。行ってくるといい」

「じゃあ、ちょっと行ってきます。行こう、恋」

「……………ん」

そう言っ て恋と手をつないで空き地から出て行った。

呂家から少し歩き、村の広場に出る。
広場には露店が開かれている。
すでにかんりの人が集まっているが、

「おう、竜人。来たか！」

「恋ちゃんも。待ってたぜ！」

彼らに声をかけられる。

仲間意識の強いこの村ではだいたいの人が真名を交換し合っていた。

「退いてくれ！恋が見えないだろ！」

「あゝ、熱い、熱いな。主に精神的に」

「七歳児に何言ってるんだ！」

童人の叫びにその場の人たち笑いながら散っていく。

「まったく……。ほら、恋、欲しいものあるか？」

「……………ん」

恋が商品を見渡す。

それを見て、

……………食べ物の方がいいのか？

食事が好きな恋ならその方がいいかと思いながら、声をかけようとしたら、

「……………あれ」

と、指をさした。

その先には、

……………指輪？

それも、同じ意匠で対になっているものだ。

高いものではなく、お金はあらかじめ貰っているので金銭的には問題ないが、

……精神的にはキツイぞ……！

「ちなみに、何故……？」

「……お父さんとお母さんがおそろいのを持っていた」

……それはいわゆる結婚指輪では……？

いや、この時代にそんな文化があったのか。いやいや異世界だからあるのか。服もいろいろおかしいし。

「……あれがいいのか？」

「……………（コクッ）」

「……………」

「まいど」

……結局買ってしまった。

大人用だったらしく指に入らなくて、鎖で首から掛けている。
一歩前を歩く恋はかなり気に入ったらしくご機嫌だ。
首から下げた指輪を触れ続けている。
それを見て、

……大丈夫か、俺？

恋は七歳、自分は実年齢十九歳。
十二歳差である。

……いやいや、精神は肉体に引つ張られるって昔なんかの本で読んだし

肉体年齢は七歳、恋も七歳。同い年。問題ない。ノープロBLEMだ。だいたいこれではマジで恋の事が好きみたいじゃないか。違う。ナンセンスだ。確かに恋のことは好きだが、そういう好きじゃなくて、佐山・御言が新庄・運切を想うような好きで、それはつまり、そういう好きで、あれ？あれれれ？

混乱していく竜人に、

「……竜人？」

「どわあ！な、なんだ？恋？」

「嫌だった……？」

「そんなわけないだろう！！」

思わず叫んでしまった。

それに、恋は幸せそうに微笑み、

「……………ん。よかった」

……反則だぜ、それは。

何も言えなくなってしまった。

だから、彼女の横に行って手を取り、

「行こう、恋」

「……………ん」

大丈夫じゃないかもしれないと思いつつも、それでいいかと思う
竜人だった。

第三章 始まりの使者（前書き）

それはゆつくりと。

それは静かに。

しかし確実に。

第三章 始まりの使者

太陽が輝く晴天。

昼時。

竜人は村から半日ほどの河原で休んでいた

「そろそろ出るぞい」

竜人に声をかけたのは口髭を蓄えた老人だ。

士^{しさい}賽^{とうげん}・党元。

真名を白^{びやく}夜^やという。

竜人がいる村の村長だ。

水筒に水を入れてから馬にまたがる。

「後半日じゃ。さっさと行くぞ」

急かす老人に溜息をつく。

……なんでこうなったんだか……

話はさかのぼる。

「養子ですか……？」

「ああ」

指輪を買ってから帰ってきたら二人を迎えたのは鋼と結衣、そし

て村長の白夜だった。

大事な話があると言われ聞いてみれば、

「……少し離れた町にお前を養子に迎えたいという夫婦がいるらしい」

「なんでまた？」

「それはワシから話をしよう」

口を割り込んだのは白夜だった。

「実は先月、町に行ったときにその夫婦の父親と話をしたの。その時にお主の話が出て、ぜひとな」

「さて、何故そこで俺の話をする？」

「自分の事をもっと自覚すれば解るじゃろう？」

「む……」

二年前に突如村に転がり込み、その当時から子供離れた戦闘能力や知能を持っていた竜人。

すべてLow-G、つまり前世で学んだことだが。

話のタネにはもってこいだろう。

ちなみに竜人は白夜には敬語を使わない。
なぜなら、

「まあ、酒で口が滑っただけだがつ」

「じじい!!」

この老人、かなりいい加減だった。

「しかしのう、外の世界を見るという事で会ってはくれんか？いろいろ世話になつてゐる御仁の娘夫婦なんじゃ。ないがしろにするわけにはいかんし、いやなら断つてもかまわん。とりあえず、顔合わせをの？」

外の世界、という単語に竜人は考える。

もともとこの世界に來たのは自分の事を知るためだ。

それでも、慣れぬ生活や、幼い体、かわいすぎる恋、良くない治安にかわいすぎる恋などいろいろあつた。

概念能力を使えば大分楽だろうがこの世界ではチートのようなものなのであまり使わないようにしている。

そんなこんなでありこの世界に來た意味を全うしてない竜人だった。

そういう意味では渡りに船とも言える。

困つて、鋼や結衣に目を向けるが、

「……好きにすればいい」

「そうそう、ひとまず会っただけなんでしょう？」

竜人の意思を尊重してくれるらしい。

……むむむむむ

考えて、

「わかった。会っただけな？」

「おお！すまんの！」

喜びを露わにする白夜。

竜人がその様子に溜息を吐くと、横から袖を引かれた。
今までずっと黙っていた恋だ。

「……竜人、どっか行っちゃうの？」

若干、涙目の上目づかいに思わず恋から目を背ける。
その先には、白夜が何か口パクで言っていて、

……ちゅー、じゃー！

……七歳に何を言ってる！？

視線を戻し、

「ちょっと何日か空けるだけだよ」

「……………本当？」

「おう。嘘はつかないぜ」

それでも不安そうな恋に、

「じゃあ、帰ってきたら二人でどこか遊びに行こうぜ」

「……………約束？」

「おう、約束。Tes^{テス}ってやつだ」

「……てす？」

「約束するって意味だよ。行こうぜ、どっか二人で」

「……………（コクッ）」

笑顔付きで了承された。

それが二週間ほど前。

一週間前に村を出て、二日かけて移動し、三日滞在して今は帰り道だ。

行きには、行商人と共に生き、帰りは竜人と白夜だけだ。

件の夫婦には丁重にお断りしてきた。

良い人たちだったけど。

回想も終わり間もなく日が沈むころだ。

この丘を越えれば村を一望できる。

早く帰りたくて馬を急がせて前に行く白夜を追い抜く。

そして、丘を、越えてしまった。

「……え？」

燃えていた。

赤く。

紅く

朱く

アカク。

黄昏に染められたように、炎が村を蹂躪している。
後ろで白夜も驚愕しているのが分かる。

「……っ!!」

駆けだした

後ろで白夜が慌てて制止する声が聞こえるが、無視する。
村まで永遠とも感じさせる時間を過ごし、村の手前で馬を置いて
走り出す。

走る。

向かうのは呂家。

走っている視界の片隅に何人も血を流し倒れている。

誰もが一週間前まで顔を合わせていた人たちだ。

それでも、走り抜け呂家が見えた。

人がたくさんいた。

おそらく村を襲った盗賊だろうと、考える余裕は無かった。

三十人余りが円を作り鋼を囲んでいた。

鋼は健在に見えた。

見えただけだった。

立っているのではない。

/ 立たされている。

体中から血を流している。

/ 当然だ。体中に矢が

刺さっているから。

足に力が入っているようには見えない。

/ 胸に何本も槍が刺さ

り、それが地面に縫いとめている。

彼の足元に胸から血を流した結衣が倒れている。

どちらも。

／息はしてないだろう。

死んでいる。

／死んでいる

死んでいる。

／二人とも。

／死んでいる。

死んでいる――。

ぶつん、と何かが切れた。

盗賊たちは二人を囲み自分たちの行為を眺めている。

こちらに気付いた。

懷から、白いグラブ――ゲオルギウスを取り出し両手にはめる。

近い数人が卑しい笑みを浮かる。

何か言っている

わざと狙いをそらした槍を投げようとして、

・――真実のみとなる。

止まった。

投げようとした姿勢で静止している。

それに対し自分は、

「
××、××」

何か、言った気がした。

気付けば、突っ立っていた。

どれだけ経ったのか。

両手のゲオルギウスが淡く光っている。

かつて戸田・命刻が用いた賢石刀を基に改良され、概念展開や概念条文の作成もおもいのままだ。

それでも、こんなことに使うとは思っていなかったが。

周りには死体がいくつも転がっている

すべて竜人が殺したのだろう。

あまり覚えていない。

佐山・竜人は殺人に何も感じない。

いつか『軍』の残党に襲われ、殺してしまった時もそうだった。

何の感慨もなく。

何の意味もなく。

何の感情もなく殺す。

感じるのは軋みだ。

心から何かが欠け落ちる。

こぼれおちる感覚。

それが佐山・竜人の軋みだった。

「竜人」

名前を呼ばれた。

白夜だった。

「まだ、かなりおる。逃げるぞ」

手を引かれ歩き出す。
その前に、

「恋は……？」

鋼と結衣は死んでいた。
なら恋は？

彼女はどうしたのか。

「分かん。じゃが、おそらく……」

「ああ、そうか」

死んでしまったのか。

彼女も。

あの無垢な少女も。

そのまま、手を引かれ、馬のもとに行きまたがる。
一頭しかいなかったの二人乗りだ。

走り去る。

最後に振り返ると、未だ村は燃えていた。

どれだけ走ったのか。

周りはいつの間にか暗い。明りは月明かりだけだ。
気付けば半日前に居た河原だ。

二人は転がり落ちるように馬から降りて座り込む。
沈黙が続く、口を開いたのは竜人だった。

「なんで、あんな事が……」

「時代じゃろう」

白夜が答える

「皇帝の権力は年々弱まりつつある。官軍も無能な者が多くなって
いるらしい」

時代。

そんなものにどうやって抗うのか。

……かつて、滅びたGの人々もそう感じたのか……？

この世界に来たのは自分を知るためだ。

手がかりのない過去。

再び感じた軋み。

それを知るためにこの世界に来た。

異世界だ。

自分の世界の常識が通用しないとしても、

……こんな事があっていいのかよ

あんな無垢な少女が死んでしまうよう世界。

そんなの終わっている。

「……なら、この先どうなるんだ？」

「……おそらく、そう遠くないうちに皇帝が死に乱世になるじゃろ
う」

それはきつと間違いじゃない。

その乱世を描いたのが『三国志』なのだ。

なら、自分はどうするべきなのか。

「竜人、お主これからどうする？」

「あんたは？」

「老いぼれの身じゃ。もうすぐ死ぬ爺にそんな仮定は無意味じゃろう」

「じゃが、

「夜が明けたら、村に戻る。そのころには盗賊ども居ないだろうし、死者の弔いもせねば」

「そうか……」

「お主は？」

「俺は……」

考える。どうするべきか。

そして、思い出されるのは旅立ちの時に両親にかけられた言葉だ。

……結局、俺の意思か

「俺は……悪役になろうと思う」

「悪役……？」

「乱世が始まるんだろう？ だったらそれを終わらせてやる。戦いを終わらせて、間違いを見つけ、正せる

ような悪役に。だから、そうだな。まずは仲間を探すよ」

「まあ、大陸は広いからの。そんな酔狂な奴もおるじゃろう」

「真に受けるのか？七歳児の言う事だぜ？」

「お主をただの七歳児だと思っておらんよ。お主がそう言うなら、きつとやり遂げるのじゃろうな」

まったくんでもない七歳児じゃ、と嘆息する白夜。

そこで会話が途切れる。

いくらか時間が過ぎて、

「じゃあ、行くよ」

竜人が立ち上がり、白夜に背を向ける。

「なあ、竜人。もう村には来んのか？」

背中にかけられたその問いに、

「やるべきことをやったら、一度来るよ。だから生きとけ、じじい」

「無茶言いおるの……」

そうして。

老人と少年は、

「ちくばじや」

「ああ。縁が在るからまた会おう」

別れた。

最後に月を見上げ、恋のことを想う。

……ゴメンな、約束守ってやれなくて
その月は嫌になるぐらい美しかった。

少女が走る。

泥だらけで涙を浮かべ、傷だらけで。

どれだけ走ったのか。

足がもつれて転んだ。

「……………！！」

その拍子に服の中に仕舞っていた鎖が飛び出す。
その先には少女には大きい指輪が付いていて、

「……………竜人」

それを見て目を閉じる。

意識が闇に沈む前に誰かの声が聞こえた気がした。

そうして、悪役になりたい少年は歩き出し、

少女と引き裂かれる。
物語は加速する。

第三章 始まりの使者（後書き）

3月4日、修正しました。

第四章 集いし者たち（前書き）

探して、
集めて、
創りだした。

第四章 集いし者たち

その男は貧しい農民の生まれだった。

食べるものも碌にない生活。

それに嫌気がさし村を飛び出たのが五年前。

十八の時だった。

盗賊団に仲間入りをしてから楽になった。

弱い人々を殺していればいい。

盗賊団の中で高い地位とは言えないがそれでも食べていける。

人を殺すことに抵抗などない。

高くない地位も時間の問題だ。

そんな事を思いながら大きな門の前まで来た。

彼が所属する盗賊団は使われなくなった砦を根城にしていた。

時刻は昼過ぎ。

他の連中は先日の略奪の成果に夢中だ。

誰もいなくなった門はいささか不注意だと思うが気にしない。

どうせ自分たちに刃向かうような愚か者はこのあたりにはもういない。

そう高をくくっていた彼は、

「あ、こんにちは」

見覚えのない少女に出会った。

小豆色の服に褐色の肌。長刀を背負っている。

彼女が門を閉じている門を、音を立てずに抜いており、もし彼がここに来なかったら誰も気づかなかっただろう。

「おい、なにを……」

している、と言おうとしたが少女が視界から消えた。
いきなり認識できなくなった、という感じだ。
とりあえず誰かを呼ぼうとして、腹部に衝撃が来て気を失った。

「合図だ！」

盗賊団の砦から少し離れた丘。そこに五百人余りの人々がいた。
その集団の中で少し前に出た数人の内一人が声を上げる。
青い髪に白い服装。朱い直刀槍を持っている。
その視線の先には砦から上がる小さな狼煙だ。
その声に応えたのは黒髪黒目の少年だ。
黒い服装にスカーフ。両手にはグラブがある。
全身黒を基調としているがそれだけが白い。

「ようし、行くか」

彼は前に出て、叫んだ。

「いいか！お前ら、久々の出番だ！」

後ろにいる人たちに向かって、鼓舞するように。

「相手は盗賊！抵抗する奴はぶん殴って、抵抗しない奴もぶん殴れ
！人の心を忘れた馬鹿どもに思い出させてやれ！自分たちは人間だ
ということを！！」

彼は右手を掲げ、音を立てて振り下ろした。

「進軍せよ《ゴー・アヘッド》!!」

テストメント
「Tes・!!」

進軍を開始した。

皆から、狼煙と騒ぎのせいでこちらに気づいたのか盗賊が出てくる。

「ひさびさの戦いだぜ!!」

「気合いが入って何よりですが足元をすくわれないようにお願いしますよ」

「相手が誰だろうと全力で行くのが基本かと判断します」

「そうそう、二度と悪いことができないように犯してやるのが基本だろ？」

『怖いわ!!』

「ふざけてないで、とっと進まんか」

そう言って、前に出たのは先程の青い髪の少女だ。
一人飛び出して盗賊たちと接敵する。

「『全竜』第一特務、趙・子龍！推して参る!!」

朱槍を振るう。

一番前にいた数人が吹き飛ぶ。
それを始まりとして、二つの集団が激突する。

『全竜』

総員五百人余り。

佐山・竜人がその意思を持って進むために十年かけて創りだした
独立部隊だ。

「俺は十七人ぶん殴ったぜ!!」

「僕は三十人くらいですが」

「わたくしもそれほど」

「オレもそれくらいかな？」

「おや、一人少ないのがいますね」

「しかも、数えていたのですか？」

「女々しいなあ」

「おまえら大嫌いだよ!!」

……大分力オスになってきたなあ

戦闘開始より二刻後、つまり四時間後。

『全竜』総長、佐山・竜人は制圧した皆でそんな事を考えていた。横文字を普及させたのが悪かったのか。『T e s .』の意味とか、前世の単語を思いつくままに冊子にしてまとめたのがダメだったか。そのおかげでかなり横文字が普通になってきた。

竜人にとって会話が楽になってきたが、

……なんかノリがU C A Tみたいになってきてるよな

軽く冷や汗を流していたら、

「竜人、官軍に使いを出した。賊どもは引き渡しでいいな？」

「凱さんの治療はあと少しで終わるらしいです」

「ああ、それでいいよ星。報告サンキュー、明命もな」

青い髪に白い服装の少女。趙雲・子龍。真名を星^{せい}。

褐色の肌に小豆色の服装の少女。周泰・幼平。真名を明命^{みんめい}。

本来なら二人とも別々の主に仕える武将だが、いろいろあって竜人と共に行動している。

凱^{がい}というのはイケメンな五斗米道な医者^がの真名だが、今はけが人の治療中だ。

「それで、竜人。賊どもを引き渡したらどうするのだ？」

「何時ものように放浪生活だろうけど、問題はどこを目指すかだな。呉には行きにくいし」

「あつ、すみません。私のせいで……」

明命は呉の出身だ。というか本来なら呉の王に仕えるところを数年前に家出も同然に飛び出てきたので呉には行きにくい。

大きな町に近づかなければ良いだろうが気持ちの問題だ。

「気にすんなよ、明命。俺が連れ出したようなものだからな」

「で、どうするのだ？ 竜人？」

「そうだな……おつ、雛理！」

顎に手を当てて考え出した竜人は視界に映った影に声をかける。
とんがり帽子に水色の髪。

魔女っ子のような服装の小さな少女。

彼女は鳳統・土元。真名を雛理^{ひなり}。

孔明と並び『鳳雛』とたたえられた人物だが現実には、

「は、はひっ！ な、なんでひょうか！」

カミカミだった。

「落ち着けよ。これからの事でちよつとな」

「これから、ですか……」

真面目そうな話に表情が引き締まる。

「そんな堅くなるなよ。次どこ行くかって話だ」

「それなら、この砦の情報と一緒に聞いた話ですけど、北に少し行つたところの村も盗賊に襲われているとか。何でも少ない村人が抵

抗しているようです」

「ならそれで行こう。星、明命、雛理、通達頼む。」

「T e s . だ」

「T e s . です」

「てひゅ、です」

また噛んだ。

真っ赤になって去っていく雛理。

それを笑いながら追う星に苦笑いの明命。

未だ雛理は『T e s . 』が言い難いらしい

一人になり空を見上げる竜人。

首にかけて服に仕舞った指輪に拳を当てる。

あの日から十年たった。

もうすぐ黄巾の乱が始まるだろう。

それを機にして歴史が進む。

だが自分の知るものとは異なるだろう。

超雲や周泰、鳳統が自分の仲間になっている。

これだけでも大きく歴史がずれるはずだ。

それに最近流れ出した『天の御使い』。

おそらく自分の知識道理にはいかない。

だいたい武将が女性になっている時点で無茶苦茶だ。

そんな世界で自分は、

……ちゃんとやれてるか？

心のなかで父と母、そして死んでしまったであろう少女に問いかける。

当然のように答えは無かった。

少年は成長し、仲間を得た。
歴史は加速し、大きく動く。
その先が見えぬまま。

第四章 集いし者たち（後書き）

3月4日修正しました。

第五章 出会いの導き（前書き）

きっかけは戦場。

しかしそれはただの顔合わせ。

ならば本番は何時だろう。

第五章 出会いの導き

「なあ、雛理」

「何でしょう、竜人さん」

「今日は暖かいな」

「そうですね、暑いぐらいです」

「そうだな。なあ、星」

「なんだ？」

「疲れたんだが」

「そうか」

「そうか、じゃな～い！もうず～っと歩いてるんだが！」

天気は快晴。

独立部隊『全竜』はひたすら歩を進めていた。

そのなかで馬に乗っているのは五百人中百人。ほとんどが女性だ。星や雛理も馬だが総長である竜人は歩きである。

「あ～、竜人さん代わりましょうか？」

「サンキューな、雛理。まあ大丈夫だよ」

「そうそう、男はそうでなければな」

「胸から湧き上がるこの感情はなんなのか……!!」

「恋だろう」

「あほか!!」

叫んだらまた疲れが増した気がした。

「まあ、そう言うな。ほれ、後ろをってみろ。みんなまだ元気だぞ」

言われたとおりの見てみれば、

「おい、やったぜ。おれの馬に例の彼女を乗せられたぜ」

「マジか。艶本の言うとおりにして良かったのか？でも、待てよお前が参考にしたのって

『釣りまくってやるよタイシジくん』だろ？あれ最後は“ばつどえんど”ってやつだぜ？」

「なにい?!」

そんな会話があちこちでされていた。

「いつもどおり過ぎて、いっそすがすがしいよ」

「だろう?」

そんなくだらない会話をしていたら、

「おしゃべり中、申し訳ございません。先行した第二特務から連絡です」

現れたのは侍女服に身を包んだ女性だった。

紅色の長い髪。

竜人達より少し年上の彼女の名は椿^{つばき}。

事情があつて姓名も字もない。

ちなみに、侍女服は竜人が作成したものである。

「明命から？どうした」

「この先、六里ほど離れたところで戦闘が。おそらく義勇軍と黄巾党です」

「なに?!」

「てか、明命どれだけ先に行つてるんだよ!」

「いえ、第二特務自身は四里ほど先です。そこから連絡がありました」

「二里先が見えるとかどんだけだよ……」

一里は大体400メートルである。つまり彼女は一キロ近く先が見えているという事だ。

「どうしますか？竜人さん」

「決まってる」

「うむ」

「そうですね」

三人とも笑みを浮かべる。

「では、」

「ああ、いくぞ。明命にすぐに追いつくって連絡を」

「Tes .」

竜人は後ろを振り向き、

「走るぞー!! 第二特務に追いつくまでに馬を貸してる奴は返しても
らえー!!」

彼らは慌てながらも、

「Tes .!!」

答えた。

「くっ……雑兵とはいえど、さすがに数の違いがあれば手強いか…」

…っ！」

青竜偃月刀を振りながら関羽・雲長は言葉をこぼす。
公孫賛を黄巾党討伐のために出て、その目的通りに黄巾党と戦いを始めたが数の差で苦戦していた。

「関羽様！このままでは前線が崩れるのも時間の問題です！」

「分かっている！しかし後方の陣地で戦況を観察している敵を引き出さなくては意味がないのだ！」

……やはり、厳しいか……！
だが引けないのだ。
踏ん張るしかない、そう思った時に、

「おい！こっちに女が居るぞ！」

「おお、上玉じゃねーか！ぐへへ、野郎ども！ひん剥いちまおうぜ
！」

……下郎が……！
偃月刀を持つ手に力が入る。

「おうよ！姉ちゃんの身体に俺様の槍を――」

「あきれるほどに雑魚“きゃら”ですね」

突如青年が現れた。
細身の体だが身長は高い。
黒い髪を伸ばして背中にくっっている。

「なんだ、てめーは!？」

「あなた方に名乗るような名前はありません」

そう言つて、その手に握つていた両刃剣を振るう。

「ひっ!？」

叩き斬つた。

そして関羽のほうを向いて、

「『全竜』副特務、双狭そつさ・簾外れんがいと申します。我らが意思のもと助太刀させていただきます」

言い放つた。

「え?なにになに?」

「竜の旗、もしかして『全竜』!？」

義勇軍の後局。

劉備・玄徳と諸葛・孔明は混乱していた。

劉備は突如現れた集団に、孔明は幼馴染が居るであろう部隊の旗の出現に。

だが、孔明はすぐに思考を切り替える。

「桃香様！すぐに本隊の半分を前線に投入しましょう！」

「え……？う、うん分かった！行くよ！みんな！わたしについてきて！」

部隊を率いていった劉備を見送った孔明は、

「雛理ちゃん……」

そう、言葉を漏らした。

それよりいくらか離れたところ。

一軍を引き連れた者たちが会話をしていた。

「華琳様。西方に砂塵を確認しました。……恐らく黄巾党とどこかの軍が戦っているのだ
と思われます」

短めの青い髪、長身の少女。

「そう。この辺りの敵に目を付けたとなると、その部隊、官軍では無さそうね」

華琳と呼ばれた金髪の少女。

「恐らくは。……主戦場より離れた地であるのに、戦略上、重要な拠点となりうるこの場所に目を付けるなど、愚昧な官軍にできるはずがありません」

ネコミミのようなフードをかぶっている少女。

「諸侯の中にも、なかなか見所のある人物がいるという事でしょうな」

「ふむ……。一度顔を見てみたいわね」

「伺いますか？」

長い黒髪に長身の少女。

「そうね、だけどまずは――」

「目の前の事を終わらせよう」

そう、口をはさんだのは、

「分かっているわ。春蘭、秋蘭」

「はっ！」

「は……」

「羨のなっていないケダモノに、恐怖というものをおしえてあげなさい。それと一刀。私の言葉に割り込むのはやめなさい」

「はいはい」

一刀と呼ばれ、この場所どころか時代にも似合わないどこかの学校を着て日本刀を提げた少年だった。

少年が会おうときは近い。
理想を追う者と霸王。
そして、天の御使い。

第五章 出会いの導き（後書き）

序章を修正しました。

星や明命、雛理たちの過去話はその内番外編でやります。

3月4日、修正しました。

第六章 自分と相手（前書き）

それは鏡像で。

それは同一で

それは対極。

第六章 自分と相手

「助けていただいて、ありがとうございました！」

笑みを浮かべながら礼を言う桃色の髪の少女。
義勇軍の長、劉備・玄德。

「いやいや、礼ならあんた達を発見したこいつに言ってくれ」

明命の頭に手を当てながらそれに答える少年。

『全竜』総長佐山・竜人。

「ありがとうございます。え」と

「周泰です！字は幼平」

「ありがとう、周泰ちゃん」

「いえ、おかまいなく！」

竜人たち『全竜』と劉備たち義勇軍は戦いの後、放置された陣地へと侵入していた。

そこで、陣地の調査をしながら主なメンバーの顔合わせをしていた。

「じゃ、改めて。『全竜』総長、佐山だ。字とかなし」

「第一特務、趙雲・子龍だ」

「第二特務の周泰・幼平です」

「第三特務、鳳統・士元です……」

「劉備・玄德。一応、義勇軍の長をやってます」

「関羽・雲長だ」

「鈴鈴は張飛・翼徳なのだ」

「軍師の諸葛亮・孔明です……」

一通りの自己紹介が終わり、

「あの、とくむ」ってなんですか？」

「役職だよ。ウチは総長の俺、それから特務が四人、副特務が六人。あとは下っ端だ」

最後の一言に周りの下っ端どもがうるさいが気にしない。

「ん……？てか、凱は？どこ行っただ？」

「決まっておろう。負傷者の手当でだ。ここに来る前に一箇所に集めといたと言ったら、一目散に走って行っただぞ」

「顔合わせぐらい来いよ……。まあ、あと一人特務がいるんだが。雖理、見てきてくれ。忙しいようなら、手伝いも」

「ひゃ、ひゃいー」

突然指名されて噛みながらも呼びに行った
その時に、

「雛理ちゃん……」

孔明が小さく呟いたのは誰も気づかなかった。

——と、雛理が出て行ったのと入れ替わりで、

「申し上げます！」

劉備軍の兵士が駆け込んできた。

「はいはい。どうしたの？」

「なんかあったのか？」

竜人の疑問に、

「南方に官軍らしき軍団が現れ、我ら両部隊の指揮官にお会いしたいとのことですよ」

「どわあー!!」

椿だ。

『全竜』副特務兼侍女部隊隊長でもある。

「おやおや、どうなされました？そんなに驚いて。何も驚くようなことはない判断しますか？」

「したよ!!」

「官軍らしき、とはどういうことだ?」

竜人と椿のコントはほっというて関羽が話を進める。

「それが……通常、官軍が使用する旗を用いず、曹と書かれた旗を掲げているのです」

「……官軍を名乗りながら、官軍の旗は用いず。……恐らく黄巾党征伐に乗り出した諸侯でしょうね」

「曹と言えば許昌を中心に勢力を伸ばしている、曹操様かと判断します」

「曹操ね……」

曹操・孟徳。

乱世の奸雄、治政の能臣と云われ、自身も兵法家でもある三国志を代表する英傑だ。

……でも女の子なんだろうな

いままで会ってきた有名な武将は皆少女だった。

もう全員女になっている気がする。

……小男らしいしロリキャラなのか?

「知ってるんですか?」

「いや、知らない」

「だが、噂では自他共に誇りを求めるらしいぞ」

「ん？よく知ってるな、星」

「噂好きな性分なので。あれですよ、“ぱぱらっち”」

「それはなんか違うぞ……」

「誇り？誇りってどういう？」

という劉備の問いに答えたのは竜人でも星でも明命でも椿でも関羽でも張飛でも孔明でも、ましてここにはいない離理でも赤い髪のイケメンな医者でも無く、

「誇りとは、天へと示す己の存在意義。誇り無き人物は、例えそれが有能な者であれ、人としては下品の下品。そのような下郎は我が覇道に必要なし。……そういうことよ」

金髪のロリキャラだった。

「ほわっ？びつくりした！？」

「誰だ貴様！？」

関羽があからさまに警戒する。星や明命も武器に手を置いていた。それらを制しながら、

「曹操、だろ？」

「貴様、無礼な！」

横に控える二人の少女の内黒髪の方が声を荒げる。

「やめなさい春蘭。なぜわかったのかしら？」

「このタイミングで現れるのは曹操しかいないだろう？」

「“たいみんぐ”？」

「場面とかそういう意味だよ」

曹操は少し考えるそぶりを見せながら、

「あなたは？」

「『全竜』総長、佐山だ。字は無い」

「『全竜』……。そうあなた達が噂の……。そちらは？」

「あつ、劉備って言います」

「劉備。……良い名ね。あなたが義勇軍の方を率いていたの？」

「はい。一応」

その答えが気に入らなかったのか、眉間に皺をよせる。

「一応？それは一軍を率いる長が言つべき言葉ではないわね。兵たちはあなたについてきてるんでしょう？ならばもっとはっきりと言
うべきだわ」

「あ……、すいません」

「私に謝ることでは無いわ」

シユンとなる劉備。

関羽が反論したがっているが、もっともなことなので反論できない。

空気が重くなり、沈黙が降りる。

それを変えようとして、竜人が口を開こうとして、

「こらこら、華琳。いじめちゃダメだよ」

突然、少年が現れた。

苦笑を浮かべて。

いきなりの登場に劉備は驚き、ほかの者は体を強張らせる。

そのなかで、竜人は彼と目があった。

違和感。

そんな感覚を竜人は感じた。

まるで、鏡を見ているようで。

/『あいつら』とは違う。

初めて会ったはずなのに、

/模写のように相似でありながら

近くも遠かった『あいつら』とは。

他人の気がしない。

/そうか、『あいつら』こんな気

持ちだったのか。

彼はこの時代には不釣り合いなどこかの学校の制服に日本刀。

/実におかしな感覚である。

自分は黒ばつかの衣服に白いグラブ。

／＼どこもかも違つといつのに。
共通点なんて髪と目の色くらいなのに。

——自分を見ているようだった。

眩暈がした。

何か知らないものが頭に浮かんだ。
それでも、彼を見据えて、

「よう、何者だ？そっくりさん」

「こっちのセリフだよ」

「……竜人？」

「一刀……？」

自分は星から、向こうは曹操から声をかけられる。
それに二人とも、

「なんでもない」

口をそろえて言った。

それを怪訝に思いながらも、

「改めて名乗りましょう。我が名は曹操。官軍に請われ、黄巾党を
征伐するために軍を率いて転戦している人間よ」

「俺は北郷・一刀。字とかはないから」

「あのう、竜人さんそれって……」

「ああ、俺と同じだな……。おい、一刀。そんなの目立つだろ。大変じゃね？」

「別にそうでもないよ。華琳の方が目立つし。ていうか君もか？」

「ああ、佐山・竜人。それが俺の名前だ」

その名乗りに曹操が反応する。

「貴方も字が無いのかしら？」

「そうだ」

「なら、あなたも天の国から来たのかしら？」

天の国。

それから連想できるのは、最近よく聞く、

「天の御使い……」

「それ、俺なんだよ」

孔明の呟きに一刀が答え、全員に驚きが走る。

「天の国なんて知らん」

あの世界は芳醇な世界だったが、天の国というより変態の国だった。

「そう。……春蘭、秋蘭」

いままで黙っていた二人に声をかける。

「はっ」

「部隊に戻り、進軍の準備をしておきなさい」

「御意」

陣地を出ていく二人。

それを最後まで見届けずに、

「佐山・竜人、それに劉備と言ったわね。あなたたちの目指すものは何？」

先に答えたのは劉備だった。

「……私は、この大陸を、誰しもが笑顔で過ごせる平和な国にした
い」

みんなが幸せ。

その理想は誰しもが一度は願うだろうけど、決して叶う事のない
願い。

その願いを劉備は語る。

「……それはきつと無理だろう」

思わず口からこぼれた。

なぜだろう。そんなことはないはずだ。

滅びた十一のGの人々だって、最後にはLOWGで幸いを得たはずなのに。

「そうかもしれない。でも私は——」

彼女は胸を張って、

「――私はそういうふうになんて生まれてきてしまったから。だから諦めません」

そう、宣言する。

それに得心がいったのか、曹操はゆっくりと頷き、

「ならば、劉備よ。平和を乱す元凶である黄巾党を殲滅するため、今は私に力を貸しなさい」

傲慢では無く威厳。

そう感じさせる声で続ける。

「今の貴女には、独力でこの黄巾の乱を鎮める力はないでしょう。だけど今は一刻も早く暴徒を鎮圧する事が大事。……違つかしら？」

「その通りだと思う……」

「それが分かっているのなら、私に協力しなさい。……そう言っているの」

「え、でも……」

不安そうな瞳を浮かべる劉備に、

「大丈夫。悪いようにはしないからさ」

「受けるべきだと思います。桃香様。曹操さんの言う通り、今の私たちには独力でこの乱を鎮める力はありません。ですが、力のある人と協力すれば、もっと早くこの乱を治めることができます」

「賢いわね。あなた」

「はわわ」

軍師として言うべきことは言ったのだが曹操の声をかけられて関羽の後ろに隠れてしまった。

曹操は竜人の方を向いて、

「佐山・竜人。あなたはどつするのかしら？劉備のようにな正義の味方になるのかしら？」

正義の味方。

その単語に思わず苦笑する。

星も明命もだ。

「いや、ちがうな。俺はね、悪役になりたいんだ」

「悪役？」

曹操が眉をひそめる。
劉備たちも同様だ。

「そう。間違っていて正しくありたいと思いながらも、間違ったことを自分に課している、そんな悪役に」

「それは……なぜ？」

「憧れと契約」

本当は死んでしまった彼女への贖罪もあるけれど。

「そう、他の二人も同じかしら」

星と明命も問われ、

「ああ。それ以外が無いとも言えないが」

「はい」

「そう、それなら私たちの道はぶつかるかしら」

「さあな、その時は容赦しないぜ」

「悪いけど華琳の敵になるならこっちも容赦しないよ」

一刀が曹操を庇うように前に出る。

「おいおい、そんなこと俺たちの間じゃあ当たり前だろう？」

一触即発の空気が流れ、

「行くわよ、一刀。もう用は無いわ。共同作戦には軍師同士で話し合いなさい。そして言葉ではなく、その行いで人の本質を理解しなさい」

「言われなくても」

「劉備に行ったのよ。さようなら」

「じゃあね、そっくりさん」

「ああ、縁が在るだろうからまた会おう」

曹操と一刀が去った。
沈黙が降りる。

「じゃあ、俺らも撤収するわ」

「ええ！？一緒に来ないんですか？」

「うん。星、明命、椿……はもういないか。撤収準備」

「T e s .」

準備に向かう二人。

「じゃあな、劉備。縁が在る……かどうかは分からないけど多分在るだろうかまた会おう」

そう言って去って行った。

あつという間に。

『全竜』五百余名は陣地を出て去って行った。

「なんか変な人たちだったね」

劉備の一言は皆の思いだった。

少年は英傑たちに出会った。

そして、ありえない人物との出会い。

また一つ物語は進む。

第七章 戦の前（前書き）

死ぬ伏線を張ったのなら、
その倍の数の死ねない伏線を張れ。

第七章 戦の前

「そういえば。竜人さ〜ん」

「なんだ〜?」

例によって快晴。

明命が竜人に問いかける。

「この前の本郷って人と知り合いなんですか〜」

「いいや〜。初対面〜」

「なら、何であんなに仲良さそうだったんですか〜?」

「それは——」

考えてみる。

それは、『あいつ』は鏡に映したように同一でありながら逆反対だから。

唯一にして絶対の違いがあるとするならば。

ただ、すべてを拒絶したならば自分に。

ただ、すべてを内抱するならば『あいつ』に。

どちらを選択したかだ。

一目見て、そう分かった。

だから——。

「——知らんよ〜。何でかな〜?」

「はっはっはっは。我らが総長は相変わらずですな」

「はい、それでこそ竜人さんですね」

そんな竜人、星、明命、雛理の会話に、

「な、何をのんきに話してるんですか!？」

銀髪に肌に幾多の傷跡を刻んだ少女、楽進・文兼。

「せやせや!頭おかしいんとちゃう!？」

紫の髪に水着のような服装の少女、李典・曼成。

「そうなの!状況をよく考えるの!」

茶髪にお洒落な服装の少女、于禁・文則。

……状況ね

言われた通りに考えてみる。

昼前にこの村に到着した、『全竜』。

活気がなく、話を聞けば黄巾党どもに何度も襲われているという。詳しい話を聞くために村の代表という三人の少女と昼飯も兼ねて町の食事処に行ったのだが、

「おいおい、兄ちゃん。何余裕こいてんだあ？」

「びびって頭おかしくなっちゃったんじゃないか」

「ちがいないえ!」

がつはっはっは、と笑う二十人ほどの黄巾党ども。

そう、竜人は黄巾党どもに絡まれていた。

前回の戦いから紛れ込んでたらしくいきなり現れた。

その上での会話だ。

竜人のことを知らない者であれば、正気を疑うのも当然である。

もつとも。

竜人の事を知る者、例えばここにいる星や明命、雛理からすればこの程度のこと脅威でも危険でもないと分かるのだが。

その上での余裕だ。

「あゝ、あんたら。やめね？こういつの。いまなら許してやるぜ？」

そう言った竜人に黄巾党どもは笑い声を上げて、その内の一人が拳を振りかぶり、

「なめてんのか！？」

その様子に楽進たちが飛び出そうとして、

「まあ、待て」

星が止める。

「な、何故ですか！？あのままでは――」

「大丈夫ですよ」

「大丈夫やないやろ！」

「そうなの！いくらなんでも……」

明命が諭して、

「まあ、見ておいとくだひゃい」

離理が噛みながらも前を向いた。

楽進・文兼。真名を風。

彼女の視点の先。

……え？

竜人に殴りかかった黄巾党の動きが止まった。

ただ止まるのではなく、視界から竜人が消え去ったように周りを
見回している。

他の黄巾党も同じ様子だ。

だが、竜人はなにもしてなかった。

ただ、竜人は殴りかかってきた黄巾党に近づく。

なのに、誰も気づかない。

竜人がその黄巾党の腹に拳を当てるまで彼らは気付かなかった。

「な……」

「吹っ飛べ」

吹っ飛ばした。

そこからは傑作だった。

竜人が降伏を促し、それを無視した黄巾党は竜人を見失い、見つけた時には吹っ飛ばされる。

それを繰り返して、

「あ……、全員のしちまった……」

そう言つて、困っていた。

「“歩法”ですか？あつ、しょう油とつてもらえますか？」

「ああ、俺の知り合いの故郷の技でな？簡単にいえば、相手の全感覚とかを自分の分だけずらすんだ。そうすると相手が認識できなくなつて“見えているのに見えない”っていう状況になるんだ。ほら。」

「ありがとうございます。でも、そんな簡単なことではないでしょう？」

「まあな。ウチでも使えるヤツは数人だけど、ちょっとコツをつかめば誰でも使えるぜ。麻婆豆腐、回してくれ」

「どうぞ……。そうですか。勉強になります」

黄巾党をのした後、竜人達は最初の予定通り、昼食を取っていた。そこで拳士どうし、話に花を咲かせる竜人と楽進。

それを、

「凧ちゃんがあんな風に話しているなんて驚きなの」

「ほんまやな。しかも初対面の男と」

驚きながら二人を見ている于禁と李典。

「いかん。いかんぞコレは」

「はい。これが“ふらぐ”ってやつですね」

「あわわ。ど、どうしましょ」

コソコソ相談している星たち。

それに気づかず、拳士談議を続ける竜人たち。
そこに、

「おお！ここにいたか皆！」

現れたのは、赤毛に青年。

華陀・元化。真名を凱。

今まで話にだけ出てきたイケメン五斗米道な医者である。

もともとは流れの医者だったが、今は『全竜』の第四特務だ。

「凱？めずらしいな。治療はいいのか？」

「ああ、一段落ついた。それよりも……」

「じゃまをする」

そう言って入ってきたのは、

「夏侯淵・妙才だ」

「許緒・仲康でゝす」

……予想外の人物がでてきたな
曹操の側近、夏侯淵。

その彼女の部下であろつ、許緒。

あの曹操の部下だ。

一筋縄ではいかないだろう。

そう思い口を開く。

「驚いたな。まさかこんな所であんたと出会つとは」

「この村の事は前から報告があつてな、先遣隊として私と許緒が来たのだ」

「てことは、曹操とか一刀も来るのか？」

「ああ。まあ、数日後になるだろうがな。」

「なるべく会いたくないな……。よし、さつさと終わらせよう。楽進、説明頼む」

「あつ、はい」

指名された楽進は背筋を伸ばし黄巾党どもの説明を始める。
曰く、

敵は雑兵だが、数が一万もいること。

村の東西南北の門に城壁を築いて、なんとか防いであるということ。こちらは、近隣の村からなんとか集めた義勇軍千人弱ということ。大事なのはこの三つだった。

「難理、どうだ？」

竜人に振られ、

「『全竜』が五百人。義勇軍が千人弱。夏侯淵さんの部隊が千人ちよつと。あわせて二千五百人程ですか……」

「約四倍差。これは厳しいですぞ？総長」

「それに、義勇軍のみなさんは素人です。さらに不利ですよ」

「……夏侯淵。あんたたちは俺らと動くか？それとも」

「おまえたちと足並みを揃えよう。下手に別々に動いて混乱を生むのは得策ではない。基本的に策はそちらの軍師に任せよう」

「そりゃどうも。さて……どうするか」

全員頭を抱える

その中で口を開いたのは、

「もう。難しいこと考えないで、真っ向からぶつかっちゃえばいいじゃないですか」

許緒だ。

能天気な声をだすが、

「季衣、そんな簡単な話では「それにしましょう」……何？」

夏侯淵の言葉に口を挟んだのは雛理だった。

彼女は笑みを浮かべる。

「思いついたか？ 雛理？」

「はい」

不敵に答える雛理。

彼女の作戦。

それは、

「許緒さんの言う通り、皆さんで思いっきりぶつかっちゃいましょう」

数日後。

すでに斥候から黄巾党がこちらに向かってきていると報告があった。

戦いの直前、町の広場に全軍二千五百人が集まっている。

そこで、

「さて、この戦いの責任者として言いたいことがある」

竜人が言葉を紡いでいた。

兵士を鼓舞させるようなものではなく、緊張を取らせるようなしやべりだ。

「誰も、こんな戦いが好きな人はいないだろうな。甘い考えだろうけど」

皆は聞いた。

「だけど、精一杯生きることには価値を認めるならば、行き切らねば死んでしまう戦場は、価値だらけの場所なんだろうと俺は思う。――今回の皆の参加が自由か強制かは解らないけど、参加したなら前向きに行こうぜ。己の得る価値だけ見れば、戦いは十分な舞台だ」

腹ごしらえをし、配布された装備の点検しながら。

「どうだ皆。死ねない理由は作ったか？伏線はしっかり張ったか？その回収の準備は出来たか？危険な時に救ってくれる友は？絶望したときに叫ぶ名はちゃんとあるか？いざというとき、逆転する隠し玉は？俺が英雄だと、安っぽいけど高らかな信仰を持っているか？そして何よりも――」

皆は聞いた。

「――帰るところはあるか？登場人物たち？」

誰もが頷き、

「なら、策を示そう。俺は進展のない話のつくりは嫌いでさ。やは

り山有り谷有りの、どんどんと盛りがっていく話が好きだ。だから――」

言う。

「真っ向勝負だ」

息を吸う。

「全軍を東西南北四か所の配置、分担し真っ向から叩く。賊どもを倒しきった所から他の箇所の手援に行く。何、安心しろよ。命令はたった一つだ。“進軍、進軍、進軍せよ《アヘッド、アヘッド、ゴーアヘッド》。”だ。意味は分かるか？“進軍せよ”ってことだ。そうしたら、後は俺達『全竜』が全て倒してやるから」

さあ、

「行こうぜ、登場人物たち。返事は分かっているな？」

その言葉を知らない者は隣の者につられながらも、

「――T e s . . . ! !」
テストメント

答えた。

我、契約せり。

戦闘配置

北区代表：佐山・竜人、楽進

西区代表：夏侯淵、許緒

東區代表：超雲、李典

南區代表：周泰、于禁

中央待機：鳳統、華陀

第八章 四つの戦い（前書き）

それは四所四様。

しかし、同じ意志を持って。

第八章 四つの戦い

最初に接敵したのは西区だった。
戦場に矢が飛び交い、剣がぶつかり合う。
その中で、

「どりゃあああああああ！」

鉄球が飛ぶ。

大鉄球・岩打武反魔と名付けられたそれを振るうのは、ピンク色の髪いわだむはんまの小さな少女。

許緒・仲康。

その小さな体から信じられない膂力で黄巾党を蹴散らす。

「張り切っているな、季衣」

「もちろんですよ！秋蘭さま！元気なのがボクの取柄ですから！」

会話をしながらも鉄球は振るわれ、夏侯淵自信も愛弓、餓狼爪で矢を放つ。

戦況は思ったよりも良い。

『全竜』が予想以上だった。

四か所に配置された兵は中央に百人を残し、六百人ずつ。

その内『全竜』は百二十人ほど。

彼らの戦いを見るに、

……個人の能力が高いな

少数精鋭の利点か。

自軍の兵士よりも能力は高い。

その上、

「おい！デコ“ろり”ボクっ子だぞ！？」

「さすがは曹操！わかってるな！」

「バガが！この“ろりこん”どもめ！隣のお姉さまが見えんのか！？」

「見ろ！あの眼差し！思わず震えちまうぜ！」

「この“どえむ”が！どっちかいいかなんて今はいいだろ！？」――模写部隊に任せて後でじっくり話し合おう」

「いい考えだ！」

変態度も高かった。

……というか模写部隊ってなんだ
そんなことを考えていたら、

「あつ！秋蘭さま、危ない！」

矢が飛んできた。

慌てて避けようとして、

「問題ないと判断できます」

新たに飛来したナイフが撃ち落とした。
それを為したのは侍女服に紅色の髪。

「お初……ではないですが、自己紹介を。『全竜』侍女部隊隊長兼

副特務、椿と申します。お怪我は？」

「ああ、大丈夫だ。助かった。しかし、何故侍女がこんな所に？」

「そうですよ！危ないです！」

「問題ないと判断できます」

前に出る。

彼女を追うように出たのは、同じく侍女服に身を包んだ少女や女性。

「『全竜』侍女部隊、総勢三十七名。ここにいる意味をお伝えしましょう」

戦場には場違いの者たちは、

「武装用——意——！」

「Tes・……！」

武装する。

椿もナイフを手に持ち、

「さて、皆さま。我らは侍女。主に仕える人形の花にございます」

戦場の中で歌うように。

「行きましょう。我らが侍女部隊。主に見つけられた花よ。」

朗々と。

「もし、我らを摘み取るというならば、お忘れなきようございます。
美しい花には棘があると」

構え、

「それでも、ここを進むと言うならば——主に代わり討たせて頂きます」

投擲した。

侍女たちの刃が咲き誇る。

走り、近づき、刃を振るう。

彼女たちはまるで歌を歌うようにその力を行使する。

その力は他の『全竜』たちにも劣らない。

「すごい……」

横で季衣の驚く声が聞こえる。

同感だ。

「おや、どうなされました？そんなところで」

いつの間にか戻ってきて、何食わぬ顔で話しかける椿。

「いや……。素直に驚いている。まさか侍女が戦うとは」

「それは古い考えですね。我が主は常に最新です」

自信満々にそう告げる彼女に思わず笑いが込み上げてきた。

「ふっ、そうか。なら我々も負けてられんな。行くぞ！季衣」

「はい！秋蘭さま！」

「おやおや、さすがの元気ですね」

戦場に鉄球と矢と刃が往く。

東区。

そこを任されたのは、趙雲と李典。

しかし、李典こと真桜にはほとんど出番がなかった。
なぜなら、

「ハイハイハイハイハイハイ……！！」

「オラオラオラオラオラ……！！」

叫びながら戦う二人が凄すぎたからである。

一人は趙雲。

直刀槍・龍牙を振るうその姿はまるで流星。

戦場を縦横無尽に駆け回る。

もう一人は、『全竜』の副特務、章丞・西寡しやうじゆう せいしかという少年。

赤い髪のが振るうのは『鉄腕』という名のトンファーだ。

叫びながら繰り出される打撃はまるで濁流。

歩みは速くなくとも、黄巾を吹っ飛ばす。

「アカン、出番がないわ」

「そんなことないですよ」

「おわぁ！」

声をかけられて見れば長い髪青年、副特務の双狭。

「第一特務はともかく、あれはかなりの馬鹿ですから」

「どういうこっちゃ？　というかウチの驚きは無視か？」

突っ込みを入れつつも章丞を見れば、彼は打撃を止めこちらに来て、

「紅連！　飽きた！」

そんな事をのたまった。

紅連というのは双狭の真名だろう。

……ええー

真桜が引いていたら、

「おちつてください、夕。今何人倒しましたか？」

「ああ！？　そんな事数えてねえよ！」

「おそらく第一特務も同じでしょう。ですから今すぐに第一特務の所まで行って勝負を持ちかけましょう。それならやる気が出るでしょうっ？」

「おお！良い考えだ！さっそく言ってくるぜ！」

戦場で何言っただ。

そんなことを考えていたら、

「李典さん。僕たちは少し下がります。ここはあの二人に任せて大丈夫でしょう」

「ああ……ていうかアホやな」

「そうですか？かわいいものです」

そう微笑みながらいう双狭は、

「アンタ……もしかしてコレなんか？」

手の甲を口元に当てる。

「失敬ですね……」

「せやな。悪かった」

「僕は黒髪巨乳にしか興味ありません。ああ、この前会った関羽様は良かったですね」

コレではなくても変態だった。

南区。

ここは最も異様な戦場だった。
最も形容しづらいのである。

義勇軍達が刃を振り、夏候淵の兵が矢を射る。
その中で。

ここに配置された『全竜』は周泰が率いる隠密部隊だった。
隠密とは密かに事を為すことである。

故に、彼らは正面から剣をぶつけることなど無かった。
密かに接敵し、密かに攻撃し、密かに離れるのである。
駆け抜けるのではなく、すり抜ける。
それを最も実行したのは、

「さすがに数が多いですね」

「いやいや、これだけいれば殺り甲斐があるってもんだよ」

目の前の二人である。

周泰・幼平。

そして、副特務、弥当・期來。

物騒な事を言う短髪の青年。

閃刀・戒という直刀を振う。

歩法。

それがこの二人の強みだ。

気付かれないが故に無造作に近づき、
気付かれないが故に無造作
に武器を振り、
気付かれないが故に無造作に命を刈り取る。

……私、いる必要ないかものゝ

地道に双剣・二天を振う于禁こと沙和は考える。
奇しくも東区で真桜が考えていることと似ていた。

「しかし、これはやっぱりいけるんじゃないか？」

「油断は禁物ですよ、刃さん^{じん}」

刃は弥当の真名だろう。

「だってさ、弱すぎだろ。いいかげん飽きるだろ。きつと夕あたりはもう飽きてるよ」

「さすがにそんなことはないと思いますけど……」

弥当の予想は当たっていたのだが。

「あの〜。しゃべってる場合じゃないの〜」

「そうですよ。刃さん真面目にやりましょう」

「明命だってしゃべってたじゃん……」

そんな感じで、再び戦場に身を投げる。

周泰と弥当は誰にも気づかれぬが故に無造作に、沙和は地道に刃を振う。

北。

城門を二軍が守護。

残りの一軍が攻撃。

それを交代して、疲労を軽減する。

その中で、常に最前線に出て戦い続ける二人がいた。

佐山・竜人と楽進・文兼だ。

二人は背中合わせで戦う。

竜人は手のひらから。

楽進は足から。

それぞれ気弾を撃つ。

「さすがですね、佐山さん。気弾まで扱うとは」

「長年の研鑽の結果だよ。楽進だって使えるじゃん」

「いえ、佐山さんには敵いません」

「いや、なんか照れるな」

そう会話をしながらも動きは止まらない。

拳を振り、蹴りを繰り返す。

そんな二人に、

「総長、乗ってんな」

「やっぱり拳士同士、話が合うんだろうな」

「でもよ、やっぱりこれは……」

「ああ、あれだな」

「うむ」

『“ふらぐ”が立った!』

そんな会話がされているとは知らずに、共に拳を振る竜人と楽進…… 楽しい

そんなことを考え自分は不謹慎だろうか。
自問しながらも楽進こと凧は脚を蹴りぬく。

「楽進、まだ大丈夫か？」

「はい! まだまだいけます!」

「ようし、そんな楽進にいいもの見せよう」

そういつて竜人は近くの黄巾の足を払って体を浮かせる。
浮いた胴に拳を当て、

「……!!」

拳をぶち込んだ。

それを受けた黄巾は後ろにいた三十人余りを巻き込んでぶっ飛ぶ。
見れば、竜人の足元が陥没していた。

先日、黄巾党を倒した技だろうが威力が段違いだ。

「すごい……!」

「気と体術の組み合わせだ。 楽進もできるとおもっぜ」

「そうですか……。あとで教えていただけますか？」

「ああ、いいぜ。けどその前に……」

「はい……」

「この戦いを終わらせよう！」

「この戦いを終わらせましょう！」

戦場はより過激に。

英傑たちの戦いは加速する。

しかし。

それでも数の差は大きい。

それは疲労を生む。

それが最初に明らかになったのは楽進だった。

開戦より数時間。

体から力が抜けた。

竜人と同じペースで戦っていたのだから当然だ。

そこに馬鹿デカイ斧を振りかぶった男が来た。

それは楽進を捕え、しかし横から押しのけた竜人に軌道が重なった。

それが振り下ろされる直前。

竜人は目を閉じなかった。

そして――

「何やってんだよ、竜人」

振り下ろされる事は無かった。

少年が日本刀でその斧を受け止めている。
突然の登場に周りが硬直する。
その中で当り前のように、

「もしかして、俺の出番の為にわざとやられたのか？」
「感謝しろよ。つーか」

そう言いつ一步前に出る。

少年が斧を弾く。

竜人は前に出て、少年は納刀。
ぶん殴った。

抜刀。

斬られながら殴られてぶっ飛ぶ。

「遅いんだよ」

「いや、靴ひもが切れてさ。代わりを探して遅くなったんよ。君が
居たからだったんだな」

「おいおい、言いがかりだぞ」

名前を呼ぶ。

「一刀」

鏡像の二人。
ファーストコンタクト
確認の一度目の邂逅

共闘の二度目の衝撃

セカンドインパクト

第八章 四つの戦い（後書き）

三月二十日、修正しました。

第九章 誘いの意味（前書き）

言われて行くのと

自分で行くこと。

それは似て非なるもの。

第九章 誘いの意味

その夜。

どの夜かといえば、雞理立案、竜人命名『真つ向勝負で粘って曹操が来たら大逆転だぜフハ八大作戦』が成功して黄巾党を撃退し、慰安と祝勝ムードの夜。

本来ならばすぐにでも曹操に事のあらましを伝えなければならなかったのだが、負傷者の治療に加え、『全竜』が祝勝会をやりだしたために翌日に流れたのである。

そんな夜。

祝勝会の輪から外れた北の城壁の上、二人の少年が月を見上げていた。

黒い髪に黒い目、全身黒の服装、佐山・竜人。

黒い髪に黒い目、どこかの制服、本郷・一刀。

「なあ、『容量過多』——いや、天の御使い」

「なんだ？『虚数空間』——いや、悪役」

「なんで、お前みたいのが曹操だけに仕えてるんだ？」

「君こそ、なんで『全竜』なんか率いてるんだ？」

「全てを受け入れるだけなんだろう？」

「全てを拒絶するだけなんだろう？」

二人は一度を言葉を切り、

先に口を開いたのは竜人だった。

「どれだけ拒絶してもそんなことお構い無しの人が多かったんだよ」
「そりゃすごい」

「だろう？そんな人たちに囲まれてたら、拒絶するなんて忘れたよ」
「なるほど。ん？それが『全竜』を率いる理由なのか？」

「いや、それはまた別だな。二年ぐらい暮らしてた村があったんだけど賊に襲われてな。全滅だったんだ」

「復讐」

「贖罪だよ。約束した女の子への」

「それが理由か」

「ああ。あともう一つ、俺はその女の子のことが」

「女の子のことが？」

「好きだったんだよ」

「好きだったんだ」

「今でも好きだ」

会話が途切れる。

次の言葉を聞いたのは一刀だった。

「昔からテキトーに受け止めて、テキトーに受け入れてきたんだけどさ。華琳ってさ大きかったんだよ」

「見るからにロリキャラだったんだが」

「器がつて意味だよ。さすがは曹孟徳ってことかな？」

「ほほう、さすがだな」

「どうも、俺の容量がパンクしてさ。もう華琳で一杯だよ」

「DM」

「ウチはみんなそうだよ」

「あそ。なんだよそういうことか」

「そうそう。俺は華琳のことを」

「曹操のことを？」

「好きになっちゃったんだよ」

「好きになっちゃったのか」

「それだけだよ」

またまた会話途切れ、

「そういえば、その女の子の名前は？」

「呂布・奉先」

翌日。

「改めて、二人とも無事で何よりだね。損害はそれほど無いようね」

曹操、一刀、夏侯惇、夏侯淵、緒許、楽進、李典、于禁が集まっていた。

「はつ。しかし彼女らと『全竜』のおかげで、防壁も破られる事無く、最小限の被害で済みました。町の住民も皆無事です」

「……彼女たちは？」

「……我らは大梁義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するため、こうして兵をあげたのですが……」

一刀が彼女たちを注視すると、

「あ！」

「あー！」

叫んだ。

「……何よ、一体」

「ほら、華琳。覚えてないか？前に街へ視察に行ったときの、変な絡繰作ってたカゴ屋の子」

「変な絡繰って何やねん！すごい絡繰の言い間違いやろ！」

その会話に曹操も、

「……思い出したわ。どうしたの、こんな所で」

「うちも大梁義勇軍の一員なんよ。そつか……あの時の姉さんが陳留の州牧さまやったんやね……」

その一方で、

「姉者も知り合いなのか？」

「そうなのー。前に服屋でむぐぐ」

夏侯惇が于禁の口を塞いで耳打ちをする。
それに頷く于禁。

「どうしたんですか？秋蘭さま」

「い、いや、何でもないつ。何でも！」

「むぐぐー。内緒にするから、離してなのー！」

騒ぎが収まり、

「……で、その義勇軍が？」

「はい。黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず、こうして、夏侯惇さまと佐山さんに助けていただいた次第……」

「そう。己の実力を見誤ったことはともかく……街を守りたいというその心がけは大したものね」

「面目次第もございません」

「とはいえ……そうね、あなた達わたしの下に来る気はないかしら？」

「はっ……？」

「義勇軍を率いてきたあなた達の能力私の下で行かせると思うだろうけど」

「……」

「どうする？ 屈」

「いきなりすぎて困るのー」

三人が困惑しているときに、

「おお、ここに居たか」

現れたのは赤い髪のイケメンの医者華陀だった。
彼は楽進たちに近寄り、

「ほら、竜人から」

紙の束を差し出した。

「これは……？」

見れば、竜人が見せた零距离の打撃についた簡単な説明とコツが書かれていた。

「曹操について行くなら持つてけ、と」

「まるで私が彼女達を勧誘すると分かっていたような口ぶりね。と
うかあなたは？」

「『全竜』第四特務、華陀・元化。ゴッドウエイド五斗米道の医者だ」

「五斗米道？」ゴッドウエイド

「五斗米道だろ？」ゴッドウエイド

「おお！竜人以外にちゃんと見えるとは！」

なにやら感激している華陀だったが、楽進達に向き直り、

「あと、もう一つ。気が向いたら『全竜』に來いよ、って」

「えっ……？」

「こっちもかいな」

「もてもてなのー」

華陀の言葉に気を悪くしたような曹操。

「今、こちらが勧誘していたのだけれど？」

「何、こちらは勧誘なんかじゃないさ。そついう道もあるってことを覚えていてくれてことだ」

彼は苦笑して、

「というか、俺達は誘われて入った奴なんていないさ。皆、自分の意思で『全竜』にいるんだよ」

「自分の意思で、ですか……」

それだけ言つて、彼は去つて行つた。
そして、

「さて、どうするのかしら？」

「……」

少年と少年の会話。
意味があるのか無いのか。
そして、少女達の答えは。

第九章 誘いの意味（後書き）

短かったです。

原作のままにすると文章が進みになる自分がおかしいと思います。
次の次くらいの星が明命の過去編をやりたいと思います。

第十章 過去へ奉げた槍（前書き）

それは誰かが描いた軌跡
それは誰かが創った奇跡

第十章 過去へ奉げた槍

「これより異端審問を始めたいと思います。なお有罪の場合『異端審問セット三〇〇』から“らんだむ”で断罪いたします」

……なぜこんなことに……！？

楽進こと凧たち三人が曹操の勧誘を蹴り、『全竜』に所属して一週間ほど。

『全竜』は野営中だった。

小川の近くで野営すると決まったら、何かヒッハーとか叫んでいる人達がものすごい勢いで野営の準備をし出したので驚いた。

その天幕の一つ。

故意に暗くして、いくつかの蠟燭で明りを灯している。

そこにいたのは今さっき何やら宣言した椿。

「T e s .」

そして、険しい顔をした星、明命、雛理の三人に居づらそうにしている真桜と沙和だ。

「それでは調査委員長。被告人の罪状を」

「T e s .」

立ち上がったのは明命だ。

彼女は背筋を伸ばし、

「被告人は我ら『全竜』に所属し一週間。ほぼ毎日、竜人さんと鍛

鍊と称し一緒にいます！」

「なっ！それは、純粹に武芸の為で……！」

「被告人は静肅に。もし静かにしない場合これを以って静肅にさせていただきます」

椿は短い棒のような物を取り出す。
それには文字が書かれていて、

「“黙れバカ”。この意味は『全竜』に所属する以上、理解できると判断しますが？」

「う……」

できる。

『全竜』に所属して真っ先に教えられたのだ。
その意味と使い方を。

「では、調査委員長。以上ですね？」

「T e s . ! !」

着席する明命。

次に指名されたのは、

「証言者？、発言はありますか？」

「T e s .」

雛理だ。

「一昨日の事です。竜人さんを訪ねたら、凧さんとの鍛錬でいませんでした。……せつかく新作のお菓子を作ったのに！」

「それは私怨やゴツ！」

「静粛に」

呟いた真桜に棒が飛ぶ。

「ちなみにそのお菓子は？」

「一人でやけ食いました！」

「太りますよ」

「ひゃう!？」

着席。

次は、

「私だな」

「T e s .」

星だ。

彼女は眼を鋭くさせ、

「ここ最近、竜人との鍛錬の時間が少ない。いままでは三日に一回

はしていたというのに」

そこで彼女は声を荒げて、

「とうか！一週間も付きっきりで一緒に鍛錬とか七年も一緒にいる私でも無いぞ！艶本のネタにされる！羨ましい！」

「羨ましいことなのっ!？」

「静粛に」

沙和に棒が飛んだ。

星も着席して、

「被告人、発言は？」

……どうすれば!？

真桜も沙和も沈黙中。

困った。

どうすればいいのか。

思いついた。

「そういえば皆さん竜人さんとどういう馴れ初めで!？」

……あれ、ダメじゃないか？これ

よく考えれば今と関係ない。

これでは沈黙させられる。

……しくじった

そう思っていたが、なにも来ない。

「……」

「……」

「……」

硬直。

沈黙。

星は冷や汗を流し、

明命と雛理はどんよりとした空気を纏っている。

椿はもういない。

……これは地雷をふんだ？

そう思っていたら、

「んんっ。そうだな。では話してやろう」

「いいんですか？」

「ああ。凧も真桜も沙和も仲間になったのだ。気にするな。だが、長い話だからな、終わったらお開きしよう」

そうして、聞いた。

趙雲・子龍の過去を。

その直前、凧は、

……これは無罪放免？

もう七年前の話だ。

少女は北方常山の出身だった。
彼女は幼いころから、

——私の槍でこの大陸を救ってみせる

そう思っていた。

実際、ただの夢物語では無かった。

少女は幼いころから武芸の才能を発揮していた。
ひたすらに武芸を磨き、村の近くの賊討伐には積極的に参加した。
気付けば、村の誰よりも強かった。

そして、少女が何時も通りに賊討伐に参加した時。

転機は訪れた。

例え、少女がどれだけ強くても。

数の前には勝てなかったのだ。

賊を討伐した帰り、残党に奇襲された。

疲弊した所を突かれ、いくらか減らしたが仲間はやられた。

周りにはまだ三十近くいる。

——ああ、死ぬのか

それとも、犯されるか。

どっちもか。

漠然とそう思った。

不思議と怖くは無かった。

ただ、こんな所で終わるのかという行き場の無い思いがあった。
そして

刃が振り下ろされ、

無かった。

見知らぬ少年が居た。

彼が刃を振り下ろした賊を殴り飛ばしたのだ。

恐らく自分と変わらない年齢だ。

——大丈夫か？

答えられずに目を見開いていた。

彼は答えを聞かずに賊たちに向かって、

——来い。痛い目見せてやる

そう言つて。

あつという間に賊どもを殴り飛ばした。

殺しては無いようで、賊どもを縄で縛ってからこっちに来た。

——正義の味方？

思わず口からこぼれた。

その言葉に彼は苦笑して、

——いいや。悪役見習いだよ。

その夜。

近くの川のほとりで野宿をしていた。

二人はたき火を囲んで話をしていた。

彼は大陸を放浪しているという。

——放浪というより迷子だよ。星。

半ば強引に彼女は自分の真名を預けた。
姓名と字を言ったら変な顔をされたが。
少年は佐山・竜人と言った。

字はなく、竜人が真名の様なものらしい。
竜人は方向音痴らしくて三年も迷子らしい。

——どんな迷子だ。

軽口をいいつつも、幼い身で三年も旅しているという事に驚いた。

——何故、旅をしているんだ？

彼は目を細めて、

——俺はさ、悪役になりたいんだよ。

——見習いだったか？

——ああ。

——何故、悪役なんだ？

——憧れた人が悪役だったんだよ。あとは好きだった女の子の為
かな？今はまあ、仲間探しの段階だよ

そう言つて彼は目を閉じた。

よく分からなかった。

だから、知りたくなつた。

——なら、私も手伝おう。

——はっ？

彼が目を見開く。

——仲間を探しているんだろう？なら私が一人目だ。

驚いている彼を置き去りにして、

——我が槍、あなたに捧げよう

その少女の宣言に。

今日初めて会った、

命を救った少女を。

彼は苦笑しながら受け入れた。

その性急すぎる宣言は。

はたから見れば、

青臭い恋だったと言えよう。

視界がぶれた。

いつか、どこかで、少年に槍を捧げた少女の姿が見えた。

「それから、一緒に村を行って何人が共についてきてくれる者たちと旅に出た」

「それが『全竜』の始まりだったというわけなんです」

いつの間にか復活していた真桜と沙和。

「ああ、ではそろそろお開きとしよう。もったいい時間だろう。ほれ、明命、離理行くぞ」

「て、T e s .」

「てひゅ」

噛んだ。

三人は天幕を出て行こうとして、
……無罪放免……でいいのか？

「ああ、それと風。続きはまた今度な」

良くなかった。

第十章 過去へ奉げた槍へ（後書き）

TYPE-MOOM風でお送りした星の過去でした。

いきなり飛んだりしてますが、これからもこんな感じだと思います。

追伸

PV17000アクセス、ユニーク2400超えました。

ありがとうございます。

第十一章 決意への走者たち（前書き）

人はどれだけ

過去を己の峰とするか

第十一章 決意への走者たち

黄巾の乱。

乱世の幕開けとなったそれは官軍では無く、諸侯の力によって終わりを迎えた。

その功績により、

曹操が、西園八校尉に、劉備は平原の相にそれぞれなり。

南方の孫策は独立に向け計画を進めた。

もつとも頭であった張三姉妹は曹操が保護したのだが。

そうして、平和が訪れた矢先に、第十二代皇帝劉宏が崩御。

権力の中枢は董卓・仲頼に握られた。

そして袁招・本初から各地有力諸侯に伝令が飛ぶ。

曰く、都で悪政を布く董卓を討伐せよ。

そして、『全竜』といえば。

黄巾の乱終盤に余り登場しなかった『全竜』といえば。

彼らをよく知らぬ者達は気にも留めず、

彼らを良く知る者達はいぶかしんだ。

その『全竜』総長、佐山竜人といえば。

「敵将、呂布・奉先……ね」

野営中、自分の天幕で。

割とシリアスに悩んでいた。

『全竜』が黄巾の乱終盤に登場しなかった理由。

それは総長、佐山・竜人の不調にあった。

『全竜』のメンバーは特務たちを始め総長、佐山・竜人個人と共
にありうとする者たちの集まりだ。

その竜人が不調となれば。

動きが鈍くなるのは当然だった。

そして、竜人の不調の理由は、
いつかの本郷・一刀との会話にさかのぼる。

「その女の子の名前は？」

「呂布・奉先」

「ん？彼……彼女って死んでたのか？」

「ああ」

「本当に？」

「……」

「呂布・奉先ともあろう人物が簡単に死ぬかな？」

「……」

「もしかして死んでないのかもしれない？死体は確認した？」

「……」

「十年もあれば探せるだろう？歴史を知っていれば。君の俺と同じ
世界から来たのなら」

「……よ」

「今でも好きなんだろう？なんで探さないんだ？」

「……れよ」

「ああそうか。今でも好きだからか」

「……まれよ」

「怖いんだ？十年もほつといたが故に彼女に拒絶されるのが……」

「黙れよ」

拳をぶち込んだ。

鞘で受け止められた。

「凶星？」

「知るか」

「殺るかいい？」

「いいぜ」

立ち上がり、構えて、

「行くよ」

「××、××」

そんな感じで祝勝会の裏で朝まで殺しあつてから。

移動中、

会話中、

鍛錬中。

常に本郷・一刀の言葉が頭から離れなかった。

平静を装つても、悩み事があるのは皆気づいていただろうが、気付いてない振りをしていた。

そうして黄巾の乱終盤に出遅れ、そんな所に来た袁招の伝令。

その中の呂布・奉先の名。

竜人を悩ませるには十分だった。

「……たく、分かつてるんだよ。恋から逃げてるってことは」

どうすればいいのか。

悩み続けていたら、

「竜人！入るぞ！」

星や明命、雛理、凧、真桜、沙和が入ってきた。

彼女達は順番に、

「歯をくいしばれ！」

殴った。

思いつきり。

めちやくちや痛かった。

「何すんだよ!?!」

「決まっているだろう。いつまでもウジウジ悩んでいるからだ」

「……」

愚問だった。

彼女たちが理由も無くいきなり殴るなんて無い……はず。

……ウチは身内に厳しいからなあ

そんな関係無い事を頭のどこかで考えていた。

「いいか?よく聞け。何に悩んでいるかは知らん。だが、一人で悩むな。お前は一人では無い」

これは皆の思いだ、と。

そう星は言う。

それで、思わず。

「昔さ、死んだと思っていた女の子が生きてたらしいんだよ……」

誰かが息を呑んだ。

「それでさ、ちょっとピンチらしいんだよ。どうすりゃいいかな、
つて」

「竜人さんはどうしたいんですか……?」

明命か。

「助けに行きたいけど、怖いんだよ」

「怖い……ですか」

これは雛理か。

「ああ、だってさ。十年もほったらかしだぜ？忘れているかもしれない。憎んでるかもしれない。それが怖くてたまらない。」

「そんなこと……！」

これは風か。

なんか三人とも口調が似ている。

「無いなんて、言えないだろ？」

十年だ。

そんなにも離れている。
忘れられてもおかしくない。

「だから、どうすれば……」

「たわけ！佐山・竜人！」

殴られた。

しかもさつきより痛い。

「お前が憧れた悪役はそんなことに悩むような小物だったのか!？」

それは。

そんな訳がない。

竜人が憧れた佐山・御言ならば例え三千世界の果てまでも新庄・運切の下までいくだろう。

それに彼は一人では無い。

自らの意思を以って集った仲間達がいる。

それは自分にも。

「大体、ウジウジ悩むなんてらしくない。言っただろう！？私はお前を手伝うと！」

星が。

「そうですね、大切な事は自分の意思。それを教えてくれたのは竜人さんで、私が共にありたいと思ったのも竜人さんです」

明命が。

「あの日、私は勝手に貴方を支えたいと思いました。だから貴方も勝手にしてください」

雛理が。

「私達はまだ付き合いが短いですが、らしくないといことは分かります。そんな竜人さんは見たくありません」

「せやせや」

「そうなのー」

凧が、真桜が、沙和が。

『全竜』がいる。

「それに、もしお前の言う通りだとしても要は振られるだけである
う?。」

星はにやりと笑い。

「安心しろ。目の前にお前には惚れている女がこんなにもいる。皆で
慰めてやろう。主に体で」

明命と雛理と風は顔を真っ赤にしている。

真桜と沙和は、いやウチらはまだ、そうなのーまだー、とか言っ
ているのは愛嬌か。

彼女達を見て、

……ああ、そうか

「どうってことないな、俺の恐怖なんて。皆の有難さに比べたら」

そう言っ、て、天幕が出る。

そこには。

当り前のように『全竜』の皆がいて。
皆が笑み浮かべている。

「やることは決まったか? 竜人?」

「ああ」

「どうするんですか? 総長?」

「いや、好きにしようと思ってな。——皆、いいか?」

「おいおい！水臭いぜ！」

「そうそう、今さらだよ」

「今までも好きにやってきたと判断します。——これからも好きにすればよろしいかと」

凱、紅蓮、夕、刃、椿も。

その後ろにいる『全竜』の皆も。
揃って竜人と共にあろうと思う。

「ほら、悩むことなんてないだろう？」

何時の間にか星たちも天幕から出てきている。

「ああ。そうだな」

……悪役になってやる
改めてそう思った。

あの人達の意味を継ぐために。
大切な人を守るために。
大切な人と共にあるために。

「そういえば、その女の子ってどんな人なんですか」

明命に聞かれて。

さらつと

「ん？呂布・奉先」

答えた。

その答えに皆は黙って。

正面に星が。

右に紅蓮が。

左に凱が。

それぞれさん、はい、と手を振って、

「ええー！」

皆で叫んだ。

「え？言ってなかったか？」

「はっはっはっは。さすが総長、よりにもよってあの呂布・奉先が相手か！」

笑っている星。

「い、言ってますんよ竜人さん」

「あわわ」

キョドリ出した明命と雛理。

「……」

「ああ！風！？」

「固まってるのー！」

「皆、なんか楽しそうだな」

「いや、それはおかしいだろ」

凱に突っ込まれた。

まあ、ともかく、

「じゃ、いこうか皆、——頼りにしてるぜ？」

その日。

一時停止中だった『全竜』は動き出す。

総長、佐山竜人の十年ぶりの再会の為に。

第十一章 決意への走者たち（後書き）

スイマセン。

前書きがいいのが思いつかなかったので、原作を流用しました。
できるだけオリジナルでいきたいです。

追伸

PV20000、ユニーク2800突破しました。

第十二章 猪突（前書き）

まっすぐなのは美德だけれど。
時に、迷惑。

第十二章 猪突

反董卓連合。

董卓を討つために司隸校尉、アホ筆頭の袁招・本初が招集したのは、地味系普通少女、幽州の公孫賛・白珪。

天然少女、平原郡の劉備・玄德。

勝気なポニテ少女、涼州の馬騰の名代、馬超・孟起。

我がままお嬢様、河南の袁術・公路。

その客将、褐色お姉さん孫策・白符。

金髪口リ、典軍校尉の曹操・孟徳。

さらに彼女達の補佐に文醜、顔良、張勲、諸葛亮、夏侯惇、夏侯淵、その他将達。

そして、

天の御使い、北郷・一刀。

袁招を総大将として据えた彼女達。

都への難関は？水関と虎牢関。

？水関は公孫賛と劉備、途中参加した孫策が攻め落とし、将である華雄は関羽が倒すも逃がした。

そして、虎牢関攻略の指揮は曹操に任された。

攻略のポイントは二つ。

谷に挟まれた地形でどう戦うか。

そして、呂布・奉先と張遼・文遠。

「ふうん？強いんだろ？」

曹操軍会議の中、北郷・一刀の声がある。

それに答えたのは夏侯惇こと春蘭だ。

「呂布の武勇は天下無双。飛將軍の名は伊達では無いな。それに張

遼の用兵は神出鬼没と聞く。恐らく、董卓の軍で最強の武将は奴ら二人だろう」

春蘭の説明に、

「……欲しいわね、その強さ」

「また悪い癖が……華琳さま」

曹操こと華琳の悪癖。

才ある者の収集だった。

気にいれば敵だとしても自分の下へと勧誘する。もつとも。

彼女のカリスマがあるからこそその癖なのだが。それをたしなめたのは夏侯淵こと秋蘭だ。

「今回ばかりはお控えください。張遼はともかく、呂布の強さは人知を越えております」

「人知って……そんなに強いのか？」

「用兵はともかく、個人の武では桁が外れていると聞いている。中央に現れた黄巾党の半分、三万は、呂布一人に倒されたそうだ」

「一人って、一部隊って事？」

「いや、文字通りの一人だ」

「……はあ？それは、いくらなんでも……」

無茶苦茶だ。

「あら、一刀も出来ないかしら」

無茶ブリだ。

ではなく。

「俺は対軍戦つてのは苦手だからね……。まあ良くて一万だよ」

「それでも、十分に人知を超えているわよ……」

桂花に突っ込まれる。

「もしどうしても呂布をご所望とあらば……。そうですね。姉者と私、あと季衣と流琉あたりがいなくなるものと思っただきたい。……まあ、北郷なら分かりませんが」

「どうなの？ 一刀」

「……」

考えてみる。

……でもなあ、呂布ってことは

『あいつ』の想い人ではないか。

もし、仮に。

自分達の誰かが呂布を殺したりしたら、『あいつ』はどうするか。

……皆殺しだな

絶対だ。

容赦なく。

感慨なく。

躊躇なく。

関係者皆殺しだ。

そうならないためには手を出さないのが一番だけれども。

「……………？何かしら」

皆を見回す。

華琳を、春蘭を、秋蘭を、桂花を、ここにはいない天和を、地和を、人和を想う。

「いや、なんでもないよ。まあ、呂布は俺が何とかしよう」

もし、何か起きたのなら。

……………俺が何とかすればいい。

そう思ってたの答えだった。

その後、張遼は春蘭が押さえることになり、軍議は終わった。

虎牢関。その城壁。

そこには四つの影。

「おー。来た来た」

砦の外で展開される陣を見ながらのん気に呟く、袴にサラシ、紫の髪の少女。

神速と云われた張遼こと霞だ。

「……………むうう」

その横でうなるのは銀の髪に最低限ともいえないわずかな部位のみを守る衣服。

孟将、華雄だ。」

「来た………っつか、どんだけ来るねん！来すぎやろ！」

ノリ突っ込みである。

さすが？関西弁。

その横で絶句する華雄。

「……………なんと」

「華雄……言つてた数と全然違うやんか……」

「むうう……。そんなはずはないんだが……」

「これでは作戦の立て直しなのです！まったく、軍師のねねの事も少しは考えてほしいのですっ！」

学生帽を被った小さな少女。

軍師の陳宮・公台こと音々音。

「ぐぬぬ……」

歯ぎしりを響かせて陳宮をにらむ華雄。

そんな陳宮が泣きついたのは、

「りよ、呂布どの……。けだものが、いじめるのですっ……………」

「……………なかよく」

燃えるような赤い髪。褐色の肌に刺青。赤いスカーフを首の巻く少女。

天下無双の呂布・奉先こと恋である。

「わ、わかっているっ！……………うつつ、兵の確認をしてくるっ！」

去っていく華雄。
それを見て、

「悪い奴やないねんけどなあ。ねねも、ちょっと言い過ぎやで」

「うう……………。ねねは悪くないのです……………」

霞がたしなめるも聞こえない音々音。

「ま、ええわ。恋。何とかなりそうか？」

「……………なんとかする」

「せやねえ……………。何とかせんと、月も賈馱っちも守れんか……………。あんなの王国もあるし、逢いたいたいっちゅう人もあるしの」

「……………（コクッ）」

十年前。

霞たちの師、丁原に拾われた恋。
いまでも無口だが、

……………昔はもつとひどかったからなあ

会話どころか、目も合わせない。

近づくそぶりを見せれば怯えるし、実際に近づけば暴れる。それが一カ月ほど続いて、自分たちの武の鍛錬に参加し出してからは大分落ち着いたが。

そんな恋には逢いたいという人がいるという。

詳しくは知らないが、七年前に故郷の村を探し出して行ったが、旅に出ていたらしくて居なかった。

それでも探し続けて、早七年。

未だ見つからず。

それでも、彼女はその人に逢いたいと願う。

……天下無双も恋する乙女っちゅーことかいな

「んー。陣形の展開もなかなかやな。この手の定石は籠城やし、向こうもそのつもりやろうけど……あんまり、時間を掛けるワケにはいかんしなあ」

敵軍を観察していたら、

「申し上げます!」

「何や? 敵の状況ならちゃーんと見えとるで!」

「はっ。あの……華雄殿が出撃されるようです」

……何?

かゆう? 粥? 痒い? 飼う? はっはっはっは。なにゆうつるねんウチ。

「……………はあっ!? なんやそれ!」

思考が異次元へ行っていた。

「そ、そんなの聞いてないですっ!」

「前言撤回や!あんの猪!」

「……出る」

「呂布どのっ!」

「……しゃあないやろ!せめて華雄を引きずり戻さんと、月に会わせる顔が無いわ!陳宮は関の防備、しっかり頼むで!」

そうして、籠城すればいいものを。

董卓軍、将の独断専行。

相手は曹操軍、だけではなく。

後ろで、劉備や孫策が出番を狙っているのにも気づかず。
グダグタのままに開戦。

第十三話 虎牢関の戦い（前編）（前書き）

あと。

もうすこし。

第十三話 虎牢関の戦い（前編）

「はあああああ！」

金剛爆斧を振る姿はまるで重戦車。

猪突猛進を体現するのは華雄だ。

それを追いかけるのは張遼こと霞。

飛竜偃月刀を振りながら追いかけるが、

……追いつかん！

そう思いながらも走る。

斬撃が来た。

……うっとおしい！

受け止めたら、

「うおわ！」

ぶつとんだ。

……なんやあ！？

空中で姿勢を整え、見た先には。

「張遼だな！我が名は夏侯惇！相手をしてもらおう！」

黒髪の長身の少女。

曹操軍の夏侯惇。

その名を聞いて、

……アカン

「アカンなあ……」

「何？」

「アンタみたいな武人を見てると――」

構える。

もうやけだ。

面倒なことはねねに任せよう。

「――戦いたくなるやんかあ！」

虎牢関の戦い――第一試合

張遼対夏侯惇――開始

？

？

「お、呂布じゃんか！勝負だ！」

「きゃっ！」

関に進軍されて向かった先にいたのは水色の髪の活発そうな少女、文醜。

それからおとなしそうな少女の顔良。

それぞれ大剣と大鎚を持っている。

来る。

文醜は楽しそうに。

顔良は泣きそうになりながら、それを。

「……………じゃま」

一撃。

ただ方天画戟を振るだけ。
ただそれだけの一撃で、

「どわぁ!？」

「きゃあぁっ！」

ぶっ飛ばす。

そこに現れたのは関羽だ。

「く……………っ！遅かったか……………！大丈夫か、二人とも！」

「な、何とか……………。ありがとうございます」

「ひゃーっ。死ぬかと思った……………！」

「愛紗！鈴鈴が行くのだ！」

飛び出したのは、張飛。

「待て鈴鈴！一人では無理だ！」

「大丈夫なのだ！でええええい！」

一閃。

大陸でも破壊力に関しては五指に入るだろう一撃。

しかし。

「……当たらない」

わずかにズレるだけで回避する。

「にやにやーっ！？こいつ、強いのだ……っ！」

「だから無理だと言っただろう！」

今さらなことを言う張飛を叱る関羽に、

「……あら、劉備の軍も来ていたのね」

「……お主、孫策……？」

褐色の肌に露出の多い服装。

孫策だ。

彼女は呂布見て、

「これが呂布？強いって聞いてるけど……こんなぼーっとした子が、そんなに強いのか？」

「……桁違いだ。すまんが助力を頼めるか？」

「いいわよ」

気安く請け負う孫策。

そして、三方から一斉にかかる。
しかし、

「……………遅い」

大陸において、間違いなくトップクラスの将の同時攻撃も、

「くうっ！」

「うひゃあっ！」

「ぐっ！」

ものもしない。
追撃の一撃を放って、

「おっと」

受け止められた。

不思議な格好をしている少年だ。
見慣れない武器を持っている。
思わず下がる。

少年の登場に戸惑ったのでない。

見慣れない武器や服装を疑問に思っただけではない。

既視感だ。

似ている。

恋がずっと逢いたい人に。

「……………何だ、お前」

「北郷・一刀」

「悪いけど、お喋りしている場合じゃないよ」

「……………」

来た。

剣を納刀した状態で。

抜刀術。

天の御使い、北郷・一刀のスキル。

納刀状態の刀を鞘走りをを用いて高速で抜刀。

また、納刀状態でも体術を駆使する。

剣速ハイエンドにおいての最高位。

戦場でそれを使えるのはわずか。

そして、この大陸においては一刀のみだ。

それ故に初撃であれば、まず間違いなくヒットする。

「あら？」

はずだった。

受け止められた。

目視も難しい剣速の一撃を。

一旦引く。

関羽たちの下まで下がり、

「いやあ、止められるとは」

「何をのん気に言っているのだ！」

関羽に怒られた。

「……………来い、本気で行く」

恋とて、今の一撃を止められたのは勘によるものが大きい。
目の前の少年は剣速においては自身を凌駕する。

何より、彼に似ていてやり難い。

関羽たちとて片手間で戦える相手ではない。

恋としては珍しく。

わずかに、焦りを感じた。

そんな感じで、飛び入り参加多発で。

虎牢関の戦い——第二試合。

呂布対文醜、顔良、関羽、張飛、孫策、北郷・一刀——開始。

第十三話 虎牢関の戦い（前編）（後書き）

テストがやばいです。

後、相変わらず原作の文章を使うと描写が甘くなる。

何とかしないと……。

あと、気づいたらPV30000、ユニーク40000超えました。
PV2500で喜んでた頃が懐かしい……。

第十四章 虎牢関の戦い（後編）（前書き）

ようやく。
来たよ。

第十四章 虎牢関の戦い（後偏）

大鎚と大剣。

重量級の武器が左右から迫る。

その目標である恋は。

「……………じゃま」

大剣は戟で。

大鎚は、

「ええっ！？」

手のひらで受け止める。

左右からの攻撃を受け止め、大剣は弾き、大鎚は自分の方に引き寄せる。

大剣の使い手である文醜は浮いて、大鎚の使い手たる顔良は引き寄せられた大鎚を離さないが故に、体が伸びて。
そこに、

「うつっ！」

恋の蹴りが入った。

蹴り抜く。

そのまま、片足立ちで独楽のように体を回し、

「げえっ！」

戟を振う。

文醜の大剣にあたり、金属音が響く。

恋が両足で立つ頃には。

文醜も顔良も十数メートル吹っ飛び、地面に転がる。
そこに。

「はああああああ！」

「どりやああああ！」

関羽の青龍偃月刀と張飛の丈八蛇棒が交差するように叩きこまる。
その二撃を恋は。

「…………ん」

方天画戟の柄を後ろの地面に突き刺し棒高跳びの要領で回避する。
空中を舞う恋を、

「関羽！肩を借りるわよ！」

「おい！」

孫策が関羽の肩を踏み台にして跳躍。
彼女から斬撃が放たれる。

「空中では避けられないでしょう！」

人は空を飛ぶことも、宙を移動することもできない。
そう思ってたの一撃。
しかし。

それは相手がただの人間に限った話である。

飛將軍。

その名は伊達で無い。

地面と平行に浮いている恋は戟を後ろから前に、

「……」

振る。

舞う。

慣性の法則により、恋は空中で加速、着地。

孫策は、

「くっ！」

振られた一撃を避けること無く飛ばされる。

五人の攻撃を回避、防御して着地した恋。

彼女はそのまま、

「……！」

本能の赴くままに顔の前に戟をかざす。

「げ」

一閃、防御。

北郷・一刀の抜刀術。

それを防ぎ、力任せに間合いを空ける。

恋の頬に一筋の切り傷。

わずか数秒の攻防。

それに対し、

「いや、困った。ほんとに強い」

「弱音をはいてる場合か！」

「でも、どうする？このままじゃジリ貧よ」

「うー。つよすぎるのだ」

「ん？文醜と顔良は？」

「その二人なら、あれ」

孫策の指す先にはトンスラする二人。

「なにい！」

「まあ、あの二人はもう戦えないでしょ。それよりも」

笑みを浮かべる一刀。

「何？いい考えでもあるの？」

「乗る？」

「乗るしかないだろう」

「愛紗がいいなら鈴鈴もいいのだ」

しかめつらの関羽と考えていない張飛。
孫策は、

「それで、何をすればいいの？」

？ ？

「お待たせ」

作戦会議は終わったらしい。
四人は構え、

「じゃあ、行くよ」

突っ込んできたのは、北郷・一刀。
接近し、抜刀。

超高速の一撃は再び受け止められるが、そのまま振り抜く。
そして、

「……！」

振り抜いたまま、恋に背中を見せる。
全力で納刀。

そのまま背中から高速で突き出された鞘を、

「……！？」

恋は受け止めて、しまった。

そして、次いで来た関羽と張飛の攻撃。
それも受け止めてしまう。

恋の手に過剰なまでの衝撃が奔り、

そこに。

「はあっ！」

掬いあげるような孫策の一撃が来て、

恋は、その戟を。

手放してしまった。

五メートルほど後ろの地面に突き刺さる。

そこに、

「チェックメイト」

北郷一刀の斬撃が来る。

誰もが、関羽も張飛も孫策も。

終わりだと思った。

自分の武器が飛ばされたのだ。

隙が生まれるのは当然だと。

そう思い勝利を確信した。

が。

恋は飛ばされた方天画戟には目もくれず、膝を落とし、頭を下げ、

迫りくる斬撃は恋の命を刈り取ること無く通過する。

さらに。

「!？」

前に出た。

これには一刀も驚愕する。

互いに限りなく接近し、恋が一刀の胸に手を置く。

「ああ……!!」

恋にしては珍しく、声を荒げて、突き出した。
体を連動させ衝撃を叩きこむ。
かつて。

恋の大切な人が見せてくれた技術。

彼が今どこにいるかは、分からないけど。
彼がくれたものはここにある。

それは、北郷・一刀のアバラを砕きながらその力を行使する。
掌底の反動で後ろに飛び、方天画戟をキャッチ。
構える。

そして、飛ばされた一刀は地面を転がり、

「痛たたた……。まさか体術もいけるクチとは」

脇腹を押え立ち上がり、顔をしかめるが、不意に笑みを浮かべ、

「でも、痛み分けだよ」

恋の右肩、血が吹き出る。

先の一撃を避けきれなかったのか。

肩を押さえて、一刀をにらむが、どこ吹く風で受け流される。

さらに、恋を囲むように、関羽、孫策、張飛。

「さあ、反撃開始かな？」

虎牢関の戦い——第二試合。

文醜、顔良——リタイア。

呂布——苦戦中。

戦闘続行。

？

？

そうして、劣勢に立たされた董卓軍の下にいつの間にか彼らは現れた。

誰かが気付いたその先。

虎牢関の崖の上。ズラリと、五百人余りが現れる。

その先頭は『全竜』総長佐山竜人に特務たちだ。

戦闘が止まり誰もが彼らを見上げる中。

竜人は叫んだ。

「恋——！！」

周りの戦闘など知らぬというように。
その叫びに答えたのはもちろん。

「りゅう……と……？」

彼女は目の前の現実が受け入れられないというように、何度もその名を呟いて、叫んだ。

「竜人——！！」

この声を聞いて、竜人は泣きそうになった。

彼女は十年たった今でも、自分の事を覚えていてくれて。
自分の名前を呼んでくれた。

嬉しくてたまらなくて。

服の中から取り出す。

いつか、二人で買った指輪を。

鎖に繋がれたそれを指にはめ、その上からゲオルギウスを装着する。

「呼んでくれるのか」

深く呼吸し、

「俺の事を。恋——ありがとう」

ゆっくりと呼吸する。

「そして、俺の名を呼んでくれるのなら、……俺はお前の下に駆け付けよう」

虎牢関に声が響く。

「一分だ。あと一分待ってくれ」

これより、この場の主役は悪役と天下無双。

「そう。後一分。——合計、十年と一分を越えて、俺は——」

「——お前を迎えに行く」
「いいか？」

「——うん！」

彼女が答える。

その答えに笑みを濃くし、

「離理！」

「テストメント
T e s . !」

噛まない。

「第一、第二概念を基礎として——」

その手には『？』『？』と書かれた符。
それを掲げ、

「——概念空間、展開します！」

瞬間。

乱世の大陸に、かつて文字世界と名前世界を担った世界の理が起
立する。

何かが。

世界の何かが変わる。

そして、

「特務、副特務は、敵武将との相対！、他は董卓軍の援護！手のあ
いたものから——」

崖を駆け降りる。

……悪役になるう。今、ここで。

落下中、服が光となって弾け、現れるのは、
白の装甲服。

UCAT、そう刻印されている。

かつて世界を滅ぼし、救った者たちだ。

装甲服への変更は『全竜』全体に広がる。

「——俺の、恋への道を創れ！」

着地する。

「テストメント
Tes . !」

後ろから聞こえる声は心地よく。
十年越しの再会。
それは一歩目からフルスピードだ。

第十四章 虎牢関の戦い（後偏）（後書き）

テスト終了まであと二日……。

二月二十五日に少し加筆。

第十五章 お前が望んでくれた俺（前書き）

ごめんな。いままで待たせて。

ありがとう。いままで待っていてくれて。

待ってて。今お前の下へ行くよ。

第十五章 お前が望んでくれた俺

「あなたは臆病よね」

「へ？」

それは何時だったか。

佐山・竜人がLow-Gを旅立つ少し前。

とある日の尊秋多学院の美術室。

合法ロリこと美術教師兼1st-G代表兼異種族帰化推進委員会代表、ブレンヒルト・シルトは言った。

「肉体面ではむしろ無鉄砲だけれど、こと人間関係に関しては臆病すぎるわね。何故かなんて聞くのは無粋すぎるから聞かないけど」

彼女はこちらに背を向け、

「その証拠にあなた——友達いないものね」

「ぐはぁ」

……気にしてることを

「あなたが気兼ねなく接している人物なんて、それこそ佐山たちくらいでしょう」

「ブレンさんのことも信用してますよ」

「そう」

セメントめ。

「昔の佐山もそうだったらしいけど、今のあなたには隣に立つ人が想像できない。あなたにとって正逆の存在が」

絵を描くのは止まらない

「……結局、何が言いたいんですか？」

「いい？もしあなたが共に在りたいと思った人を見つけたのならさっさと捕まえなさい。それこそ昔の佐山のようにね」

「捕まえるって……どうやって？」

「さあ？」

彼女はこちらを向いて、

「名前でも聞いたら？」

今思えば。

もうすぐ旅立つことを知ったことだったのだろう。

？

？

走る。

状況が変わりつつある戦場のどれもが少年の走りを止められない。

それでも止めようとする者達は後を絶たない。

「放て！」

そう叫んだのは夏侯淵。

彼女の声が響き、幾多の矢が竜人を襲うが、

・——世界には真実しかない

必殺になりえない矢は宙で止まり、残った矢は必殺を以って竜人へと行くが、

「残り五十秒と判断します」

侍女服に女性に落とされる。

「椿殿か！」

「T e s .」

その応答の間に竜人は駆け抜ける。

「我が主の進みを止めることはさせません」

そう宣言する椿の周囲に、十七本のナイフが浮遊する。

彼女の胸には光輝く石。

「『全竜』印の重力操作賢石。その力とくと見納めください」

驚愕する夏侯淵たちに、

「T e s ?」

ぶち込む。

一分間——第一試合。
椿対夏候淵——開始。
残り——五十秒。

「なんじゃお主ら！」

そう叫びながら矢を放つのは呉の宿将、黄蓋。
さらに。

鈴の音が響く。

無音で迫るのは、甘寧。

しかし、竜人は見向きもしない。
なぜなら。

「やらせません！」

「まあ、そうゆうこと」

黄蓋の矢は明命が落とし、

「巨乳、死すべし！」

叫びながら向かう。

甘寧は、

・——影は道となる

影渡りで、竜人の影から飛び出した刃が止める。

「な……！？化生の類か！？」

「まさか。しがない殺人鬼だよ」

刃が甘寧を蹴り飛ばし、道を空ける。
そこを走り抜ける竜人。

一分間——第二試合。

周泰対黄蓋——開始。

——第三試合。

弥当対甘寧——開始。

残り——四十秒。

「道を体で塞げ！」

誰かがそう言って、

「応！」

反董卓連合に兵たちが肩を組み、道を塞ぐ。
それに竜人は腕を引き、

・——攻撃力は無限となる。

虚空に突き出す。

無限大の力によって生み出された衝撃波が彼らを襲い、堂々と竜人が通り抜ける。

それを追いかけようとする者がいるが。

横からぶん殴られる。

そこにいるのは風。

「『全竜三羽鳥』！初登場や！」

真桜。

「張り切るのー」

沙和。

「総長の邪魔はさせん！」

一分間——第四試合。

楽進、李典、于禁対その他——開始。

残り——三十秒。

「はあああああ！」

「おりやあああなのだ！」

関羽と張飛。

恋の所かこちらに来たのか。
正面からの襲撃は、

「やれやれ」

「オラッ！」

紅蓮と夕が防ぐ。

紅蓮は偃月刀を受け流し。

夕は矛を打撃する。

わずかに隙間があき、そこを取りぬける。

「待てっ……！」

「あなたの相手は僕です」

「オメーはオレだ！」

「むー！なんなのだ！お前！」

一分間——第五試合。

双狭対関羽——開始。

——第六試合。

承丞対張飛——開始。

残り——二十秒。

「おりゃああああ！」

叫びながら突きを放つのは馬超。
十字槍が銀に輝きながら迫る。
それを防ぐのは、

「ハイハイハイ！」

星だ。

彼女は槍に蒼い光を纏いながら、

「行つて来い」

「ここは任せる、星」

その一言に笑みを浮かべ、

「テストメント
Tes！」

往く。

一分間——第七試合。
趙雲対馬超——開始。
残り——十秒。

……残り十秒！

関羽や張飛が『全竜』の相手に行き、孫策も全体の指揮に行った。
それまでに、

……決める！

残り九秒。

呂布に接近し

抜刀。

残り八秒。

受け止められる。

火花が散り、力任せに押される。

残り七秒。

それに逆らわない。

後ろに下がる。

残り六秒。

地面に鞘を突きたてて、耐えて、納刀。

残り五秒。

抜刀。

残り、四、五秒。

刃の延長線上に呂布を捕え、

……獲った！

そう確信して。

残り四秒

止まった。

誰かが、一刀の手首を握っている。

見た。

「聞け……痛い目見せてやる」

少年の右膝が持ち上げられていた。

軸足の左足が地面を強く踏み込んでいた。

踏み込みをもって右足が真上へ、こちらの顎へとかち上げられて

くる。

回避できない。

激突。

一刀の身が、顎で真上にかち上げられる。

「！」

声を上げたと同時に、胸に打撃が来た。

最初に軽く添えられ、それから全身の連動で撃ち込まれた右の拳。顎に蹴りを食らい、上に伸びた身体を中心にその拳は入った。

胸骨が砕け、全身に軋みがきた。

「痛い目、見てるか？」

恋は。

彼女は見た。

今まで戦っていた少年を殴り飛ばした少年を。

かつて、突然現れ、二年共に暮らし、十年離れ離れになった少年。

彼は苦笑して、

「お前の名前は？」

「……呂布・奉先、真名……は恋」

「そうか。——なら、恋。お前の望む佐山・竜人が来た」

「うん……」

呆然と恋は頷き、しかしすぐに目を涙に揺らし、顔を歪め、

「……うん！」

竜人は恋を抱きよせ、抱きとめ、抱きしめる。

「しかし、悪いな恋。約束を破っちまった。——何しろ四秒も早く到着しちまった。まあ、あれだな——」

彼は笑って、

「——愛の力ってやつだ」

一分間——終了。

余り時間——愛の力で四秒！

第十五章 お前が望んでくれた俺（後書き）

テストはやばいけど。

書いてて、楽しかった！

第十六章 無知（前書き）

それを知らないということは
その前では無力ということ。

第十六章 無知

竜人は腕の中の恋の存在を確かめる。

腕から伝わる感触は柔らかい。

涙にぬれる瞳は愛らしい。

褐色の肌は実に健康的で素晴らしい。

赤い髪からはいい香りがする。

胸も結構デカイ。

非の打ちどころのない恋を表す言葉を竜人は知っている。

……これが『マロイ』か！

あのヒヒ親父が熱中するのも納得である。

よし、決めた。

この世界でも広めよう。

ついでに、ヒヒ親父に負けないようにカレンダーやお茶だけでなくいろいろ出そう。恋の顔をデフォメした饅頭なんかいいんじゃないだろうか。ついでに本も出してやろう。タイトルは『マロイギア』だ。恋の可愛らしさと愛らしさとマロさを延々と語る本だ。文学革命が起きてしまうだろう。ああ、快なり！

「可愛いなあ恋。そう思うだろう？」

問いかけの相手は、

「——曹操」

「可愛いは認めるわ」

腕の中の恋を離し、見つめる先。

顔を痛みにしかめながらもすっかりとその両足で立つ一刀。

彼を庇う様に鎌を構えるのは曹操だ。

「何なのかしら？あなたは。妖術師か何か？」

「失礼な事言うな。そんなのと一緒にするなよ」

「なら、何？」

「教えない」

……面倒だしな
眉をひそめる曹操。

「いいわ、体に聞きましょう。一刀」

「ああ」

「……………させない」

戦う気満々の二人に前に出ようとする恋を、

「まあ待て。恋」

「……………竜人？」

竜人は腕を組み、不敵に笑いながら、
……輝いてるか俺！？

「悪いけど、付き合っている暇はない！」

そう宣言する。

そして、周りを見て董卓軍が撤退が進みつつあるのを確認し、概
念能力を用いて奮闘している『全竜』達に告げる。

「総員に告ぐ！」

反董卓連合の誰もがその声に緊張を得て、

「後ろに向かって全速全進！」

「わー！」

目の前の事に理解できずに、声を上げて逃げだす『全竜』を見送
った。

竜人も恋を意味も無くお姫様だっこして走る。というか逃げる。

……輝いてるぜ俺！

曹操は、

「はあー！？」

叫んだ。

「いつも通りすぎると判断します」

「これでいいんだろうか……？」

「細かいこと気にすんなや！」

「そうなのー。走るのー」

「実に憎たらしい巨乳でした……。次は必ず……！」

「おいおい、明命？ “きゃら” 変ってるよ？」

「改めて見ると関羽さんは好いですね……」

「みんなー！ここに変態がいるぜー！」

「はっはっはっは。そのみんなも変態ではしょうがないな」

走る。

というより逃げる。

『全竜』は突然現れて、一分だけ戦い、逃げ出す。

「ちょ、ちょい待ち！なんなんや、アンタら！」

張遼だった。

彼女はいくつか傷があるが健在で、ツッコミを入れる。
横にはボロボロになった華雄もいる。

「まあ、細かい話は後だ。今は……」

星が言葉の途中で切り上げた。

自分達の後ろ。

置き去りにしてきた武将たちが動き出したのだ。

……ふざけるな！

関羽は怒りを隠そうともせずに『全竜』を追う。

それは自分だけでなく、同じように飛び出したのは馬超と甘寧だ。

それに対するのは、趙雲、双狭、弥当の三人だ。

趙雲は馬超へ、

双狭は関羽へ、

弥当は甘寧に向かう。

先の一分間の再現だ。

さきほどは突然の参戦にこちらの兵が動揺した。
ならば。

……こちらが向こうの主力を討ちとればいい！

それなら向こうに動揺を与えることができるし、こちらの士気もあがる。

そのためには、

……一撃で決める！

自分へと向かう青年を見て思う。

所詮は副が付くが役職だ。

その気なら倒せると思い。

その思いのままに偃月刀を双狭に向けて振った。

全力の一撃。

それを、

「喰らえ、『双頭竜』」

……なっ！

両刃剣の中央、柄の部分で受け止められた。

というより、衝撃そのものが消え去ったような。

「言っておきますが、特務副特務というのは実力で決めるものではありません。あれはどれだけ総長の事が好きか、で決めるものです。見くびらないでほしいですね」

まあ、凱さんは違いますが。

と、彼は呟いて両刃剣を真ん中で折った。
いや。

折ったのではなく、

……元からそういう構造なのか！？

生まれるのは双剣。

そのままその二つの剣先をこちらに向け、

「吐け、『双頭竜』」

衝撃が関羽を襲った。

甘寧はギリギリまで気配と音を消して走った。

同じように飛び出した関羽と马超を囷にして気付かれずに近づこうとしたのだ。

しかし。

弥当は甘寧に向かってきた。

互いに暗殺者だ。

真っ向から戦う者ではない。

故に関羽のような威力任せの一撃では無く。

己の技術を最大限に用いて、斬撃を放つ。

弥当も同じだ。

互いの一閃が交差する。

右肩を斬られる。

右腕を斬った。

そのまますれ違い反転し、視線だけを弥当に向けたところで、

「縛れ、『戒』」

……何！？

弥当が加速する。

突然の加速に為すすべもなく。
反転しきつたところで。
後ろ回し蹴りをぶち込まれた。

馬超は特に考えていなかった。

ただ、戦っている最中に逃げ出した趙雲を思わず追いかけたのだ。

「待て、コラ！」

「待てと言われて待つ輩などおらん」

知るか。

戦意をむき出しにして進む。

そんな馬超に、

「悪いが、あまり相手にする気は無い」

彼女は槍を腰ために構えながら走る。

それから導き出される趙雲の動きは、

……突きか！

そんなものは分かっているれば避けるは容易い。

そう思って、聞く。

・——真名こそが力である。

・——ものは下に落ちる。

「昇れ、『龍牙』！」

流星。

それが自分に落ちてくるように。
それが自分に昇ってくるように。
目の前にそれが来て、

「……!？」

何の理解も得ることなく受けた。

飛び出した武将三人が返り討ちになり、反董卓連合にさらなる動
揺が走る。

その隙に、

「撤収、完了——！」

「イエー——！」

門が閉じた。

ふざけているとしか思えない声が響く。

反董卓連合のだれもが呆然としている中、

『全竜』の誰かが言った。

「あれ、総長は？」

その問いに皆、周りを見渡し、

「おい、コラー！置・い・て・く・な！」

門の外でなぜか恋をお姫様だっこしている佐山・竜人。

それを確認し。

さん、はい。

「ええー！？」

第十六章 無知（後書き）

オリジナルの概念兵器を出してしまいました。
どっちかていうと神格武装って感じですが。

報告

なのは小説『無限と迷路と翡翠』をはじめました。
こっちがメインでたまに更新したいと思います。

第十七章 分岐点（前書き）

じゃあな。セリヌンティウス。
ばいばい。メロス。

第十七章 分岐点

「な、何故、総長があんなところに!」

「知らんがな!」

「大変なの!」

「どどどどど、どうしましょー!」

「いやいや、落ちつこうぜ皆!」

「おや、こんなところに花が咲いていると判断します」

「命って素晴らしいですねえ」

「現実逃避すんなよ!」

「というか!何故あの男はお姫様だっこなどしている!?!」

星のある意味場違いな疑問に、

「確かに!」

賛同する女性陣。

「そこかよ!」

皆が力いっぱい叫ぶ。

そんな感じで思い切り錯乱しているところに、

「落ちつけ、皆!」

響いたのは凱の声だ。
後ろには離理もいる。
最も。

「あわわわ〜」

彼女も錯乱しているが。

凱は歩みを進め、砦のふちのギリギリに立つ。

「どうするのだ？」

星の問いに、

「決まっている！」

彼が取り出したのは。

「一本釣りだ！」

釣り竿だった。

「おい！開・け・ろ！」

……ぶち破つてやろうか

危ないことを考えつつも呼びかける。

向こうの声はこちらに届いているから、声は届いているはずだが。

……だいぶテンパってるなあ

しょうがないかもしれないが。

わりと余裕をもって、走っていたが気付いたらなぜかおいてけぼりだった。

恋を見ていたからどこを走っていた分からなくなったけどそれは

関係ないだろう。

……けどまあ。

役得といえは役得だけど。

恋と二人きりなのだから。

「……………竜人」

「ん？」

抱えた彼女は腕から降りて、その身を竜人の身体にすりつけるように密着する。

竜人を確かめるように。

それを見て。

嬉しさと愛しさが込みあげてくる。

十年ぶりに会えて、まだ一時間もたつてない。

思わず、抱きしめようとしたところに、

「おい。ちよつといい？」

邪魔された。

ありつたけの怨念を込めて睨みつけるのは。

「やあ」

北郷一刀だ。

彼は先ほどの戦いを感じさせない歩みで近づいてきて

「ちよつと、聞きたいことがあるんだけど」

「断る。レポート用紙に俺の恋との時間を邪魔したことに対する謝

罪文を三十枚以上書いてきたら聞いてやる」

ればーと？と首を傾げる恋が可愛くてたまらない。

「なあ、竜人。君は董卓につくのかい？」

「そんなこと聞きに來たのか？とつと撤退しやがれ」

「もうしてるよ」

確かに。

ほとんどの軍が撤退を開始している。

それでも、尚一刀が來たという事は。

一刀個人で來たということか。

そこで初めて、竜人は一刀へと体を向ける。

そして――來た。

筋肉が膨張する。

無駄なく鍛え上げられ、絞り込まれた体だ。

それは概念能力などでは無くその身が鍛え上げた力。

それを行使するのは『全竜』第四特務の凱。

そして。

彼は五斗米道の医者でもある。

彼は竿を振りかぶり、

「我が身、我が竿と一つとなり！」

竿がしなる。

「一竿同体！」

その先には網が付けられていて。

「全・力・全・投！」

獲物を捕えんと待ち構える。

「必・投・必・當！……獲・物・獲・得！」

極限まで竿がしなり、

「当・た・れええええええええええ！」

振る。

一部始終を見ていたもの達は。

「五斗米道、関係ないじゃん！」

まったくだ。

一刀と話をするために恋から離れたところに、直前まで竜人がいて、今も恋がいるところに、……は？

網が落ちてきた。

それは瞬く間に恋を捕え、

「ひいひいひいひいしゅううううううう……！」

凱の叫びと共に去っていく。
その途中。

「……………竜人……………！」

彼女は手を伸ばすが網で動けなくて。
不安でその瞳が揺れる。
それに。

「大丈夫だ。すぐに行く」

笑顔で答えた。

彼女が釣られて視界から消えた。

一刀に向き直る。

彼は一度口を開こうとして止めて、頭を振り、

「何か変なものを見た気がするけど……………。なあ、竜人」

「何だよ。手短に頼むぜ。とっと戻って恋とイチヤイチャしたいんだ」

竜人の言葉をもう無視する事にしたのか。

一刀は続ける。

「君は——俺、だったよな？」

「ああ——そうだったな」

「そうか」

「そうだ」

「なら——もう別人か」

「ああ。もう、拒絶するだけは止めた」

「そうだね。俺も受け入れるだけはやめた」

「俺は俺の大切な人たちの意思を受け継いで進む」

「俺は華琳が望み、為すべき覇道のために進むよ」

「なら——」

「——ここが分岐点だ」

「じゃあな俺だったおまえ。できれば会いたくない」

「そうだね俺だった君。でも無理でしょ」

そうして。

鏡に映したように同一でありながら逆反対であった二人は。
もうすでに別の存在になっていて。
別の道を進んだ。

第十七章 分岐点（後書き）

前回、何も考えずに頭の悪いオチをつけて大変でした……。

第十八章 家族（前書き）

理由なんていらいない。
意味もいらない。
ただそばにいてくれたら。

第十八章 家族

それは竜人の2nd - Gの全竜交渉レヴアイアサンロードのころ。
武器を創るという課題の仕上げのときに、

「家族とはいいいものだね」

鹿島・昭緒はそう断言した。

2nd - G 最高位の軍神パパにして日本UCAT開発部主任のその一言を。

「……………」

聞き流した。

作業を進める。

「晴美なんかは最近でこそ一緒にお風呂は入ってくれなくなっただけで、昔はよく一緒に入ったよ。まあ、年ごろとなれば恥ずかしいというのも当然のはずだけど」

「うつつしがられてるだけだろ」

「君は家族っていうと、佐山君や新庄君を想い浮かべるだろうね」

受け流された。

いいけど。

まあ、確かに。

身寄りのない自分を養子として受け入れてくれたあの二人以外の想い浮かべる家族がいただろうか。

いたような気がする。
いなかった気もする。

「家族っていうのは理由が要らないだろう。ただ家族だからというだけで愛して、好きになつて、護つて、護られる。そういう関係は家族だけだと思うんだ。もちろん傷つけあう家族もあるけど最初からそうだったわけじゃあないだろう。だからこそ家族というものは誰かにとって支えになるんだろうね。理由が要らないと安心できる——もちろん血がつながって無くとも」

血がつながって無くとも。

血縁関係で無くともつながるものはある。

例えば愛。

例えば絆。

例えば——流血とか。

「……？どうかしたかい？」

「いや別に。それで何が言いたいんですか？」

作業は最終段階に入り、

「いやさ。君には家族を増やしてほしいんだよ」

「……なんでまた」

「君にはそういう関係がもつと必要だと思つんだよね」

最後に竜人の名前を2nd-G、八百万の神々の名前が記録されたあるフロップीडィスクに、

「ほら、これで君も2nd・Gの家族だよ」

佐山・竜人の名を記した。

「そう。虎牢関はしばらく大丈夫と思っているのね？」

漢帝国の都、洛陽。

その宮中の中庭では軍議が開かれていた。

その中で疑問の声を上げたのは賈馱・文和だ。

それに答えたのは音々音で。

「ええ……まあ。大丈夫だとは思いますが……」

思い出されるのは、虎牢関の門に様々な文字を書きだした『全竜』たちだ。

それは『籠城中』、『閉鎖』『開けるな、危険』『ろ、籠城中なんだから開けちゃだめだよ！』等と意味がわからなかった。

「それよりも月殿に何事も無くて、何よりですよ」

月とよばれた豪華な服に身を包んだはかなげな銀髪の少女。
彼女こそが董卓だ。

「……ありがとうございます」

彼女は申し訳なさそうに礼を言うが、

「気にせんでええよ。みんな、月のことが好きでやっとなのやから。それに月はえらいんやから、もつとこうどーんとしとったらええねん」

「…………はい」

今度はもうしわけそうに笑うのではなく、嬉しそうに笑った。

「せや、詠。ちよつと会わせたい奴らがいるんやけれど…………ええか？」

「いいけど…………あれ？」

賈馱、すなわち詠がさした先。

「…………あれや」

霞たちが軍議していた所から少し離れた所で。

「なあ、恋。気持ちのか？」

庭に足を延ばした佐山・竜人と、

「……………ん。最高」

その足を枕にしてまどろむ恋の姿があった。そして、それから少し離れた所で。

「熱い、熱いなあ！まったく！」

「そうですよね！主に精神的に！」

「そうです！そうです！思わず帽子を捨ててしまいそうになるくらい！」

「はい！、心頭滅却どころでは涼しくならんほどです！」

「せやなあ！胸の谷間に汗がたまってしまうわ！」

「真桜ちゃんの嫌味も気にならないくらい熱いのー！」

女性陣がうちわで扇ぎながら、嫉妬のオーラを撒き散らし文句をたれている姿があった。

それには気づかないのに竜人はこちらに気づいて、

「もういいのか？」

何食わぬ顔で話しかけてくる。

「あ、ああ。ほれ、詠——」

と。

詠のバトンタッチしようとしたら。

横から影が飛び出て、

「ちーんーきゅー・きーっく！」

竜人に向けて飛蹴りを放った。

さすがに限界だった。

むしろ恋が大好きな彼女はよく我慢したと言えよう。

虎牢関からずっとこんな感じである。

その、いままでの怒りとかうらやましさを乗せた蹴りはしか

し。

「……………ダメ」

その恋に止められる。

「恋どのお……………」

泣きかけのねねである。

竜人はそれを面白そうに眺めてから。

「お前たちが董卓と賈馱か？」

「は、はい……………」

「そうだけど、アンタが佐山？聞きたいことがあるんだけど」

月を庇うように竜人に眼を向ける詠。

それは竜人を探っている視線だ。

「いいけどさ。こっちも質問がある。それに答えてくれたのなら何でも答えるぜ」

「……………いいわ。聞きましょう」

竜人は月と詠に問いを送る。

「なぜ、お前たちは戦う？もともとこじつけで狙われたんだろ。和解しようとは考えなかったのか？」

「っ！そんなの王や軍師としてできるわけないでしょう！」

「そういう話じゃなくてさ。俺が聞きたいのは動機だよ」

「……動機、ですか？」

「そう、動機だ。ぶつちやけた話、董卓に野心がないなら故郷に帰っても良かっただろ。それなのに何故、反董卓連合と戦うことを選んだんだ？」

その問いは。

竜人が思ったよりも早く。

答えが来た。

「……私にとって皆が家族だからです」

彼女は胸に手を当て、

「詠ちゃんもねねちゃんも霞さんも恋さんも華雄さんも劉協陛下も洛陽の人々も皆が皆。」

私の家族なんです。だから、皆を護るために戦おうと思いました」

「私もよ。月の為ならなんだってする。だって——家族なんだから」

ただ、家族のために。

それに理由なんか要らないし、意味もない。

かつて、鹿島がいいものだと言ったもの。

……まったくだ。

いいものだと思えた。
だから。

「……なるほどね。ようし！決めた！」

「な、何をですか？」

「ん？俺たちは董卓たちに味方しよう」

少し離れた所でまだ決めてなかったのか、とかまた勝手なとか言われてるが気にしない。

「い、いいんですか？」

「ああ。それが俺の意思だよ。構わないよな？賈馱」

「そりゃあ、まあ戦力が多いことに越したことけど……」

「なら、いいじゃん」

あまりにいい加減といえるけど。
最初からこんな感じだ。

「さあ——いっちょ一泡ふかせてやろうぜ」

第十九章 バケモノ（前書き）

それは怖くて。

それは恐くて。

それ以上に怪しい。

第十九章 バケモノ

『全竜』が董卓軍に仲間入りをして。
主要メンバーの真名を交換して。
概念能力を説明した後の詠の一言は。

「胡散臭い」

「失礼な」

酷いものである。

そりゃあ、この世界では妖術みたいなものではあるが、竜人としては大切な人たちから受け継いだ力だ。

胡散臭いと言われていい気はしない。
怖い顔をしていたのか、

「わ、悪かったわよ」

素直に謝られた。

「で、でもなあ。そんなのウチら使い方とかいきなり言われても、
ようわからんで」

仲裁に入ったのは霞だ。

彼女の言う事はもつともである。

……どうしたもんか

「まあ、防護の賢石や身体強化の符を大量生産するしかないか……」

「ふむ。なら謡うたえと揺ゆには頑張ってもらわなければならんな」

星の出した名前は月たちには聞きなれないもので、

「……？どなたですか、その二人」

答えたのは明命と雛理だ。

「あ、副特務で双子で武器職人なんです」

「ただ、ちよつと人見知りな引きこもりなんです……」

雛理が言うほどである。

それはもう人見知りのレベルを越えてる気がする。

「こちらの軍は約三万人ですぞ。数日間で用意できるのですか？というかさつさと離れるのです！」

最後の一言は置いて。

先ほどからずっと足を枕にして寝ている恋の頭をなでながら考える。

ねねの疑問はもつともだけど。

「まあ、虎牢関をあれだけ開かないように概念能力使ったから一週間ぐらいは大丈夫だろうから、それだけあればなんとかなるだろ」

と、いつもの適当な楽観ではなく。

概念能力への信頼と自信による推測は。

「甘い、少年。あと三日もあればこの洛陽まで来るぞ」

野太く低い声が否定した。

「……！」

皆に緊張が走り、声の主を認識しようとして。

「……！？」

脳が否定した。

真っ白な髪。

触角のような髭。

ほとんどあつて意味のない白く小さい胸当て、というかビキニの上。

上着だけの燕尾服とえんじ色のネクタイ。

鍛え上げられた筋肉に褐色の肌。

そして、そしてモツコリとした禪。

「バ、バババババ」

「バケモノー！」

真桜と沙和の素直な感想に。

「だれが向こう三年毎夜毎晩夢に出てきて意味のわからない歌を大声で歌って、眼が覚めても脳理から焼きついて離れることが無いであろうバケモノだろう！」

「そ、そこまで言っていないやろ！」

「そ、そこまでいつてないの！」

「……？どうしたんですか、総長」

「いや……、あの変態を見ても大して動じない自分があるのかな……」

「別に変じゃあないだろ。いい筋肉と骨格だ」

「ああ。同感だな」

凱と牡丹^{ぼたん}に、皆は。

「ええー！？」

ちなみに牡丹とは華雄の真名である。

月たちも知らなかったようだが、ようやく伝える機会が来たとか言っていた。

どうも真名を伝えるタイミングが分からなかったらしい。

……というかコイツ……！

「凱……おまえ、やっぱりコレだったのか……！」

竜人が手の甲を口元に当てる。

皆も一歩下がって半目を向けている。

「……？コレってなんだ？」

牡丹は牡丹で。

「確かに個性的だが、そこまで騒がんでもいいだろう」

「いやいや、おかしいやろ！」

「やっぱり、こいつダメなのです！」

「まったくね」

「へう……」

真面目な軍議のはずがカオスな雰囲気になってしまつて、緊張感ゼロだった。

この後。

この後に信じられないような。

竜人からすれば到底受け入れられないような。

そんな事実を聞く事になるとは思わずに。

曰く——反董卓連合が概念能力を得た。

第十九章 バケモノ（後書き）

ちよつと短めでした。

華雄の真名はオリジナルで、

華雄 イノシシ イノシシ肉 ボタン鍋 牡丹

みたいな感じで決めました。

今まで出てこなかった副特務の二人は別に忘れていたわけではないです。

…… 本当ですヨ？

第二十章 予言（前書き）

それは無視はできるけど。
心の奥に引っ掛かる。

第二十章 予言

「わたしの同士に貂蟬というやつがおる」

自称漢女見た目バケモノの卑弥呼と名乗る彼あるいは彼女は語る。

「あやつは北郷・一刀にだいぶ入れ込んでおつての、そいつが概念能力を与えたのだ」

「どうやって……ですか……？」

いぶかしげな難理の問いは、

「それは言えんのう。いわゆる企業秘密だ」

変なポーズを決める卑弥呼にみんなが一步引いて。

誰もが卑弥呼の説明に納得を得ることができなかった。

概念能力はこの世界のものではない。

それを持つのは佐山・竜人だけなのだ。

彼が賢石や符、概念武装を創ることで『全竜』は概念能力を得た。それなのに。

一言で、与えたと言つて納得できるはずがない。

疑問がいくつも生まれて、みんなが思ったのは。

佐山・竜人のことだ。

その力を受け継いだというのは彼で。

付き合いの長い『全竜』のメンバーも、付き合つて間もない董卓軍のメンバーも、誰もがうかがった竜人の反応は、

「あつそ」

と、恋の頭をなでているだけだった。

「それだけ……か？」

拍子抜けしたような卑弥呼。

それは他のみんなも同じだが、『全竜』のメンバーだけは納得を得る。

自分たちのリーダーはこういう人だと。

「なあ、卑弥呼。勘違いしてないか？」

彼は柔らかい笑みを浮かべて。

「確かに概念能力は俺が受け継いだものだ。けどな、本当に受け継いだのは意思なんだよ」

目を閉じて、矛盾だらけの芳醇な世界の人々を想う。

「大切なのは力じゃない。それを行使する誰かの意味だ」

それを教えてくれたのは父と母だった。

「理性も感情も内包した平行線上の境界線。そこに立って力を振うのなら文句は無い」

そう語り、なおも恋の頭をなで続ける竜人に、

「ガッハッハッハッハ！なるほど！良い男の子だな！」

大きな声で笑う卑弥呼は突然目に真剣な色浮かべ、

「ならば、その意思を貫き通せ——大罪人の少年よ」

そう告げた。

……なに？

かつてUCATがそう呼ばれていたことがあるという。
なら大罪人の子孫や息子というのなら分かるけど。

……俺自身に言っている

「どういうことだ？」

「それこそ企業秘密じゃ」

しかし。

「お主のせいでこの世界は——終わっても続く続ける世界が終焉を迎える。そのせいでお主には敵が現れる。それだけは教えといてやろう」

それだけ告げて。

卑弥呼は消えた。

三日後。

卑弥呼の宣言通り。

洛陽に反董卓連合が布陣した。

報告によれば、だれもが皆一様に賢石や符を携帯しているという。それは董卓軍に動揺を与えたが、急ピッチで大量製造されてた『全竜』印の賢石や符がそれを押さえた。

そして。

ついに。

洛陽の前に董卓軍及び全竜が。

反董卓連合が。

戦場に、竜人が、星が、凧が、真桜が、沙和が、紅蓮が、夕が、刃が、椿が、恋が、霞が、牡丹が。

一刀が、曹操が、夏侯惇が、夏侯淵が、劉備が、関羽が、張飛が、孫策が、黄蓋が、孫権が、甘寧が、公孫賛が、馬超が、顔良が、文醜が。

並び立つ。

また、本陣に。

董卓軍は雛理が、凱が、月が、詠が、音々音が。

反董卓連合は荀？が、諸葛亮が、周瑜が、陸遜が、袁術が、張勳が、袁招が。

それぞれ戦場を支える。

彼ら、彼女らの布陣が完了して、

「反董卓連合、総大将袁初・本初ですわ！」

金髪ドリルヘアーで高笑いする袁招。

彼女のお伴に顔良も文醜もいる。

三人に相對するのは、

「『全竜』総長、佐山・竜人だ」

佐山を姓とし、竜人を名として告げる。

その意図が伝わったのか伝わってないのか、袁招は笑い声をあげ、

「さあ、華麗に、雄々しく、美しく！」

「……………」

竜人はただ右手を掲げ。

「進軍なさい！」

「進軍せよ《ゴー・アヘッド》……………」

両軍の激突が開始する。

第二十一章 不屈（前書き）

あきらめるな。

あきらめる理由などどこにもない。

第二十一章 不屈

開戦より数時間がたった。

激突はさらに過激さを増す。

最前線を担うのは身体強化の符を多く持った者達だ。

彼らは武器を振り、打撃を受け止め、斬撃を防ぐ。

後曲では狙いを定め、矢を射る。

それらの行為は淡い光を纏う。

概念能力だ。

その力は誰にも平等に力を与える。

しかし。

「くそ……」

誰かが言った。

董卓軍の士気は低い。

董卓軍の数は約三万。

反董卓連合は七万五千。

倍ちよつとの数だが、士気の低さの理由はそれだけではない。

「なんとか……」

またも誰かが言う。

それは弱さを含んだもので、

「なんとかなると思ったのに……！」

『全竜』たちから与えられた概念能力があれば。

反董卓連合に打ち勝てると思った。

しかし、その力は得たのは自分たちだけでは無かったのだ。
だから。

董卓軍の誰かが言葉にせずとも思う。
これじゃあ護れないと。

その思いに。

「諦めるな！」

叱咤の叫びが飛ぶ。

それは弱音を吐いた者の隊の隊長で、

「思い出せ！開戦前の董卓さまを！」

「……！」

思い出す。

戦いの前に姿を現した儂げな少女。

彼女こそが董卓だという。

とても、“悪賊”なんて言葉は似合わない少女は自分たちに言った。

淡く微笑みながら。

洛陽の民は、自分の家族だから。

だから——それを護る為に力を貸してほしいと。

「そつだ……」

誰かが言った。

それは隣の誰かに伝播して。

「そつだ……！」

言葉には力が宿り、

「諦めるわけにはいかない……！」

それは全体に伝わる。

「俺たちのことを家族と言ってくれる少女くらい護れなくてどうする……！」

大地を踏みしめ、前を向く。

その瞳には強い意志が灯る。

その意思の下、

「いくぞ……！」

進軍する。

……いい本気だな！

戦闘の中で佐山・竜人は想う。

低かった士気は高まりつつある。

若干押され気味だったが拮抗し出した。

いい頃合いだろう。

あきらめの時間は終わったのだ。

今は意思を貫く時だ。

さあ、行こう。

「諸君！」

芝居がかった口調で叫ぶ。

それはこの世界では、竜人だけが放てる言葉だ。

「今こそ言おう。……佐山の姓は悪役を任ずると!」

進軍する華雄は戦場に響く声を聞く。

夏侯惇へ刃を神速をもって振う霞も聞いた。
それは概念能力でどこまでも届く。

「今をもって、終わりを始めよう」

本陣で指揮をする雛理も音々音も詠も聞く。

祈り続ける月も。

「いいか諸君! 気合いを入れろ! 矢筒と刃に責め問う声を、防具に抗議の声を詰める。それらを意思表示として戦うのが今日一番のやり方だ。——よく聞け諸君!」

関羽と刃を交差させる紅蓮も。

振りかぶった右腕を張飛へとぶちまける夕も。

高速で移動で移動しながら甘寧と刃をぶつけあう刃も。

ナイフを矢として夏侯淵と撃ち合う椿も。

戦場に響く竜人の声を聞いた。

『アヘッド アヘッド進軍、進軍、進軍せよ《ゴーアヘッド》、だ! 正義の押し売りを
する奴らをぶん殴り、帰ってもらえ!』

螺旋槍を振り回す真桜も。

双剣を地道に振う沙和も。

気弾をばらまく凧も。

芝居がかった口調に口元を歪めながら馬超と槍をぶつけ合う星も。
空へ昇る声を聞いた。

「『全竜』総長、佐山・竜人は、この名の下に宣言しよう。ここより乱世はことごとく終わりを迎えると。我々はいかなる力にも屈しないと。我々は正しく、そして間違っていくと。そして我々は――、最後まですべてを果たすと！」

一息。

「――最初の命令だ。総員、連中に教えてやれ。この都も、この都の民も、董卓も芳醇であると。名声に目がくらんだ欲張り者どもに叩きこめ！」

恋はその身を震わす。自らの身体を貫く少年の声に。
そして、こちらへと迫る兵の向こうを見た。

誰よりも前に出て叫ぶ少年の背中を。

少年は右手の手甲を掲げ、一息とともにとうてきた。

「……返事はどうした？」

恋は口を開く。

答えは一つだ。

眉尻を上げ、口元に笑みを浮かべて言えばいい。

「――テストメント
T e s . !」

背中に心地よいを得た。

その心の片隅に思う。

……カギはお前だぜ、明命。

特別任務。

実行者：周泰。

内容：単身宮中に潜入し、監禁中の劉協陛下を救出せよ。

第二十一章 不屈（後書き）

おひさしぶりです。

遅れた理由は活動方向にて。

最近、テイルズのマイソロ₃にはまっております。

第二十二章 過去とあなたと一緒に (前書き)

それは誰かが描いた軌跡
それは誰かが創った奇跡
あなたと一緒に。

第二十二章 過去ゝあなたと一緒にゝ

もう六年も前。

当時幼かった明命はいつも思っていた。

——わたしは何の為にいるんだろう

農民の娘である彼女は身体能力が高かった。それは生活ではそれなりに重宝していたが、必要とも感じなかった。

ただ、農家の娘として。

意味もない身体能力を持ちながら。

生きていくんだろ？な、と思っていた。

そんな時。

嫌になるぐらい暑い日だった。

村の外れの林の上で涼もうと木を登ったら。

先客がいた。

それは自分よりいくつか年上であろう少年だった。

彼は昼寝をしていたらしいが、目を開ける。

彼はこちらを見て一言、

——よう。

——……こんにちは。

それが佐山・竜人との出会いだった。

彼は仲間と共に大陸を旅しているらしい。

仲間というのは十数人しかいなくて、槍を持った水色の髪の少女が目立っていた。

もともと、明命は、

——また来たのか？

——また来ました。

なんとなく、昼寝をしている彼と木の上で会話を交わしていた。それが一ヶ月くらい続いて。

村に集団が来た。

それは呉の兵たちで賊の討伐の為に村に立ち寄ったらしい。それを率いてたのは孫堅・文台で彼女は明命を見て、

——あなた、ウチに来ない？

いきなりの勧誘だった。

周りがいろいろ騒いでる中、討伐の帰りにまた来るから考えていてと言われた。

断る理由なんか無かった。

孫堅の下に行くという事は呉の将に仲間入りという事で、両親は喜んだし、近所の人も喜んだ。

それなのに。

断る理由なんかないはずなのに。

受け入れられなくて、頭に浮かんだのは木の上で昼寝をしている少年だった。

——好きにしたらいいんじゃないか。

話をした明命に帰ってきた言葉がコレだった。

適當すぎると思ったけど、彼は真面目そうで。

——結局、大事なのは自分の意思なんだから好きにしたらいい。

けれど、どこか楽しそうに言う彼に、

——なら、佐山さんについていてもいいですか？

なんて、事を聞いたら。

——好きにしろよ

次の日。

木の上で明命を出迎えたのは昼寝をしている少年では無く、一週間ぐらい空けると書かれた置き手紙だった。

一週間後。

彼はまだ帰らず。

明命の前に来たのは、

——さあ、答えを聞かせてもらいましょうか。

孫堅だ。

もちろん答えは決まっていた。

村のみんなから聞いた孫堅の話は素直にすごいと思えた。
だから。

——わたしは孫堅さまに仕えたいと思います。

けど。

——けど、それ以上に共にいたいという人がいます。だから——、

行けないと。

答えた。

怒られるか、下手したら斬り殺されるかと思った。

それなのに彼女は声を上げて笑い、

——あたしの負けね、竜人。

——別に勝負じゃないですよ、水蓮さん。

現れたのは何故かボロボロの竜人。

その後ろにはやはりボロボロの彼の仲間たちがいた。

彼あるいは彼女達は疲れたように明命を通り過ぎ、生温かい視線を送ってきて怖かった。

なんで真名で呼んでいるかとか、なんでそんなに仲良さそうなのかとか混乱している明命に。

竜人がこちらに手をさしのばして、

——お客さんどちらまで？

その質問に戸惑うが、

——あなたと一緒に行ける所まで。

答えた。

そうして、あっけにとられている周りを置き去りにして。

家出同然で村を出た。

ちなみにボロボロだったのは孫堅たちに賊と間違われて一戦交えたらしい。

その時に真名もいつの間にか交換していたとか。

そういう話もとても楽しくて。

自分の選択が正しかったのかは分からないけれど、間違っていないな
かったんだなと思った。

あの嫌になるくらい暑かった日。

少年との出会いがなければどうなっていたのか。

第二十二章 過去とあなたと一緒に（後書き）

明命の過去編が思ったより長くなったのでそれだけで切ったら番外編みたいでした……。

次は本編をやります。

第二十三章 襲撃（前書き）

いたい私たちが、
何をしたというんですか。

第二十三章 襲撃

……いろいろなありましたね。

劉協陛下を救出するという特別任務の最中だ。

宮中の地下。

牢屋などがあるところだ。

そこを進みながら、自分の過去を振り返って思う。

六年間だ。

自分のいる意味も見つけれられたと思うし、大切な人も増えたけれど、

……お母様やお父様はどうしているでしょうか。

家出も同然だった。

手紙は何度か出したけれど、会いに行ったことは無い。

それは距離の問題もあるけど。

なにより気持ちの問題だ。

……まあ、今はやることに集中しましょう。

そう思い、廊下を歩いてきた兵士に近づき、

「えい」

その額に符を貼り付ける。

『おやすみなさい×3』と書かれた圧縮睡眠符だ。

文字どおり睡眠時間を短縮するものだ。

通りすがりの兵は額に符を貼られたことにも気付かず、ごっつ、
という音を頭からたてて倒れる。

なんか白眼も向いている。

……大丈夫でしょうか……？

歩いている所を歩法で近づいたから、無防備に倒れた。

まあ、大丈夫だろう。

せいぜい起きるのに時間がかかるだけだ。

この睡眠符は一時期、『全竜』で流行ったことがある。

と、いうものの、睡眠符で眠らされて顔に落書きをするというものだった。

もつとも一番やったのは明命自身だったのだが。

そんな、どうでもいいことを思い出しながら倒れた兵から目を離し、前を向いたら、

「え……？」

少年がいた。

ゆつたりとした白い服装。

短めの髪。

気の強そうなツリ目。

真っ直ぐに。

明命を直視している。

瞬間的に歩法を発動。

加速の符を展開し、回り込み、魂切を抜刀し振りかぶる。

彼女がここまで過剰に、いっそ短絡的に動いたのは一重に少年の
雰囲気だ。

ありつただけの敵意と殺意。

害意ではなく敵意。

殺気ではなく殺意。

敵というよりは仇。かたき

それは明命を動かすのには十分だった。

長刀『魂切』。

『全竜』の概念兵器には常時発動型と任意発動型に別れる。

星の『龍牙』や刃の『戒』、紅蓮の『双頭竜』は任意発動型だ。

明命の『魂切』常時発動型にあたる。

佐山・竜人が作成した『全竜印』初期型。

初期型故にその能力は単純にして強力だ。

『魂切』。

魂まで切り裂くという意だ。

その名前が、刀の根元に刻印されたその文字がその力を具現する。
それを行使しようと振り抜こうとした明命の顔に、

「がつ……！？」

裏拳がぶち込まれる。

誰がやったのかなんてのは愚問だ。

目の前の少年以外この場に人はいない。

しかし、

……ありえない！

歩法で後ろを取ったのだ。

前だろうが横だろうが後ろだろうが知覚できないはずの明命を捕
える事が出来るはずがない。

いや、歩法を破る手段も存在するが少年が知るはずもない。

驚愕で彩られる明命の心中など無視するように、

「……ぐっ！？」

蹴りが来る。

膝が上がり、足の裏が迫る。

前蹴り。

『魂切』で防ぐが、数センチ後ろに滑る。

重い一撃だ。

そこからさらに連撃が来る。

蹴り主体の連撃。

その一撃ごとに明確な敵意と殺意がある。

それが明命の彼女の動きを鈍らせる。

……なんなんですか!?

初対面の相手にここまでされる覚えは無い。
しかし。

そんな思いを無視するように、

「……!」

少年の動きが変わる。

連撃から一撃に。

右足を左に踏み出し、それを支点にして体を回す。

左足を上げ、弧を描きながら明命へと叩きこむ。

後ろ回し蹴り。

『魂切』でモロに受け、受け止めきれずに廊下に激突する。

「う……」

まずい。

背中を強打してから衝撃で動けない。

回復するまで数秒が必要だ。

それだけあれば少年は確実に明命を殺せるだろう。
だが。

彼は舌打ちをして、初めて口を開く。

「こんなもんかよ」

それは失望が混じった声で、

「いいか、佐山・竜人とかいう奴に伝えろ」

敵意と殺意を乗せて、

「罪は償ってもらう——お前の死、でな」

そう言って、先ほどまでの攻撃が無かったように立ち去る。

その途中で、

「何者ですか……？」

絞り出したような明命の問いに、

「観測者さ、元……な」

今度こそ立ち去った。

第二十三章 襲撃（後書き）

本来ならコレと前話が一緒のはずでした。

なんか短い気もしますが、そこは文章の密度で補ってると思いたい
ですね……？

三月二十四日に文章のおかしいところを修正しました。

第二十四章 『責任……？』（前書き）

やっちゃたものはしかたない。
それをどう受け止めるか。

第二十四章 『責任……？』

激しさを増す洛陽の戦い。

その中でいくつかの空白がある。

武将や特務クラスの戦いだ。

その中でなんの技術も無く殴りあう者達がいた。

「オラオラオラー……！」

「おりやああああなのだ！」

トンファーと矛がぶつかり合う。

それは衝撃波すらも生む一撃だ

それを為すのは『全竜』副特務の夕と劉備軍の張飛だ。

二人はひたすらに己の武器をぶつけ合う。

「やるなあ、ちっちゃいの！」

「おまえだってちっちゃいのだ！」

「なんだと！」

張飛は言うに及ばず、夕も大きくない。むしろ身長低めだ。

「オレはちっちゃくねえ、身長が低めなだけだ！」

「それがチビってことなのだ！」

言い合いの最中も激突は止まない。

いや、

「人が気にしていることを！」

夕が下がり、左右のトンファ―を打ちあわす。

「両・腕・強・化……！」

『鉄腕』と名付けられたそれから光があふれだし、

「根・性——！」

夕の両腕が光を纏う。

「な……！？」

「いくぜ、どチビ……！」

眩きとともに進む。

何のひねりもない突進。

いままでと変わることが無い突進だ。
しかし。

その一撃は、

「ぶち抜け……！」

過剰なまでに展開された加速符によって音速すら超えて張飛にぶち込まれる。

水蒸気の尾を引くその一撃を受け止めた張飛は、

「……！？」

その小さな体が飛ぶ。

数秒にも及ぶ滑空の後に地面に転がり込む。

本能的に体を丸め、回転する。

両腕がしびれる。

今の一撃は今までとは比べ物にならない

……なんなのだ！？

分らない。

向こうから教えてきた。

「概念兵器『鉄腕』、こいつの力は俺の両腕を鉄並みの強度にする
つてもんだ。つまり——」

夕は再びトンファーを打ち鳴らし、

「関節とかがそのまま鉄並みの強度になるんだ。普通ならぶっ壊れる
限界を越えて強化が出来るんだよ——！」

人間が本来発揮できる能力を使えないのは体がもたないからだ。
過剰なまでの性能は身を滅ぼす。

火事場の馬鹿力なんてのは後先考えないから発揮できるのだ。

しかし、鉄並みの強度を誇る夕には関係ない。

だから。

限界以上の稼働が可能なのである。

「いくぜ……！」

「ッ……！来いなのだ！」

激突が再会する。

膝を落とし、頭上を刃が通過する。

数本の髪の毛を持っていくそれはLOW-Gでは見慣れた、この世界では見ることの無い日本刀だ。

膝を伸ばしアッパー気味の拳を叩きこむ。

その先にあるのは北郷・一刀の顔で、

「潰れる、イケメン……！」

「妬みかよ……！」

顎を上げ、顔を逸らすことで避けられた。

拳を振り上げた姿勢の佐山・竜人に横から地面と平行に返しの太刀が来るが、

・——世界は一瞬で真逆となる。

瞬間。

一刀が刀を振り上げた姿勢に。

竜人が地面と平行に手刀を放っている。

「な……！」

後ろに下がろうとするが、間に会わずに手刀が入る。

それは加速符によって高速で振り抜かれ、一刀の脇腹を斬り裂く。血が吹き出るが、構わずに後退した一刀は日本刀を顔の横まで持つていき、刀身に左手を添えて、

「かせきは
風牙」

その一言共に日本刀は光を灯し、

「お返しだ……！」

後退した距離を無視するかのように竜人に喰らいつくような突きを放つ。

剣先に水蒸気を生むそれに、

「おっと」

後ろに倒れこむ事で回避する。

一刀の視界から外れた上で、

・——解り合えるものはない。

一刀の全感覚を消失させる。

そのまま蹴りあげようとして、

「まるつき
円月」

体を回し、それに刃が付いていく。

円い月を描くような周囲への斬撃。

それはすぐ近くにいた竜人にも襲い、回避を余儀なくされる。その隙に、

なりさや
「鳴鞘」

超高速の納刀による澄んだ音が響き、次いで破碎音が響き一刀は感覚を回復する。

それを見て、

……使いこなしてやがるな。

名前概念をうまく使っている。

表層の文字面の意味と名前そのものに含まれた認識、それぞれ二重の意味に力を与えるが名前概念はそれだけではない。

名前とは物理現象や架空の理論につくのだ。

故に、必殺技の名は、その技を具現する。

それらを理解して戦っている北郷・一刀へ、

「この中二病が……！」

「君だって大概だろ」

そんなことはない。

Low-Gはみんなこんな感じだった。

「ていうか、一体どうするつもりだよ」

鞘に手を置き、問う。

「このままじゃ、なんだかなんだで数の差でこっちの勝ちだよ」

笑みを浮かべながら勝利宣言をする一刀に。
竜人は、ふ、と小さく鼻で笑い、

「まったく問題ないと言いたい！こっちはちゃんと作戦が――」

「へえ、聞かせてもらいたいものね、それ」

後ろを向くと、一人の少女がいる。
褐色の肌に、長いピンクの髪。
へそ出しの露出の多い服装なのは、

「……れ、蓮華……？」

「ええ、ひさしぶりね。竜人」

笑みを浮かべているが、

……なんか怖いぞ！

後ずさる。

戦闘中の一刀に近づくことになるがそんなことにかまっていられない。
ない。

一步下がった所で。

蓮華の目が険しくなり、

……あ、ヤバイ。

「四年ぶりに会ったと思ったらなにしてるの！？」

彼女は剣を竜人に向けて、

「いい加減に責任を取りなさい！」

空気がというか戦場が止まって。
みんなで、さん、はい。

「ええー！」

第二十四章 『責任……？』（後書き）

うちの竜人くんは今更ですけどいろんな所でフラグ立てまくりです。

第二十五章 誤解（前書き）

信じてくれよ。

……ムリ？

第二十五章 誤解

四年前。

原則、呉に近づかないようにしている『全竜』が間違えて呉に近づいたことがあった。

そこで、たいした理由も無いけれど竜人がはぐれてしまった。

……昼寝をしていただけだったけど。

虎牢関の戦いのように置いてかれて。

一人で追いかけているところであつたのが蓮華だった。

……衝撃的な出会いだったなあ。

森の中を進んでいたら明りが見えたので近づいたら悲鳴付きの斬撃で迎えられた。

真剣白刃取りが出来てしまった。

熊だと思われたらしい。

護衛とはぐれた上で、迷ってしまったらしい。

孫堅、つまり水蓮の娘である蓮華を見捨てることもできずに数日間一緒にいて、治安が治安だけに賊に襲われたり、熊やら猪と戦ったりして。

緊急事態ということで、彼女に概念能力を貸したりしたのだ。

それから、無事に蓮華を街の近くまで送り届けて、勧誘されたりしたけど断って、別れた。

それだけだ。

別にやましいこともしていない。

ただ、過ちがあったとすれば。

蓮華も水蓮の娘である事の意味を理解しきれなかったという事か。

水蓮やその娘である雪蓮がそうであるように。

バトルジャンキー
戦闘狂。

蓮華にも余すことなくその素質を持っていた。

「誤解だー！」

そして、現在。

かつて概念能力というものを知った彼女は、

「あなたとの事が忘れられなくて、毎晩毎朝立てなくなるまで一人でして、それでもやっぱり満足できなくて、ずーっとモヤモヤしてて、ようやく会えたと思ったら何やってるの！？」

「主語抜きで喋るなー！」

ちなみに主語には鍛錬とかが入る。

この会話はもちろん戦場に木霊して、

「れ、蓮華、何時の間に大人に……」

「おねーちゃん！？」

彼女の姉である孫策と妹の孫香尚が驚いて、

「……………」

「！？大丈夫ですか、しつかり！」

周瑜が目を開けたまま気絶して、陸遜に心配されて、

「……………っ」

「うおっ!？」

甘寧が怒りのオーラを撒き散らして、刃を驚かせたり。

「ほほう。何時の間に」

黄蓋がおもしろそうに笑っていた。

そして、竜人は。

敵味方関係なく半目を向けられていて、どうしたものかと思っ
いたら頭上に影。

それは竜人目がけて落ちてきて。

「どわぁ!」

数センチ外れて地面に刺さる。

直刀槍だ。

それは青い光を纏っていて、その使い手たる星は。

「竜人……!」

ものすごい形相で叫んでいた。

彼女は馬超もほったらかしで、

「お前、自分の武器を手放すなよ!」

そう言われて彼女は自分の手を見て

「さっさと帰さんか……！」

「無茶苦茶だ……！」

投げ返す。

さらに背中から感じるのは、

「……………」

「……………」

「……………」

無言の圧力。

風、真桜、沙和だ。

何も言わないがその視線は、

……怖っ！。

さらに極め付けに。

右の袖を引かれる。

見れば恋が、

「……………」

瞳を潤ませて、見上げてくる。

……くはぁ。

吐血しそうだ。

相変わらず蓮華はこちらに怒りに目を向けているし、一刀は面白そうに見ている。

……さっきから、精神的にも肉体的にも死にそうだ……！
カオスだ。

頭を抱えていたら、

「竜人さん」

「今度はなんだよ！」

明命だ。

ボロボロになった彼女は怒鳴られて、涙目になり、

「せっかく頑張ったのに怒鳴られるなんて……」

誰もが竜人に、鬼畜とか最低と半目を向ける。

「わ、悪かった。明命、ていっかなんでそんなにボロボロなんだよ」

「いろいろあったんです……」

哀愁を漂わせる彼女はしかし。

「お連れしました」

背筋を伸ばして、背後の少女は露わにした。

第二十五章 誤解（後書き）

なんか、最後がグダグダに……。

蓮華はどうでしたか？

第二十六章 叫びの声（前書き）

叫べ。

謳え。

今、この瞬間を。

第二十六章 叫びの声

少女がいる。

白の長髪を持つ少女だ。

身を包むのは、およそ戦闘どころか運動にも向かない豪華な服装だ。

さらに首に緑の輝く石が二つある。

彼女は戦場を見渡し、注目を得ながら。

「おえ……」

吐いた。

「気持ちわる……」

「大丈夫ですか!？」

明命がかけより、背中をさする。

しかし少女は明命の手を払いのけ、

「なんじゃ、影の中というのはあんなに不快とは思わなかった……」

「そ、そうですか?泳いでる感じですよ」

無いわ、と彼女は明命から貰った水で口をゆすぎ、

「佐山・竜人じゃったな」

彼女は竜人を見て、頭を下げる。

「礼を言う。朕一人ではどうしようもなかった」

「いやいや、気にするなよ」

「いや、そういうわけには……」

「いやいや……」

「いや……」

同じことを繰り返し続ける竜人と少女。
そこに振りかかる声がある。

「なんなんですよ、あなた達!？」

袁招だ。

彼女は何時もように口元に手を当てて、胸を張っている。

「いきなり、現れて——」

少女に向けて指を指し、

「頭が高いわ、たわけ」

少女が指を鳴らすのと同時に頭から地面に倒れこんだ。

「……!？」

周囲に驚きが走る。

しかしそれは反董卓連合のみで、董卓軍や『全竜』は、

……安心を得ている……？

彼らを見て一刀は思う。

つまり、それは。

……彼女がこの状況を打破し得るっていつのか？
そう思い視線の先。

「うまくいつてるな」

「まあ、しかしお主朕に向かってなんじゃその口調。もちつと敬わんか」

「将来出世してから態度を変えたなんて思われないように、誰に対しても同じ感じで喋るようにヒヒオヤジからの教えでな」

「どんな教えじゃ」

その二人の会話を近くで聞いていた一刀は。

………？

ふと、少女に疑問を得る。

容姿はやはり美の付く少女だ。

その純白の髪や金の瞳は魅せられるものがある。

口調もそう珍しくはない。

……エロゲーじゃよくあったなあ。

前の世界を思い返す。そういえば積みゲーがあったような。

それは置いといて。

一人称だ。

彼女は自分に対する呼び方を朕、といった。

その一人称を使うのは。

「華琳、軍を引かせろ！」

一刀に叫びが届き、華琳は眉をひそめるが、彼女が言葉を放つ前に、

「一体何なんですの！？あなた！」

立ち上がった、袁招は声に怒りをにじませながら、

「この、袁本初に向かってそっちこそ頭が高いですわ、名を名乗りなさい！」

「やめっ……！」

一刀の静止も意味は無く。

「劉協」

彼女は当り前のように、

「第十四代目皇帝、劉協・伯和じゃ」

「は、はあ!？」

……遅かった。

目を見開く袁招。

竜人は得意げに笑っている。

その袁招に劉協は、

「帰れ、お主らに用は無い。朕たちは朕たちでやることがあるからの」

「な、ななな」

「何進や十常侍ですか？」

やることがあるという劉協に一刀が質問し、

「違つぜ。もっと他にやることがあるだろ？」

竜人が答える。

「何進や十常侍とかは反省の儀だ」

「……反省の儀？」

「ああ城壁から網で縛つて三日間逆さで吊るすんだ。だいたいそれで反省するけど反省してなかったらよく回した上でまた三日吊るす」

「そりゃ反省じゃなくて意識改革だろっ！」

「何はともあれ朕たちは忙しい。本来なら、胸がデカイきんぴ力な
どの構っている暇はないが、朕の家族である董卓が寄ってたかつて
いじめられているらしいからここまできたのじゃ」

息を吸い、

「終いじゃよ、この場はな。とっと帰らんとお主らを逆賊扱いする
ぞ」

「し、しかし——」

尚も言葉を繋げる袁招に告げた。

「くどい。ならばこういえばよいか？——勅命じゃ。今すぐ軍を引
け」

それをきっかけとして。

最初は曹操軍が。

次いで、劉備軍や孫策達が。

引いていく。

……終わったか。

とてつもなく長かった気がする。

どっと、疲れを感じる。

体が休息を欲している。

それはこの場に皆も同じだろう。

周りを見渡せば、誰もが思っているだろう。

自分たちが護りきれたのかと。

あの月のような少女を。

……護りきれたさ。

そう、皆に伝えようとして、

「――」

声がでない。

いかんと思ひ、体が思ったよりも疲弊していることに気づく。

思えばこの三日間、賢石を創ったりしていて寝てない。

それでも、体を動かそうとして、息を吸う。

は、という音がして。

体が体温と感触と息使いを感じた。

柔らかい。

それは大切な人。

恋だ。

寄り添い、後ろから浅く抱きしめる支えを得ながら、竜人は息を吸う。

右手を掲げ、夢ではない少女の熱を感じながら、

「皆よ」

ゆっくりと告げた。宙を握りしめながら、目を伏せ、

「叫べ幸いの吠声を……！」

第二十七話 温もり（前書き）

温かいね

第二十七話 温もり

街がある。

活気に満ちた街だ。

そのとある通りを腕を組みながら歩く二人がいる。

黒を基調とした服装の黒髪の少年と褐色の肌に刺青を持った赤い髪の少女。

二人は色違いでよく似たスカーフを首に巻いている。

佐山・竜人と恋だ。

二人は街を歩きながら、

「それでさ私塾みたいところがあつて、試験勉強をしてたらいきなり『せんべいの恨み……！』、とか言つてヒヒオヤジに襲いかかれて三日間口きかなかったら反抗期だと思われてなあ。——矯正とかいってさらに三日間殴り合つたんだよ」

せんべいが無くなつたらしい、などという竜人の話に、

「……………食べ物への恨みは怖い」

「まあ、その後知り合いのややエロい山猿空気の仕業と言う事が判明してな。まったく人の家でまでこそそこそとする空気もとつと去勢すべきだけど、やっぱりもっともすべきなのはあのヒヒオヤジだよなあ」

「……………」

長々と愚痴を吐く竜人とそれに笑みを浮かべる二人に、

「どんな話してんのよ」

掛けられた声があった。

茶屋のオープンテラスで半眼を向けるメガネの少女と柔らかな笑みを浮かべる少女がいる。

恋の方から声が掛った為に体をわずかに回したら、

……む。

組んだ腕に柔らかいものがある。

それは何とも言えない感触で。

……これは、まさかの精霊降臨……？

話に聞いていたのとは少し違うだろうが、同系列だろう。そのことに感激しつつ、顔には出さずに、

「月と詠か」

「あんた、なんかやましい事考えてない？」

「失敬な。どこかの偽悪猿やオープンエロスな妻帯者とかややエロ山猿空気と違って、

俺はやましい事など考えたことないぜ」

半目の視線が強くなった気がするが気のせいだ。その横で恋が言葉を漏らす。

「……………珍しい」

それは二人が街に下りている事だ。

本来なら政務などで城から離れることができないが、

「たまには、ね。離理たちが手伝ってくれるから政務は大分楽になったわ。そのおかげでこうしてボクも月も休みが多くなったし」

「いろいろありがとうございます、竜人さん」

「礼なら必要ないぜ。俺たちは自分たちの意思で月たちといるんだからな」

「——はい」

柔らかな、それこそ月の^{つき}ような笑みを浮かべる^{ゆえ}月。
それを見て、二人に向け、

「じゃ。もういくから」

「……………またあとで」

あっさりと去っていく二人。

その二人の背中を見て、
詠がポツリと。

「十年越しの約束……………か」

十年前。

竜人と恋はある約束をした。

それは村を空ける竜人が帰ってきたら恋とどこかへ遊びに行くと
いうもので、しかしそれは果たされることなく十年が過ぎた。

虎牢関で再会し、洛陽の戦いやその後始末などで時間がなかった
が。

ようやくここ数日で落ち着きを見せ、今日、約束を果たすことにな
った。

朝から二人で街を周り、詠と月に出会った二人は食堂に入り、

……相変わらずだな。

恋の大食漢ぶりを見た。

「……………」

無言でひたすら食べ物を口に運ぶ。それは餃子やシュウマイや肉
まんなどの点心であったり、炒飯やラーメンなどの主食や麻婆豆腐
や野菜炒めなどの主菜と多種多様だが、

「……………」

モグモグ、という擬音と共に恋の中へと消えていく。

会話はほとんどないが、竜人はそれに不満を見せることはない。
なぜなら、

……ああ、かわいいなあ。

恋を見ながらニヤニヤ笑っていた。

そして、恋の意識が食べ物に集中している時に懷から小さな四角
い箱を取り出し、恋のへと向け箱に付けられたボタンを押す。

その箱とはもちろんカメラである。竜人が作成した物で、撮影用
の概念を使い動画も写真も思いのままだ。

それを連写して、恋が気付く前に懷に仕舞い何食わぬ顔で箸を進
める。

恋はそれに気付くことなく食べ進む。

……完璧だな。

自分で怖くなるほどだ。ヒヒオヤジなど目ではない。

自分の行動に満足した所でふと横を見れば、

「……………」

少し離れた席に霞がいて、酒を飲みながら半目を向けていた。
なにしとるねん、と目が言っている。

周りを見れば他の客も戸惑いの目で見ている。

それらの視線を受けて、竜人はふと思った。

……今、俺は異常なことをしてないだろうか。

だから竜人は自分の状況を確認した。今、自分は食事をしている恋を見ながらニヤニヤ笑い、時たま懐からカメラを取り出し連写して仕舞い、箸を進めながらニヤニヤ笑っている。

……誰がどう見ても盗撮や変態の所業ではなく、可愛いものを愛でているだけだな。

おまけに被写体に負担が掛らぬように一瞬で事を為している。文句なし。

可愛いは正義だ。

よし、と竜人は頷いた。我が行動に一切の嘘もやましさも無い、と絶対の自信をもった表情で竜人は彼らに静止の合図を送った。

ややあつてから、霞は首を振り、客たちは戸惑ったように顔を見合わせる。

そこに竜人は、いいな？という頷きを見せ、さらに静かにするよう、手で低い空間をゆっくりと叩くジェスチャーをする。音をなるべく立てるなど。

もちろん、恋には見えぬようにだ。

客たちはぎこちなく慌てて頷いた。皆なるべく音をたてぬように箸を進め、食べ終わったものは抜き足差し足で去っていく。

視線を厨房の方に向ければ店の店主の男性はこちらに左の親指を立ててこちらに見せる。それを見てまるでUCATのようだと思いな

がら霞を見ればすでに酒に集中している。

竜人は店主に確かな相槌を返しつつ、

……期待されたからには、このミッションは成功しなきゃな。
決意を胸に抱きつつ箸を進めた。

光がある。

沈みゆく大きな光だ。

太陽。それも黄昏時のそれだ。

沈んでいくのと同時に世界が闇に染まっていく。

洛陽の主街区からはずれた小さな丘。人気はわずか。

地平線へと落ちていくそれを見つめるそれらを見つめる二人がいる。

「壮観だなあ」

「……………恋のお気に入り」

竜人と恋。

言葉は少なく、しかし口元には笑みをもって。

二人は色が変わりつつある世界を見届ける。

どれだけ時間が過ぎたか。

「竜人」

「ん？」

「ありがとう」

「――」

彼女は視線を竜人へと向け、胸の前で手を組み満面の笑みを浮かべる。

「……約束を守ってくれて。月たちを救ってくれて。……虎牢関で助けてくれて。――十年たっても恋の所に来てくれて」

彼女は息を吸い。

「……嬉しかった。嬉しくて嬉しくてたまらかった。胸が、はちきれそうになった。」

だから、と。

「――ありがとう」

これ以上ないくらいの笑顔で彼女は言う。
それに対し、竜人は

「そんな……」

竜人は視線を落とし、両の手を握りしめる。

「……そんなこと言うなよ」

十年だ。

それは当然のように長い時間で。

「俺は、十年もお前のことを放っておいたんだ。お前に忘れられて

ないか、お前に嫌われてないか、お前に憎まれてないか。――
怖かったんだよ」

例え、約束を守っても。

誰かを助けても。

仲間の力を借りても。

十年を放っておいたというのは竜人の罪だ。

十年の間、過去の得ることができたわけでもなく、軋みはただ誤魔化しているだけだ。

……弱いな。

思う。

佐山・御言たちのようにはいかない。

「ごめんな。本当にごめん。俺が弱かったから――」

言葉はあるもので止められた。

体温だ。それは当然のように恋の体で、

「……いいよ」

彼女は竜人を抱きしめて言う。

「……竜人は来てくれた。怖くても、来てくれた。それは――竜人の強さだよ」

「……恋」

抱き返す。

感じる体温には熱があり、

……温かいな。

それはかつては竜人が拒絶していたものだ。

かつて、LOW-GのUCATで拾われた竜人はしばらくの間、孤児院にいた。そこは全竜交渉で親を亡くした子供が数多くいて、しかし竜人は誰とも関わろうとしなかった。

なにもない空っぽの自分に生きているのも死んでいるのも一緒だ
と思っていた。

ほとんど食事もとらずに、意味も無く部屋の片隅でうずくまっていた。

そして、ある日。様子を見に来た佐山・御言と新庄・運切とともに食事を取り、まったく食べずにいたら、突然佐山が塩のビンの蓋を空け、竜人の口の中にぶちまけた。

口の中で爆発が起きたと思った。

吐きだし、咳き込んでいたら。

——なんだ、味覚があるのかね。

うむ、と前置きし、ありったけの調味料を口に入れられた。新庄の制止も聞かずにそれは続けられ、最後には竜人はよだれをたらし、涙を流し、鼻水もダラダラだった。

何かを言おうとして、

——吐きだすか。ならば君は生きたいのだね。

何も言えなかった。

——生きたいのなら、そう言いたまえ。私たちは意思を持つ者には寛容だよ。

そう言われて。

数週間後、竜人は佐山の姓を得た。

その時に、佐山とは握手をして、新庄に抱きしめられた時、

——温かい。

そう思った。

そして、今。

全身で感じる体温はかつて感じたものとは違うが、

……温かい。

だから紡いだ言葉は、ゴメンでなく、

「ありがとう」

「……うん」

そして。

「……………ん」

唇を重ねる。

吐息が漏れ、抱きしめ合う力が強くなる。

それはしばらく続き、再び、

「……………ん」

それは世界が完全に闇の色に染まるまで続いた。

「はあ」

ため息が漏れる。

城の中の執務室。そこには詠と月と大量の仕事がある。

……昨日みたいな休みは何時になるのかしら。

再び溜息をこぼしつつ、仕事を消化していく。

「はい、詠ちゃん。お茶が入ったよ」

「ありがと、月」

月からお茶をもらう。

しかし、家事がうまい王とはどうなんだろう。
疑問を覚えたところで、お茶を飲み、

「ん？茶葉、変えた？」

「うん、椿さんから貰ったんだ。えっと、名前は……」

月が言葉に詰まった所で、

「マロ茶葉だろ」

見れば、部屋の入り口に竜人が立っている。

よ、と右手を挙げて部屋に入る。

「それです。マロ茶葉」

「ふうん」

再びお茶を口に運ぶ詠に、

「そのお茶っ葉作ったの俺なんだよ」

詠が少しお茶を拭きだした。

驚いている月に自分の分のお茶を頼み、窓際に移動する。窓の外から見える庭の木を手入れしている中年の男性に右手を挙げてあいさつし、

「昔、頭のイカレた超の付く変態偽悪猿がいてな。そいつが作ったのに負けないように作ったんだよ」

「ふうん。……ボク、それとよく似たヤツを知ってるんだけど」

「マジか。そんなヤツが这个世界にもいるのか」

「うん。——アンタだよ！」

詠の人さし指が指す先を見た。

自らを貫徹して、背後の窓を貫き部屋をでて、当たるのは先ほどの中年だ。

……あの人がか。

人はみかけによらないものだ、と竜人は納得しつつ視線を詠たちに戻す。

それを再確認しつつ、月からお茶を受け取る。

詠が半目を向けているが、気にしない。

そして、一口お茶を含み、

「うん。いい味だ」

第二十七話 温もり（後書き）

カワカミン、大増量のつもりです。

第二十八章 模擬の戦い（前書き）

手加減しないぜ？
当然や

第二十八章 模擬の戦い

洛陽の城。その中庭に三つの音がある。

それは鉄がぶつかり合う音。

それは風を押しわけ進む音。

それはあ、という叫びの音だ。

「……！！」

それは生むのは少年と少女だ。

その少年は黒の服に身を包み、左手には刀身に亀裂模様の入っている無骨な黒の短剣を手をしている。

その少女は胸にサラシを巻き、羽織に袴という軽装で偃月刀という薙刀に似た武器を握っている。

二人は共に首から石を三つずつぶら下げている

それぞれの武器がぶつかり合う。

少年の短剣が左上から、少女の偃月刀が右下から。
激突。

二人は間合いを取り、

「なんや、剣も使えるんやなあ。竜人」

「当然だぜ。俺は広く深くがモットーなんだよ、霞」

「せやろつなあ。——この女たらし！」

霞が指を指したら、竜人は左手を額に当ててポーズを決めながら、

「ははは。何言ってるんだよ、霞。俺は女たらしじゃなくて——モ

デモテなただけだぜ？」

むかついたので斬りつけた。

竜人はそれを黒の短剣で捌きながら、ポーズを崩さず、

「……嫉妬か？」

ぶちぎれたので突っ込んだ。

……うおっと。

連撃の苛烈さが増した。

さっきの一言がきっかけだ。

つまり、

……図星か！？

ははは。もてるのも困るなあ、まあ、それもエロゲーの賜物か。

ハーレムルートばかり攻略してたなあ。めざせ！ハーلمキング！。

……おっと、目の前に刃が。

黒の短剣で受け止める。

強く弾いた。

霞は数歩下がり、さらに大きく後ろに跳んだ。

……逃がすかよ……！

追う。距離を詰めながら黒の短剣を振りかぶる。

狙いは霞の腹だ。加速の符を展開し彼女に追いつき、

「おお……！」

短剣を、

「……………!?!」

振り抜き、しかしそれだけだった。

……………これは。

見る。

短剣の表面に細かい水滴が浮かんでいるのを。

何が起ったかを理解した。空気中の水分が集まり、距離感を狂わせ霞の鏡像を創りだしたのだ。

それを人は霞むと言う。

……………けど、ドコだ!?!。

何があったのかは理解した。ならば彼女がどこにいるか、だ。

前方の視界百八十度にはいない。

ならば。

……………後ろか!?!。

視線だけで見た。霞が偃月刀を振り上げる姿を。

……………行くで……………!。

偃月刀を構える。意識するのはその名前だ。

飛竜偃月刀。

名前が力を得る概念の下。

「飛ばすで……………!」

振りかぶり、

「飛竜の斬撃!」

振り抜いた。

斬撃の延長線上に光が行く。

三日月形の斬撃の光だ。

それは空気を切り裂きながら竜人へと迫る。

当たれば竜人の上半身と下半身がお別れする一閃だが、

……賢石の防護とやらで問題なしや！

二人が首から掛けた三つの賢石。それは受けるダメージを引きつけるものだ。

すでに霞のは一つが許容範囲を超え、意味をなくしているがそれは竜人も同じだ。

むしろコンパクトな斬撃を多数与えている分、向こうの方が消耗が激しいだろうし、今の一閃が当たれば後の二つの賢石も力を失うだろう。

つまり。

……ウチの勝ちや……！

そう思い、一閃を見届けようとして、見た。

竜人の動きを。

竜人は左下から右上に右腕を振り抜いた姿勢からさらに後ろへと右腕を振る。

肩が開き、体が回る。後ろへと振り向く動きだ。

そして、右腕は再び左下へと振られ、

「行け……！」

斬撃が飛んだ。

それは概念の力ではなく、

……気か！？

そう。佐山・竜人は概念能力の保有者であるのと同時に気の使い手でもある。

そして、二人の距離の真ん中あたりで、

「!!」

激突する。

光と土煙りが舞いあがった。

それらは瞬く間に二人を覆い、視界が機能しなくなる。

霞は数歩後ろに下がる。それはさらに距離を空け斬撃を送るためだ。

お互いに位置が分からないので、下手な動きは取れないが後ろに下がるだけなら問題ない。視界が回復してからすぐにでも斬撃を送るため、構えたところで、

「よう」

土煙りの中から竜人が飛び出してきた。

「……な!？」

見れば、竜人は首に巻いているはずのスカーフを目隠しのように目に巻いていて、何かが書かれている。

それは、

「視界良好……!」

「T e s ・ 《テストメント》」

その答えを聞いたと同時に、黒の一刀が叩きこまれた。二つの賢石が光を失った。

「だあー！負けたあ！」

大の字で声を上げる霞。

それを見て竜人は苦笑し、

「いやいや。イイ線いつてたぜ」

彼女に手を差し伸べる。

彼女は不服そうに口を尖らせながら、

「ホンマかあ？」

「ああ。T e s .」

霞が取った手を引きあげ、庭の片隅に建てられた掲示板に目を向ける。

それは城の主要メンバーの予定表ニッケネームが書いてある。
ちよつとした暗号の為に字名で書かれており、

- ・陛下様：『執務で軟禁じゃ…………』
- ・へう娘：『へう。わたしもです…………』
- ・つん娘：『ボクもだよ…………』
- ・音×三：『ねねもなのです…………』
- ・紅侍女：『御四方の護衛です』
- ・双頭竜：『同好の士との会合』
- ・鉄腕：『身長伸ばし体操』
- ・お洒落：『新作服の試着なのー』
- ・螺旋槍：『発明やー』
- ・傷つ娘：『第三回、お、乙女講座に…………』

・はわわ：『ちよつと、市場に資料を……』
・流星：『花蝶仮面』
・酒好き：『酒やー』
・猪：『修行』

それらから少し外れて、

・悪役
・無口
・猫好き
・殺人鬼
・医者

と。まとめて書かれたところには、

：『数日内に起こる魏と呉の戦いを偵察』

そう書かれていた。

第二十八章 模擬の戦い（後書き）

新学期が忙しくて大分遅れました。

すいません。

第二十九章 慟哭の中で（前書き）

天へと昇るのが痛みの慟哭なら
地に差し伸べられるのは
はたしてなんだろう

第二十九章 慟哭の中で

「ちくしょう……」

声が漏れる。

それは悲しみと痛みを持った声だ。

「ちくしょう……！」

そこは戦場になるはずだった。

しかしそうなることは無かった。孫呉を責めた曹魏。正面からぶつかろうとして、しかしそれは叶わなかったのだ。

末端の兵が独断で孫策を暗殺しようとし、成功され彼女は毒に犯された。

彼女の最後の大号令。

それによって生じたのは戦ではない。

「ちくしょう、何でだよ！」

感情の瀑布だ。

「袁術から孫呉の大地を取り換えしただっていうのに……！」

孫呉の兵は誰もが涙を流し、それに拭うともせずに叫ぶ。

曹操の命によって何もせずに撤退しだす曹魏の兵に向かって。

「何が誇りだ、何が霸道だ！毒を使って暗殺するのが曹操のやり方か！」

曹魏の兵は言い返せない。言い返したいのだ。自分たちの霸王はそんなことをしないと。

だが、それでも、孫策は毒を受けた。

だから、曹魏の兵は何も言わず奥歯を噛みしめ、握りしめた拳から血が滴り落ちるのも構わずに甘んずる。
感情を。

「ちくしょう……!!」

「殺せ、殺せ、殺し尽くせ！」

叫ぶ。それには怒りと憎しみが込められていた。

甘寧——思春だ。

彼女は普段の静かな佇まいは無く、ただ感情の担い手として叫ぶ。

「我らの怒りを獣どもに叩きつけろ！」

曲刀を振う。

我武者羅と喋っていいほどの勢いで振われるそれは全てが曹魏の兵の背中へと叩きこまれる。

「王を……我らの王を穢した罪を奴らの命で償わせろ！」

彼女はこんな風に死ぬ人では無かった。

……それなのに……!

「抵抗するものは殺せ! 逃げる者も殺せ! その血を大地に吸い込ま

せ、孫呉に二度と刃迎えないように……！」

言葉通りにするために進む。

そして、頭の片隅に浮かぶのは自らの主である蓮華だ。

彼女は泣いているだろう。怒りに震えながら、剣を構えながら。

……そんなものは私の望むことではない！

彼女の涙を止めるためにはどうすればいいのか。

……いつそ、このまま曹操を殺しに行こうか。

そこまで思った時に見た。

「何……？」

あるものを見た。

人だ。それも宙を飛んでいる。

……いや、吹き飛ばされて……？

思春の視界の中央の兵が曹魏も孫呉も関係なく吹き飛んでいる。

さらにその両端の兵は倒れ伏しているので余計に強調されている。

目を細めてみる。こちらに来る者達を。

五人だ。

紅い髪の少女。

黒い長髪の少女。

赤髪の少年。

短髪の青年。

その後ろで戦闘に参加せず何やら手を動かしている黒髪の少年。

彼らを見て、

「何故だ……」

向かう。

五人は思春が近づいたに気づくが、走り止めない。

「何故貴様らがいる、——『全竜』！」

「決まってるだろう？」

答えたのは黒髪の少年だった。

「——助っ人、参上」

「いや……」

雪蓮は懂れだった。

母が死んでから、蓮華にとって誰よりも自由で、強い人だった。酒ばかり飲んで、仕事もせず不真面目だったけど。誰よりも懂れていて、大好きだった。

「いや……！」

なのに。

彼女は自分の腕の中にいる自分の姉は驚くほど軽く、力がない。

どうにかしたいがどうすればいいのかわからない。

医者たちはすでに匙を投げた。

概念能力もだめだ。

反董卓連合で手に入れたのほとんどが戦闘用で治療用はない。

「姉様……！」

「お姉ちゃん……！」

隣にいる小蓮の顔はくしゃくしゃだ。涙を流し、目を真っ赤にはらしている。

でもそれは自分も同じだろう。

……いや。

「めい……りん」

「ここに居る。……どうした？」

「蓮華とシャオを……お願い……」

「分かっている」

「……ふふ。素っ気ないわね」

「性分だからな。雪蓮」

「なに……？」

「先に逝っておけ。……私もいつかそちらに逝く」

「うん……ずっとずっと……待ってる、からね」

「ええ。待ってなさい……」

死に別れようとする親友同士の会話としては味気ないとも言える会話だ。

それでも、二人にしか分かりえないものがあるのだろう。

……私はそんな風には……。

なれないと、そう思う。

うん、と雪蓮が小さく頷き、咳き込む。

「はは……もう……時間がないみたい……」

「姉様……」

いや。

いやだ、と声が漏れる。ひ、という音も。

また失う。

母である孫文台のように。

涙がとどめなくこぼれていく。

……いやよ……。

だが。

その思いは叶わず。雪蓮の身体から力が抜けていく。

その事実にもるで泣き叫ぶ子供のように。

……いや……！

背をのけ反らせ、もはや叫ぶために顎を挙げたところで、

「泣くなよ、蓮華」

「え……？」

声が来た。

それはあるものも伴っていた。

符だ。

それは蓮華の背から大量に飛来し、雪蓮の身体の周りに浮遊し、光を放つ。

それらに書かれている文字は読めないが、意味は理解できる。

存命や延命、解毒などだ。

後ろを見る。

果たして、そこいたのは、

「泣く理由なんてどこにもないだろう、ん？なにせ——」

かつて、数日間ともに過ごし、自分に概念という力を教えてくれた少年。

装甲服で右腕からわずかに血を流している。

彼は額に汗を浮かべながらも、不敵な笑みを浮かべながら、

「孫策は死なない。俺が死なせないんだからさ、T e s . ?」

佐山・竜人はそこにいた。

……どうして! ?

現在、洛陽にいるはずの竜人が何故ここにいるのか。
その疑問を叫んだのは祭で、

「何故、お主がここにいる! ?」

「私が連れてきました」

答えたのは、

……思春! ?

「独断で申し訳ありません。後でいくらでも罰は受けます。しかし
——雪蓮様が助かるにはコイツらの力が必要かと」

それを聞いて竜人を見る。

「……助けてくれるの……?」

「権殿! ?」

祭の咎める声が聞こえる。

こちらに足を踏み出そうとして、踏み出すことなく止まった。

冥琳が止めたのだ。

彼女は無言で首を横に振って、彼女を止める。

それは諦めているのか。

それとも。

賭けたいのか。雪蓮が助かることに。

蓮華自身は。

賭けたいと思う。

「……竜人」

「テストメント
T e s .」

我、契約せりと。

竜人は答えた。

彼は後を向いて、

「凱、頼む！」

「T e s . !」

呼ばれてきたのは赤髪の少年。

華陀だ。

彼はこちらに走り寄り、蓮華と小蓮を下がらせる。

そして、懐から取り出したのは一本の針だ。

華陀は磨き抜かれたそれを天に掲げ

「時間がないので省略だ……！」

吠える。

「元・気・に・な・あ・れ……！」

雪蓮の傷口に針が突きたてられ、

「……！？」

その場にいる者達が拒絶の暴風と共に吹き飛ばされた。

……まさか。

吹き飛ばされ、受身を取った竜人は一つの予測を得る。

それは確信へと変わり、

……孫策が受けた毒は概念によるものか……！？

それならば今の現象を理解できる。

毒という概念が凱の治療を拒絶したのだ。

その意味を果たすために。

聞いたことがある。

かつて、新庄・運切が神剣・十拳の下で命刻の一撃の傷を治療の際に同じように拒絶されたという。

見れば、雪蓮の周りの展開されていた符も全てが破れさっている。

……いかん。

いままで符の力で何とか存命してきた。それが無くなったという事は。

「……だめ……」

声が聞こえた。

同じように飛ばされた蓮華の声だ。

符が無くなった意味が理解できたのか。

弱すぎる声が聞こえる。

それを聞き、思いなおす。

……いかん、じゃねえな。

どうするかだ。そして、その答えはもうとつくの昔に出ているのだ。

起き上がり、前へ進む。

尚も暴風が叩きつけられるがそれでも前に行く。

そして、懷に手を入れ取りだしたのは二枚のチップだ。

プラスとマイナスが刻印されている。

歩み続けながら、ゲオルギウスからCoreチップを外し、プラスチップを右手に、マイナスチップを左手にはめる。

そして、逆位置にはめられたゲオルギウスの両手を握りしめた時だ。

『——我は、佐山と新庄の姓とともにあり……！』

声が響く。

それは竜人にとっては義理の祖父である新庄・由紀雄の声だ。

その声に届けと、思いながら答えた。

「ああ。佐山の姓も新庄の意味も受け継いだ……！」

だから、示せ。

「あらゆる概念をねじ伏せるその力を……！」

示された。

黒と白の光が飛沫のように弾け、澄んだ破碎の音が響く。

……何が？

蓮華は見た。

竜人が雪蓮のそばに立って、両の拳を突き出したのを。

それと共に光と破碎音が生まれたのだ。

光が晴れて見えたのは佐山・竜人の背中だ。

それに走り寄る。

「竜……」

「あー。疲れたー。」

彼は突然右腕を押さえながら座り込んだ。

「ここに来るまで、加速符使いまくって治療符作ってたのはさすがに大変だった。でも——」

竜人は蓮華の手を取って引き寄せる。竜人の横に座り込む姿勢になり、

……あ。

そこは雪蓮の前だ。

彼女の顔を覗きこめば、

「——その甲斐あったなあ」

「れん……ふぁ……？」

雪蓮は。

もう二度と開かれることは無いと思った目は開かれ、こちらを見ている。

さらに力が無い笑みで、

「死にぞこなつちやたみたいね……」

「……っ」

目じりに涙が浮かぶ。

それは悲しみではなく、喜びの涙だ。

「姉様……！」

抱きついた。

「母様に怒られちゃったわ」

蓮華に抱きしめられながら、

「死ぬのは早いってね。———拳骨付きで」

第三十章 不理解の真意（前書き）

わからないから知ろうとする
それでもわからない時は
どうしよう

第三十章 不理解の真意

呉の孫策に寢室に将たちが集まる。

寢台で上体を起こした孫策を取り囲むように立っている。彼女達の視線の先は皆一様だ。

扉。その周りの壁にもたれる少年と少女たちだ。

「さて」

右腕をポケットに入れている黒髪の少年が口を開いた。

彼は左肘を支点にして左腕のみを広げ、

「話し合おうぜ。今回の行き違いについて」

不敵に笑った。

……行き違い……？

雪蓮の疑問はみんなも同じであり

「行き違いだと!？」

叫んだのは思春だ。彼女は身を乗り出し、叫ぶが、

「おいおい落ちつけよ、甘寧。叫んでも疲れるだけだよ?。」

「黙れ、弥当!叫ばずにいられるか!。」

弥当という青年の言葉も聞かずに思春は叫ぶのをやめないが、

「聞いたか、総長？名前呼んでくれたぜ。これは俺にもフラグが立ったと見ていいのか？」

「甘いな、あれは難易度高いぜ。どうせなら一回くらい剣でぶつさされなきゃ。そう——異物・挿入！」

「そこまでしなきゃダメなのか……？」

……真面目な話をしてるのよね……？

見れば思春は怒りで震えている。
見かねた冥琳が話を進める。

「それで、行き違いとはどういう事だ？今回の下手人は魏の兵ではないと？」

「いや、実行したのは魏の兵だろうな」

「ん？？どういうことですか？」

穩ののんびりとした声で問う。

「魏の連中だけじゃ今回の闇討ちは無理なんだよ」

そう言いきる。

……どういうこと？

自分を暗殺しようとしたのは魏の兵の独断ではないのか。

すでに曹操から謝罪文としばらくは不干渉の姿勢をとるという伝令が下手人の首と共に送られている。

「ほう？何か根拠があるのか？」

「ああ。お前らの概念能力は基本的な名前概念だろ？それと身体強化とか加速の符だな？」

「ふむ。たしかにあの何とも形容しがたい踊り子はそう言っていたが……」

「なら、やっぱり、魏の連中には無理だ」

竜人はいいか、と前置きし、

「孫策級の武人を概念的に毒殺しようと思うと、孫策と同じくらいの強さの武人で毒の意味の姓や名前、真名を持ったヤツが、毒の意味を持った武器で、毒毒の矢ー！とでも叫ばなきゃだめだ。最後はともかく、最初の三つを満たすヤツは俺の知る限り魏にはいない」

「だから、魏では策殿を暗殺しきれないと？」

「まだあるぜ。魏から送られてきた首を見てきたけど妙な概念の残滓があった。恐らく……」

「操られていた……というわけですか？」

「T e s . つまり黒幕は他に居る。これが今回の行き違いだよ。呉は王を殺されてかけてキレたし、魏はそれを自分たちが悪いと勘違いしたと」

「黒幕の心当たりはあるのかしら」

蓮華の質問に竜人は、ふむ、と顎に左手を当てた後、

「ないこともないんだよなあ」

竜人は左手の指を一本立てて、

「まず俺らの所現れた卑弥呼とかいうヤツ」

二本目を立てて、

「蓮華たちの所に出たっていう貂蟬」

三本目の指は少し溜めて、

「“観測者”とかいうヤツだ」

聞きなれない言葉だ。

竜人は部屋の隅で座っていた周泰に目を向け、

「この前の洛陽の時に、明命が後ろから近づいたら顔面強打でヒヤッハー無言連打喰らって捨て台詞キメ顔で残して去ったらしい」

「お姉ーちゃん、あの人が言ってるんの……」

「え？分からないの？」

……分からないわよ。

きつと誰も分かってないと思うが、蓮華だけはきょとした顔をしている。

……だいぶ染められちゃって。
いつの間に。

「まあ、こいつに関してはこれから調査していくつもりだよ」

首を横にふって苦笑いする竜人。

その仕草で空気が弛緩する。皆小さく息を吐く。

最も話に加わらない呂布や周泰は部屋の隅で座り込んでいるだけだが。

「ああ、そうだ。孫策」

「ん？ なにかしら……ていうか雪蓮でいいわよ。命を救って貰ったわけだしね」

雪蓮が軽い感じで真名を許し、冥琳たちも真名を名乗る。
思春はかなり渋っていたが。

呂布——恋たちも順番に名乗る。

竜人はそんな雪蓮を見て、目を伏せて、

「なるほどなあ。さすが親子」

「？」

「いや、なんでもないさ。教えてもらい事があるんだが」

「なにかしら？ できるだけ聞くけど？」

「ああ、簡単だ。孫文台——水蓮さんの眠る場所はどこだ？」

その問いに少し、戸惑いを得る。

蓮華から母と竜人が交流があったらしいという事は聞いている。

……でも、一回会っただけよね。

それも戦いという出会いだったらしい。

それなのに墓所を聞くという事は、

悪役、なんて名乗っている割には。

……優しいじゃない。

少しだけ笑みがこぼれる。

「そうね、蓮華。後で連れてってあげなさい」

「え？あ、はい」

「ん。悪いな」

それだけ言うと竜人は恋たちに目をやり、扉に向かう。

話はもう無いという風に扉に左手を掛けた所で、

「待て」

止められた。

……おや、いつの間にか真面目な感じに。

部屋の端で恋と一緒に難しい話が終わるのを待っていた明命は戸惑う。

原因は部屋を出ようとした竜人が冥琳に止められた事だ。

冥琳は真面目な顔で、

「まだ、大事な話があるだろう?」

「と、いうと?」

「簡単な話だ、提案と言うべきか。いいか?——我々、孫呉は漢王朝と同盟を結びたい。いや、それこそ王朝に帰属するという形でも構わん。簡単だろう?」

……へえ、意外ですね。

冥琳は今帰属という形でもいいと言った。

それはつまり、

……呉は天下に興味が無いという意味ですね。

そういえばもともと呉は自らの大地を守る為に戦っていると聞く。だからこそそう言えるのだろう。

……まあ、普通は受け入れますよね。

現在の漢王朝の首都である洛陽は大陸の中央だ。

故に四方を魏蜀呉に囲まれている。

その中で呉と同盟を組めば、

……四国最強の水軍の力を得ることが出来ます。

それはかなりのメリットだ。

それに漢王朝や『全竜』は個人の質は四国一だが数は他の三国に劣る。

それ故に呉との同盟は貴重だが、

「んー、言っていていいか?」

「ああ」

「うん。では言わせてもらおう」

……普通は、ですよね……。

残念ながら目の前の悪役はとびつきりぶっ飛んでいる。

「断る」

「……理由は？いや、お前の一存で決めてもいいのか」

冥琳は目を細める。それは即答した竜人を咎めるものだ。

「ああ。喝目しろよ」

竜人が左手のみで懷から取り出したのは質の良さそうな紙で、そこに書かれているのは、

「皇帝相談役指名状……！？」

「テストメント
Test」

竜人は得意げに笑って、

「俺らが漢王朝に仲間入りした時にお互い役職を重複したんだよ、信頼の証として。『全竜』からは総長である俺が、漢王朝からは…

…」

竜人が明命の横に居る恋に目を向け、みんなもつられる。視線を受け、恋がポツリと、

「……………恋が『全竜』の副長」

「欠番だった副長に恋がなった。分かるか？今の俺は勝手に、今、ここで決めてもいいんだよ、劉協陛下を納得させられる理由があるならな。——そして、それはある」

「聞いてもいいか……」

「いいとも。簡単だ」

竜人はいつもの不敵な笑みを浮かべ、自身満々に言いきった。

「佐山の姓は悪役を任ずる。——それだけだ」

……まあ、理解できませんよね。

案の定、皆理解できないという顔をしている。

蓮華だけは苦笑いを浮かべている。

それにすこしだけ嫉妬を感じてしまうのは小さい事なのか。

場の雰囲気は再び張り詰めている。

先ほどから緊張と弛緩を繰り返しているが、

……いいかげんつかれましたね。

それは、竜人の隣で立っていた刃も同じだったのだろう。

彼はヤレヤレと首を振り、

「おりゃ」

竜人のこれまでの会話ですっとポケットに入れていた右腕を軽く叩いた

「ぬがあああああああ！」

叫びと共に床をのたうちまわる。

「右腕痛いのにカッコつけてるかそうなるんだよ。悪い癖だよ」

「お、おま、お前！なんか恨みがあるのか！？せつかくこのまま力ッコよく終わらせれたのに！」

「ははは。いやいや、いつつも勝手するのも限度があるだろとか、振り回される身にもなってみるとか、最近ハーレムの王気どりで調子に乗ってんじゃないかーとか。まったくもって思っていないから安心していいから、T e s . ?」

「思ってるだろ！めちゃくちゃ思ってるだろ！てか“ハーレム”の発音がうまくてム力つく！」

…… 一気に力オスですねー。

恋と一緒に立ちあがっておく。

ぬああ、と呻きながら床を転がりまわっていたら、ある個所で止まった。

皆が見た場所は、

「何してるんですか、竜人さん？」

「いや、痛みのおまりにのたうちまわっていたら、降臨しかけの精霊を発見してな。うむ、受け止めたら治る気がする」

明命の足の間だった。

「へえー。精霊がいるんですかー。知らなかったなー。ちなみにどんな？」

「ああ。これは見たこと無いものだが——おそらく、太ももの精霊！はっ、いかん。降臨するぞ！受け止めねば！」

真上に手を伸ばす。

必然的に明命の太ももに竜人が触れて。

「これは……また未知の感触……。うむ、おお快なり！」

「何がですか！」

顔面への踏みつけで床の精霊を降臨させた。

第三十章 不理解の真意（後書き）

最近、感想のありがたみをようやく理解できました。

ごった煮のような作品ですが感想を待っております。

第三十一章 正逆の三人（前書き）

みんな一緒に

たとえ進む道は違っても

同じところに行くよ――

第三十一章 正逆の三人

強い日差しがある。気温も高い。

呉のとある川沿い。そこには一つの石碑がある。

その前に立つのは手提げ袋を持った黒ずくめの佐山・竜人と露出の多い服装の蓮華だ。

昨夜の話し合いから一日が経った。本来ならすぐにも洛陽に戻る。ところだが、竜人が孫文台の墓参りのために少し予定を遅らせている。

竜人は蓮華の案内で墓参りに、他は呉の街を観光したり、凱などは昨日からずっと治療が続けている。

墓の前に竜人が立ち、二歩ほど離れて蓮華がいる。

竜人は墓の前に胡坐をかいて、

「久しぶりですね、水蓮さん。六年ぶりですか」

「これ、俺の世界のお酒です。試しに作ってみたんですけど中タイケますよ」

……なんだか変な感じね。

目の前の少年が誰かに敬語を使うのは初めて見た。

手提げ袋から細長いビンを取り出す竜人を見て思う。

竜人自身の話ではこの世界に来てから敬語を使ったのは僅か三人。蓮華の母である水蓮と恋の両親だけらしい。

三人が三人ともすでに死去しており、そう語る竜人の横顔は寂しそうなものだった。

……感傷……なのかしらね。

分らない。そう言いきるのは蓮華にとって容易い事だが、

……これは竜人の感情だから……。

だから、蓮華は何も言わなかった。ただ、そう、と頷いただけだ。ふと、疑問が浮かんだ。

「ねえ、竜人」

「ん？」

「母様とはどんな関係だったの？」

蓮華の問いに竜人は顎に手を当て、考えるようにし、

「預かってたんだよ、敗北を」

「？」

……預かった？

要領を蓮華は首を傾げ、竜人は背を向けたまま語る。

「昔、いろいろ行き違いで戦ってさ。まあ、思いっきり打ちのめされたよ」

つまり、竜人は水蓮に敗北したということではないのか。

「違う。打ちのめされる程度なら、過去に親父や他の連中に幾度となく喰らっている」

顎を上げ、空を見上げながら竜人は言う。

「精神に関してなら、俺は過去とある点以上に軋みを受けるものが無い。——だから、俺は死んだって敗北を認めない。いずれ、という前置きをしてでも、必ず勝つ」

こちらに振り向く事は無い。

「そう言ったらおもしろそうに笑ってさ、こう言ったんだ」

——なら、とりあえずの敗北を預けるわ。そのうち返してね。

「テストメント Tes、と答えた。——結局返せなかったけどな」

「……そう」

……もしかして。

ずっと昔のことだ。賊の討伐に行った母が驚くほど上機嫌で帰ってきたことがあった。

理由を聞いてもちゃんと答えてくれなくて、ただ笑みを浮かべながら、

……おもしろいものを見つけちゃったのよ、って。

六年前ぐらいのことだと思っからきつとその面白いものとは竜人のことだったのだろう。

……てっきり、いいお酒でも見つけたのか思ったのだけど。

「最後の一撃を喰らう前に、昨日の雪蓮と同じ感じで真名を教えてください。だから昨日は少し、驚いたな」

聞こえる吐息は苦笑だろうか。

わからないが、気になることがある。

それは、

……とある点、って何？

竜人が何かを抱えている事は知っている。

それは、今言ったように竜人に何よりも竜人に軋みを与えるものだ。

それを蓮華は知りたいと思う。

呉の姫である孫権・仲謀としてではなく、蓮華という一人の少女として。

……知りたいわ。

「ねえ、竜人」

「ん？」

「教えて？ 一体何があなたを軋ませるの？」

「――」

初めて、竜人がこちらを向いた。
それを見つめる。

「私は知りたいわ、あなたのこと。だから教えてほしいのよ」

まるで告白のようだ。

……別にそれでもいいわ。
なぜなら。

……竜人は恋が……。

「蓮華は人を殺す時、何を感じる？」

不意の問いだった。

それはこの時代に生きる者なら誰もが自問することだろう。

蓮華が初めて人を殺したのは何時のことだったか。

問いに疑問を感じながらも、

「……いろいろよ。いろいろ考えて、感じてる。でも、できるだけ感じないように……」

「それが正しいんだろうな」

竜人は立ちあがり振り向く。

竜人の黒い瞳と蓮華の蒼い瞳が合う。

「俺は何も感じない」

蓮華が息を飲んだ。

「人を殺すことなんてことは俺にとって何でもないんだ。何でもなく、何でもなく、何でもない。そうであるように、息をするように、息をしなければ死んでしまうかのように人を殺せる」

LOW-Gでは。

「初めは、親父の世代の敵の残党だった。十歳の時、襲われて二人殺した。一人は首の骨を叩き折って、もう一人は奪ったナイフで心臓に突き刺した」

この世界では。

「居候していた村が賊に襲われて、恋の両親が殺されていた。それを見て視界にいたヤツラを皆殺しにした」

殺した。殺して殺して殺して殺した。

何も感じずに。何も考えずに。命を刈り取る瞬間においてのみは何も無かった。

「おかしいだろ？イカれてるだろ？そんな人間壊れてるとしか思えないだろ？」

「そ、そんな」

「でもさ、笑えないことに、それもどうでもいいんだよ」

「え？」

自分はどこかおかしいとは思えない。
人を殺すことに何も感じないことに、何も感じないなんて。

「なんの意味もなく、ただ当り前のように殺すってことは、俺が受け継いできたものを否定することだ」

それがつらい。

それが苦しい。

「まるで心が碎けて欠け落ちるように、こぼれ落ちるように」

痛みはない。

痛みはないけれども

「軋むんだよ」

そして、

「俺が受け継いできたものが、無くなってしまいそうで——怖いんだよ」

なるべく人を殺さないようにしても、いつか。
誰かを殺して、

「全部無くなるかもしれないんだよ」

「……っ！」

蓮華が唇をかみしめている。

否定したいけど出来ないのだろう。

竜人のみが感じる軋み。

その果てを否定できる人なんて、

「……………そんなことない」

いた。

目を向ければ。

蓮華の向こうに歩いてくる。

赤。

燃えるような赤の少女だった。

「恋!？」

自らの横を通りすぎる赤い少女は間違いなく、恋だ。

……どうしてここに。

自分たちの後をつけてきたのか。

恋は驚いて立ち尽くす竜人の前に立つ。

彼女は竜人の手を取り、

「……考えすぎだよ」

「恋……」

「……全部無くなることなんてない」

「けど……」

「無くさせない」

「――」

「……軋んでこぼれ落ちても無くならないくらい、思いを重ねればいい。恋は竜人に無くさせないし、きっとみんなも手伝ってくれる。みんな、竜人のことが大好きだから」

「――」

「考えすぎ、竜人は。強がらなくてもいい、フツ切った振りもしくなくてもいい。――軋みも含めて竜人なんだから」

「……そっか。ありがとな、恋」

「ん」

「恋」

「ん？」

「手伝ってくれるか？俺が何もかも失わなように」

「……ん」

そうして。

笑っている二人を見ていると。

……嫌になるわね。

二人のことではなく自分に対してだ。

二人を見ていてモヤモヤする自分がいる。

自分では足りないのかと。

自分では竜人を手伝えないのかと思う。

……無理……よね。

竜人と恋は二人でいるのが自然に見える。

間違っていて正しくありたいと思いながらも、間違ったことを自分に課している悪役。

なによりも無垢で、誰よりも純粹であるがゆえに、なによりも誰よりも正しい天下無双。

……正逆なのかしら。

そうなのだろうと思う。

そして、自分ではダメだと。

だから、顔を伏せ、立ち去ろうとして、

「……………蓮華も」

「え？」

見れば恋が竜人から手を離し、蓮華の下に来て、

「……………蓮華も手伝って。蓮華も竜人のこと好きだよね……………」

「え、ええっ？」

……………ど、どうしましょう。

ここは否定すべきか。でも好きじゃないなんて言えば嘘だ。四年前、実は少しだけ泣いていた蓮華の所に来てくれた時に熊だと思ったが、同じ年の少年だと知った時は嬉しかった。それから片時も忘れたことは無く、洛陽で会えた時は嬉しかった。でも。

「で、でも、私じゃ足りないわ……」

「……？、どうして」

「……私は、間違うのが怖いから。間違えるのが怖いからゆっくりとしか前に進めないのよ。だから」

「……それでいい」

「え？」

「……間違えるのが怖くて、ゆっくりと進めないならきつと蓮華の選んだ道は正しい」

「恋……」

「……それはきつと私たちにとって正逆だから、蓮華も一緒に手伝おう？」

恋は自分も含めて正逆だという。

それはどうなんだろう。。

でも、嬉しいと思う。

それでいいな、とも。

……だって、竜人と共にいたいと思うのは。

呉の姫の孫権・仲謀ではなく、

……恋する乙女の蓮華よ。

そして、自分の気持ちを確認し、恋した少年を見れば、

「ん？どうした、蓮華。こっちはいつでもいいぞ」

恋と蓮華に向けていい笑顔で両腕を広げていた。

「……何してるの？」

「おいおい、わかってるだろう？」

いつもの調子を取り戻した竜人は、

「これから、二人で俺の胸の中に飛び込むだろう？安心しろ、俺の懐は広いぜ」

「………」

とりあえず無視する。

「恋」

「ん」

「しばらくは進む道は違つと思つけど——よろしくね」

「……………ん」

二人の少女は互いに笑みを浮かべる。
そして、蓮華が再び竜人を見れば、

「お、来るか？」

未だに腕を広げていた。
それを見て、竜人の後ろに回る。

「なんだ、蓮華は後ろからか。いいぜ、俺は背中も広うだぐえ」

恋が見守る中、台詞の途中で竜人のスカーフを顔が紫になるまで
絞め続けた。

第三十一章 正逆の三人（後書き）

実はこの作品は恋がメインヒロインのハーレムで蓮華が裏の真ヒロインだったんですね！。

次回予告。

次はだいぶ飛びます。

…… 赤壁の後まで。

第三十二話 答えを見つけるために（前書き）

決着を

決戦を

終わりを越えて幸いを迎えるために

第三十二話 答えを見つけるために

長大な夜の河がある。

そこは赤壁と言われる場所で本来なら静かに水が流れる場所だが今は違う。

戦場。すなわち戦いの場。

それも魏対蜀呉の決戦ともいえる戦いだ。

すでに戦場は勢いが最高潮を迎えている。

その中心は一つの船に立つ女性。

船にはすでに彼女のみで、その船を挟むような二つの船もある。

二つの船にはそれぞれ魏と呉の王や将が乗っている。

彼女たちは中央の船に視線を向けている。それは彼女たちだけでなく周りで戦っている兵たちも同じだ。戦闘中の僅かな隙に盗み見る。

そして魏の夏侯淵が弓矢を構え、狙いを定めるのは、

「……祭！」

身体のいたるところから血を流し、満身創痍だ。

しかし彼女は笑みを浮かべ、

「策殿。最後に一目会えて、ようございました。これからの呉、よろしくお頼み申します」

雪蓮は何も言えない。本当ならば別れの一言言つべきなのだろうが何も出てこない。

「……祭殿」

祭の名前を呼ぶ冥琳の目は静かで、その目を見た祭は、

「冥琳……。その様子なら、心配ないな」

「当り前でしょう……あなたがいた時より、良い国にしてみせましよう……！」

静かな、そして僅かに涙が浮かぶ目には確かな意思と決意がある。

「ならば思い残すこともない……」

夜天の空を見上げる。
そして、

「さあ夏候妙才！」

「——っ！」

声を張り上げ、夏候淵を促す。
キリリ、と弦が絞られ、

「皆……さらばじゃ」

「祭iiiiiiiiっ！」

矢が放たれた。

.....

……中々、長い人生じゃった。

自分に迫る矢を見ながら今までの人生を振り返って祭は思う。
水蓮や雪蓮に二代にわたって呉に仕えてきた。

二人とも個性が強く、何度も肝を冷やしたが、

……好い主たちだった。

共に笑い、共に戦い、共に杯を交わした。

それももうできないが。

悲しいと思う。

仕方ないとも。

自分は死に体の老兵だ。そしてもうすぐ死ぬ。

夏侯淵が放った矢は正確に自分の心の臓へと向かっている。

数舜先には自分を貫く。

目を閉じ、その時を待ち、聞いた。

「そんな、脂肪の塊を二つも付けているからそうなるんですよ」

……は？

目を開けたら見た。

それはここに居るはずのない少女だ。

……何時の間に！？

彼女はこちらに背を向け長刀を振りかぶっている。

……なんじゃ、あれ……？

長刀の柄や峰に白い殻のようなものが付けられている。

祭の疑問など無視するかのように少女はこちらを見ずに、

「ふっ！」

迫りくる矢縦に断ち切った。

こちらを見た。

「なぜお主がここに居る!？」

その少女は、

「明命！」

・・・

崖の下で明命の名が呼ばれた。

船上の者の視線を集める明命はそれに答えず、振り向きざまの峰の一撃で黄蓋を船から弾き飛ばし、自身も後に続いた。

それを確認した牡丹は、

「では、行つて来る」

「T e s ・行つて来い」

後ろに居る者たちから声援が来て、それに笑みと立てた親指で答え、

「――」

飛び降りた。

落ちる。風が吹き付け髪が吹き荒れる。

それには構わず金剛爆斧を握りしめる。

それはただの斧槍ではなく、機殻カウリングが施されており、さらに大量の符が貼られている。

下の船が無人事を再確認し、

「いくぞ……！」

斧槍を振りかぶる。

瞬間、刃の後ろの機殻が展開され光を放出。
さらに大量の加速符が弾けて、振った。

「……っ！」

斧槍は容易く音速を超え、水蒸気の尾を引く。
その代償に両でから血が噴き出し、軋む。
それでも。

「おお……！」

振りきった。

生まれるのは莫大な爆砕の力だ。
その力は一瞬にして、

「！」

朱の炎が連続で咲き誇り、先ほどまで祭と明命がいた船を両断した。

即座にして船が粉々になる。

それを見届けて、

……く。

斧槍を振り抜いた勢いは消えず、姿勢が崩れ、河に落ちた。
しかし、その口元には笑みが浮かんでおり。

着水する直前に、黒髪の少年が崖から飛び降りるのを見た。

.....

装降伏に黒のスカーフを首に巻いた佐山・竜人は木片の海に落ちる。

足が木片の一つに触れて、本来ならそのまま沈むはずだが、

「足場、と」

木片にそう書きこむことで直立する。

周りには魏と呉に加え、蜀の主要メンバーもいて、自分を見ている。

斜め右には魏が斜め左には呉、左には蜀という構図だ。

……快いな。

そう思う。

この三国の英傑たちがそろって自分を見ていることは、

……俺が世界の中心だ。

そのことに一つ頷き、笑みを浮かべ、

「さて、まずは最初に一言」

魏蜀呉に順番に一礼する。頭が下がり自分の視線が外れても、皆が自分を見続けていることに口元の笑みを強くし、

「ここに来ることがもはや能わぬすべての方々に、哀悼の意を表する」

言葉と共に深く一礼した。

.....

「茶番よ！」

声を上げたのは曹操だ。

彼女の目には怒りが宿り、放たれる言葉は糾弾だ。

「洛陽の戦い以来、なにもしてこなかったあなたがそれを言うというの!？」

正確には孫策の命を助けているが。

確かに曹操の言う通り、佐山・竜人たち『全竜』や漢王朝もなにもせずに、やってきたのは賊の討伐や領土内の安定化だけだ。

それゆえにこの赤壁で、三国の決戦となった。

それなのにここに居ないはずの佐山・竜人が来た。

……一体、どういふつもり!？。

なにより、

「なにをしに来たというの、佐山!？」

「交渉だ」

彼は両腕を広げ、

「すべてを終わらせる為の交渉だよ」

・ ・ ・ ・ ・

「乱世が始まってどのくらいたっただろうな」

桃香は聞く。

一度だけ共闘した変な少年の言葉を。

「そして、どれだけの人々が死んでしまったか」

・ ・ ・ ・ ・

「誰もが乱世の先の幸いを願って戦ったはずだ」

雪蓮は聞く。

自分の命を救ってくれた少年の言葉を。

「大切な人たちと共に在れる幸いを」

・ ・ ・ ・ ・

「でも、未だその願いは叶えられていない」

華琳は聞く。

自分の隣に居る一刀に似すぎている少年の言葉を。

「国なんて関係なく誰もが願っているというのに」

.....

「乱世の始まりは王朝の腐敗だった」

蓮華は聞く。

自らが共に在りたいと願う少年の言葉を。

「それがすべての発端とも言っていていいだろう」

..... どういうつもり？

竜人の言葉は、まるで漢王朝が全て悪いとも言わんばかりだ。
疑問を得て、同時に納得も得る。

..... これが悪役の在り方なのね。

.....

「だから、責任を取ろう」

恋は崖の上でいつでも飛び出せる用意をしながら皆と聞く。
自分の正逆の少年の言葉を。

「曹操、劉備、孫策」

これで終わればいい、とそう思う。
父と母の顔を思い出し、空を見上げながら。

.....

「相対を申し込みたい。魏蜀呉と漢王朝の将たちでの相対だ。――
――それで終わりにしよう」

一刀は聞いた。

自分と真逆で同一で鏡像の少年の言葉を。

そして、体の震えを感じる。

……これが悪役の在り方か！

竜人は将たちの相対と言った。

それはつまり、

……大規模な戦争では無く個人単位の決闘だ！

それなら戦死する者も少なくなるし、何より、魏蜀呉三国と漢王朝の相対ならば、

……三国は一度同盟を結ぶという事だ。

それならばその後には平和を望んだとしても、スムーズに出来る。
しかし、

……でも、それは……。

.....

「漢王朝側が勝ったなら、再び劉協陛下は大陸の皇帝として三国の上に立つ。三国側が勝ったなら、俺たちはもうなにもしない。和平しようが、また三国間で決着をつけようと戦争しようがな」

竜人は言う。

劉協と話し合って決めたことを。
それが幸いを見つけられると信じる答えを。

「もはや魏も蜀も呉も、大陸を統べるのに申し分ない」
だから、

「決着を。すべての人が納得できるように決着を」

悪役の交渉。

それに最初に答えたのは、

「それは、皆が幸せになれますか？」

劉備だ。

竜人は彼女に向きあい、

「わからない。けど、戦い続けるよりはその機会が増えるはずだ」

彼女は一度自分の周りの皆を見直す。

彼女の理想についてきてくれた友だろう。
そして、

「わかりました。わたしたち劉蜀はそれを受け入れます」

理想の追求者は頷いた。
続いて、

「孫呉もいいわよ」

雪蓮だ。

「犠牲が少なくなるのは気にいったわ。元々私たちは天下に興味など無く、幸いを得るために戦った」

彼女はあくまで楽しそうに。

「なら、その為の相対に文句など無いわ」
戦闘狂いの王は答え、

「貴方はどうする、曹操？」

小さな霸王に問いかける。

.....

「.....」

.....私は.....。

唇をかみしめる。

頷くべきだろう。

佐山・竜人の提案は死が最低限になるだろう。
でも、

.....私は覇道を進むと.....。

そう、自分自身に誓い、ここまで来た。

それをいまさら違う道に行くを行けるのか。
そのジレンマに体を震わせ、

「華琳」

一刀の声を聞く。

横を見れば、北郷・一刀がいて、自分の手を握っている。

「君の心のままにすればいい。俺たちは華琳自身について来たんだからさ」

手の体温を感じ、後ろにはあるものを感じる。

信頼の気配だ。

それを受けて。

ふ、と笑みを作る。

それを見た佐山が、

「それで？いきなりイチヤつきだしたして得た答えは？」

「受けましょう」

胸を張って答える。

「霸道はいいのか？」

「なにを勘違いしているの？霸道とはただ我を貫くことではないわ。

——私が誇りを抱いて進んだ道がすなわち霸道なのよ」

そうして、小さな霸王は答えた。

.....

竜人は周りを見渡す。

劉備も雪蓮も曹操の表情には決意と意思がある。
それは彼女達の後ろにいる将たちも同じだ。

そして、崖の上にいる仲間たちも同じだろう。
思う。

これなら。

……見つけられるさ。芳醇な答えを。
両腕を広げ、

「さあ——決着をつけようぜ」

第三十三章 相対の始め（前書き）

さあ、始めよう

そして、楽しもう

今宵限りの意思のぶつかり合いを

第三十三章 相対の始め

夕方の洛陽。

中央に王宮を置き、四方に門を四つ抱える街だ。

日が傾きかけてい時間帯は本来なら街から人が少なくなるが、今は違う。

祭りだ。

それにより、街は太鼓の音や笛の音、人々の笑い声が響く。

いくつも出店が出され、旅芸人がこぞって技を披露する。

その中で舞うビラがあり、それは朝方から配られ、魏蜀呉の陣営に予め送られているものだ。

誰もがそれを手に取る。

それを見て目を細める者いれば、笑みを見せるの者もあり、叫んだり泣きだしたり、反応は様々だ。
そのビラにはこうある。

告

赤壁での交渉の結果、漢王朝と魏蜀呉三国同盟の将による相対で禍根の戦に決着をつけられたし。

- ・相対は一对一だけでなく多対多、一対多も認めるものとする。
- ・相対は相対者同士が接触し名乗り合った直後に自動で概念空間に移動し開始するものとする。
- ・勝敗は一方の降服か、戦闘不能、使用武器が使用不可とされた場合とする。
- ・勝負が決定された場合、勝者陣営には白花が、敗者には黒花を贈るものとする。
- ・白黒花の集計は王宮の玉座の間で行うとする。

・複数対複数の場合、白黒花は最後まで立っていた将の陣営の送るものとする。

・漢王朝が勝利した場合、三国は王朝に帰属し支配下に置くものとする。

・三国が勝利した場合、皇帝は大陸の象徴として実権をなくし、天下を三つに分けた上でそれぞれ魏蜀呉が納めるものとする。

・相对開始は本日正午より。相对参加者はそれまでに参加を申請されたし。

漢王朝 第十四代

目皇帝 劉協・伯和

人々はそれに様々な思いを抱く。

だが一様に。

決着を願った。

.....

S i l e n t n i g h t H o l y n i g h t / 静かな夜

よ 清しこの夜よ

A l l ' s a s l e e p , o n e s o l e l i g h t , /

全てが澄み 安らかなる中

J u s t t h e f a i t h f u l a n d h o l y p a i

r , / 誠実なる二人の聖者が

L o v e l y b o y - c h i l d w i t h c u r l y h a

i r , / 巻き髪を頂く美しき男の子を見守る

S l e e p i n h e a v e n l y p e a c e / 眠り給う

夢安く

Sleep in heavenly peace / 眠り給う
夢安く――

祭りの中に街が響く。

出店が多くある通り。

歌い手は歩みを進める一人の少年だ。

黒髪に黒目、黒い服装の黒いスカーフと黒ずくめだ。

腰から二振りの短剣がある。

歌は時折途切れ、しばらくすると再会する。

まるで長い間忘れていた歌を思い出すかのように。

彼は祭りを楽しむ人々を見ながら、笑みを浮かべる。

歌を口ずさむ少年はやがて通りを曲がろうとして、少年の向こう
側から来た少年に気付き、

「よう」

「やあ」

共に通りを曲がった。

.....

「良い町だ」

制服に日本刀を提げた少年、北郷・一刀。

「当然だ、俺らの街だぜ」

黒ずくめに腰に二刀を携えた少年、佐山・竜人。
二人は他愛のない会話をしながら歩く。

「……さっきの歌って、清しこの夜……だろ？」

似合わない、と呟く一刀。
うるさい、と返す竜人。

「昔、聞いたんだ。もつとも、その頃は全く歌わなかったけどな。
くだらないと、そう思ってた」

「なら、何で今さら？」

竜人は空を見上げ、

「形はどうあれ、今夜で決着がつくんだ。そう思ったらなんか思い
だしたんだ」

「生まれてくるものへの幸い願う歌、か……」

「ああ」

そこで、二人は屋台で、軽食を買う。

竜人は肉まんを。

一刀は焼き串を。

ちなみに竜人の肉まんには恋の顔が描かれていたが、一刀は無視し
た。

「もう、全員街に入ってる頃だろうけどお前ら、準備は万端か？」

「もちろん、悔いの無いようにやれることはやった。それに君がくれた賢石もある」

一刀は首から下げた賢石をみる。

それは『―――意思是力となる』という概念が込められた賢石だ。相対申請の際に配られたものだ。

「そうか。こっちも完璧だ。ちゃんと最終回直前らしく―――みんなでいやらしい事もしたし」

「……………なんだって？」

「ああ、こういう最終回直前のような場面で主人公とヒロインがいやらしい事をするのは基本だろ。まあ、ヒロインたちだけど」

「あああ、やっぱり君もハーレム作ってたか。ていうかそんなやましい事を堂々というな」

「なに言ってるんだ？そういうことはやましくない。むしろそういう事をしなければ子供が出来ないんだから、むしろ神聖なことだ」

「あ、そう」

それから、二人は歩きながら会話をした。

なんの意味も無い会話だが楽しみながら。

歩みを進み続ける。

……………

「さて、この辺でいいか」

「だね」

二人が歩みを止めたのは洛陽の北の端。
もはや人がなく、あるのは黄昏の輝きだ。
そこで二人は向かい合う。

「皆はもう始めてるかな」

「案外俺たちが最初だったりしてな」

かもな、と笑い合う二人。
そして。

向かい合い、少年が手にするのは双剣だ。
右に水波模様の白剣。左には亀裂模様の黒剣を手にし、

「比翼連理の陰陽剣、『干将・莫耶』。干将は旅の中で、莫耶は宮
中の宝物庫から探し出した」

双剣を指の動きで一回転させ、

「離れることを知らぬ夫婦の絆。断てるものなら——断って見せろ」
それに対し、もう一方の少年は日本刀を抜刀する。
白銀の刃が黄昏に輝く。

「妖刀『天断ち』^{あまねだ}。この世界で俺が唯一持ちこんだ、北郷の一振り

だ」

刃に手を当て、

「名前概念が宿された今、一刀の名の下に天すら断ちきるぞ」

互いに構える。

双剣の少年は右剣を前に、佐剣を後ろに。
日本刀の少年は下段で。

「せっかくだ。街を回って行こうぜ」

「ついでの他のみんなの戦いも見ながら？」

ああ、と少年が返す。

そして、互いに大きく息を吸い、

「『全竜』総長、みんな大好き佐山・竜人」

「曹魏親衛隊隊長、種馬扱い北郷・一刀」

馬鹿な告げ会いをし、武器を握り、

「……いざー！」

概念空間に取り込まれるのと同時に駆けだした。

第三十四章 槍と槍（前書き）

楽しく
愉快に、な

第三十四章 槍と槍

宮中、玉座の間。

そこに一人の侍女の声が響く。

「総長、及び北郷様戦闘開始しました。概念空間展開確認——！」

三つ編みの侍女の報告が走る。

「お二方、洛陽北部より移動を開始されました！」

それと同時に、玉座の間の中央に展開された洛陽の地図に変化が生まれる。

地図といっても紙のものでは無く光学概念によって作られたホログラムの様な立体型の地図だ。そして、その北に移動する二つの光点が生まれ、吹き出しが出る。

それぞれ、

・佐山・竜人 『全竜』総長兼漢王朝皇帝相談役 悪役拳士兼剣士
・北郷・一刀 天の御使い兼曹魏親衛隊隊長 種馬抜刀術師

とある。

それらを作るのは『全竜』侍女部隊の者達だ。

そしてそれらを見ながら語りだすのは、

「では、これより大陸の行く末を決める漢王朝対三国同盟の相対戦を送りたいと思う。解説は朕、漢王朝第十四代皇帝劉協・伯和と」

「みんな大好き——！てんぽーちゃー——ん！」

「みんなの妹おーっ？ちーほーちゃー……ん！」

「とっても可愛い。れんほーちゃー……ん」

ライブのノリで名乗る『数え役満 姉妹』の三人。
劉協は三人をチラ見し、

「まあ、そんなところで」

「なっ！」

おざなりな扱いに声を上げる三人。

しかし、相手が皇帝故に大きく出れない。

……権力とは悲しいものじゃ。
使えるなら使うが。

「うむ。提供は外道集団『全竜』、『美少女の一枚は世界を救う』
の撮影部隊で送らせてもらう」

そこで、

「む」

「あ」

「は？」

「え」

さらに光点が二つ追加された。
それを確認し、一息。

「では、現場はどうじゃろうか」

・
・
・
・
・

「はっはっはっはっは！はーっはっはっは！」

……なんだ、あれ？

栗毛をポニーテールにしたやたら眉が太い少女は思う。
夕方に槍を携えながら洛陽の北をうるついていた時だ。

人だかりが出来ていたから近づいて、視線を上に見れば、屋根の上で見る。

「悪の華を咲かせるために」

白を基調とした服装。

「芳醇なる園を守護するために」

白の髪飾りに水色の髪。

「美々しき蝶が悪を通す！」

その手には朱き槍。

「我、混乱の戦場に美と愛をもたらす悪の大幹部！」

不安定な足場だが、ポーズを決め、

「華蝶仮面・星華蝶……見参！」

黄の蝶の仮面が輝く。

「イエー！」

……だから、なんだよアレ！
思い切り悪を名乗っているが、人々はむしろ、楽しそうに歓声を
上げている。

「ホント、なんなんだよ……」

少女のぼやきは歓声の溶けていく。
はははは、と屋根の上で華蝶仮面は四度笑い、

「さて、諸君。出てきていきなりだが――」

目が合う。

「帰る」

じゃ、と手を上げた。

「ええー！？」

……ええー。

なんじゃそりゃ。

……さっき出たばかりだよな……？

一体なにがしたかっただろうか。

「さらば……。とうっ！」

別れの言葉を残し、後ろに跳躍。

夕方の街に消えた。

少女も目で追うが途中で見失ってしまった。

華蝶仮面が消え、集まっていた人々も散っていく。

皆残念そうだ。人気なのか、あれ。

「絶対、おかしいだろ。あれ」

「なにを言う。あの素晴らしさがわからない者こそおかしいではないか」

「どわあっ！」

振りかえる。

そこにいたのは、

「お前……！」

水色の髪の少女。

かつて、虎牢関や洛陽で槍を交えた相手だ。

思わず身構えそうになるが、止まる。

相対のルールにより、相対開始が名乗りの後と言う事になっているが、それ以上に、

……祭りの中で獲物を出すのはな……。

この祭りはただの祭りではない。

乱世の決着を祝う祭りだ。

今、洛陽では人々が魏蜀呉漢王朝関係なく祭りを楽しんでいる。
そこで、無闇に槍を取り出すのは、

……無粋だな。

思い、力を抜く。

心を落ち着かせ、なるべく叫ばないように水色の少女を見れば、

「どうした？いきなり叫んで勝手に落ち付いて。精神不安定か？医者に行った方がいいのではないか？」

「お前――！」

やっぱり槍をぶち込んでやろうか。

フー、フーと、息が荒くなる。

なんとか落ちつけて。

「それで、さっきのどう考えても頭が狂っているナントカ仮面はなんなんだよ」

「華蝶仮面だ。というか、なにを言っている？あの素晴らしさが理解できない人間の方が脳みそ腐っているだろうな」

互いに一瞬顔を見合わせ、視線が合う。

次の瞬間、真顔になって額を合わせ、

「どう見ても意味不明の変態だろ――！」

「美と愛の悪の幹部、華蝶仮面だ――！」

「悪の幹部が目立つなよ――！」

「いいではないか別に、人気なんだぞ！」

「マジか」

さらに額を押し付け合い、互いに頷き、

「よくわかんねえ話だ」

「わかりやすい話だろう」

離れて、歩き出す。

「大通りでよいな？」

「ああ」

道を進み、大通りに入る直前、

「星だ」

「翠」

星は笑いながら。

翠はそっぽを向きながら。

互いに名乗り合い、

「！！」

概念空間に取り込まれるのと同時に飛び出した。

.....

「おお……！」

通りに飛び出したと同時に星に向かって十字槍を突き出す。
柄を短く持った一撃だ。

短く持ったが故に腕力がそのまま伝わり、自重に振り回される事が無い。

それにより翠自身の最速の初速を得る。
腕と体を垂直にして放ったそれは、

「……！！」

同じように放たれた星の突きで相殺された。

弾かれ合い、翠の十字槍がかち上がる。

一瞬の突きのぶつかり合いの中で思う。

……速いな！

翠が放ったのは自身の中での最速の一撃だ。

しかし、それに対し、

……アタシより速く、それも二連かよ！。

一発目で逸らされ、さらに二発目で正確にかち上げられた。

こちらの最速の一の突きを放つ間に星は二だ。

速さと技のキレにおいては星が上だ。

しかし、その事に翠は気落ちしない。

速さとキレで負けるのに、突き同士が相殺されたという事は、

……力と威力ならこっちの方が上だ！

その事を意識し、

「いくぜ……！」

次の行動に移った。

柄を短く持つていた十字槍の握りを甘くする。
かち上げられた槍はそのまま手の中を滑るが、

「おっと」

手から離れる前に両手で思い切り掴む。

両腕で頭上に長く持った槍を掲げる姿勢になった。

そして、

「おりゃあ……！」

気合いの声と共に大上段から唐竹割りをぶち込んだ。

十字の刃を縦にしたそれは容易く音速を超え水蒸気を纏う。

轟、という音が鳴り、さらに十字槍が淡く光る。

翠の腰から下げられた賢石の効果だ。『意思は力となる』という
概念により翠に力を追加する。

そして、翠の唐竹割りに対し、星は。

「！？」

笑みと共に前に出る。

速い。

前に出て、直刀槍を地面と平行にし頭上に掲げる。

速度は落とさぬままだ。

激突。

振られた十字槍と掲げられた直刀槍が激突する。

十字槍から伝わる衝撃に顔を顰める。それは星も同じだ。

だが、星は顔を顰めながらも、

「走るぞ……！」

走った。

直刀槍を十字槍を接触させたままで、前に出て直刀槍を指運で回し、石突きを射出しようとする。

……させるか！

瞬間的に手首を回す。

視界の中、こちらに走ってくる星の向こう。縦だった十字槍の刃が横になり、

「刈り取れ……！！」

引いた。

同時に小さく後ろに跳ぶ。

刃を引きもどし、鎌のように槍を使う。

十字槍ならば可能だ。

後ろに小さく跳んだことによって星との間合いが空き、刃と星の頭部が近づく。

首を落とす動きだ。

それに対し星は身を出来るだけ縮め、

「！？」

石突きを射出した。翠へとでは無く、地面に、だ。

突きさしの反動を受けると同時に膝をのばす。

それによって生まれるのは跳躍だ。

星が跳び上がった直後に十字槍が星の足元をかする。

星はそれを足場として再び跳躍し、翠の頭上へと来て、

……あ、やべっ。

突きの五発を連続で打ち出した。

「うわっ、ととっ！」

二発は体を逸らすことで避け、もう三発は柄でしのぐ。

翠は突きに押され、星はその反動で滞空時間が長くなり間合いが空く。

「……さすがは錦马超。すばらしい槍捌きだな」

「……そっちこそ、調子よさそうだな」

軽口を言う星に、軽口で答えたら、

「うむ。なんせ——ようやく竜人と一夜を過ごしたのだからな」

……は？

星が胸を張って言ったことの意味を頭の中で反芻し、

「な、何言ってんだよ！こんな時に！」

「いやいや、こんな時だからこそようやく事ができたわけだが。まあ、竜人と恋が仲良くやってるところをみんなで乱入したわけだが」

私と明命と雛理と凧と真桜と沙和で、と指を折りながら数える星。それはつまり、数え上げた六人と、元々の二人で、

……は、八人で！

顔に熱が集まる。鏡を見なくても分かる。きっと自分の顔は真っ赤だ。

「なんだ？その様子では翠は恋をしたことがないのか？」

「ね、ねえよつ、そんなの！」

「いかん、いかな。人生損しているぞ！大損だ！」

「そこまで言うか！」

そこまで言われる筋合いはない。

そんなのは自分の勝手だ。

それに幼い頃から武を磨き続けていたので出会い自体がなかったのだ。

だから、

「まあ、気が向いたら、この後に、な」

そう告げたら、星はフ、と笑い、

「そうか」

そこで会話が止まり、一息ついた所で、

「！！」

再び飛び出した。

・
・
・
・
・

直刀槍と十字槍が交わる。

自分は直刀槍での突きを多用し、相手である翠は大ぶりの払いが多い。

……そこらへんは好みだろう。

大事なのは互いの力量の差だ。

技術と速さなら自分が。

力では翠が。

それぞれ上回っている。

それ以外はほぼ互角と言っていていいだろう。

互いの攻撃はかすり合うだけ。

互角。

その事実には星は思う。

……それではダメだ。

自分は『全竜』の第一特務だ。

戦場では常に文字通り一番槍の役目を担い、その役目を果たしてきた。

おそらく自分たちの相対は全体でも初めの方だろう。

竜人は相対の前に、好きなように戦えと言った。

それが大事だとも。

ならば、何時も通りに役目を果たそう。

なによりも。

かつて、竜人に槍を捧げた。

竜人を手伝いたい、と。

竜人がどこまで考えてこの相対戦を行ったのかはわからないが、とりあえず好きにしろと言った。

今、星のしたい事それは。

水蒸気を生みながら槍をぶつけ合い思う。

「……勝つことだ！」

そのために直刀槍を腰だめに構え、

・――ものは下に落ちる。

・――真名こそが力となる。

「昇れ、『龍牙』――！」

・
・
・
・
・

概念の声を聞き、翠は警戒する。

かつて、理解できぬままに自分を倒した攻撃に。

だが、今は違う。

自軍の軍師のはわわ軍師と話し合いその力の推測はできている。

星は二つの力を使っている。

概念条文による落ちていく力と『龍牙』による昇る力だ。

概念条文により相手を下に設定し、星自身は落下。

『龍牙』は相手を上に設定し、槍自身は上昇。

星は下に。槍は上に。上下といっても相手に向かっていくという

事は同じだ。

さらに、名前概念で補強する。

それ故にあの突撃が生まれる。

だが、

……わかっていればどうにかなる！

思う。

そして、待つ。

……負けないぜ……。

来た。

槍から蒼い光が噴き出し、星の全身を包む。

そして、超高速の速度で翠へと来る。
それに対し、翠は

「と」

槍から光が噴き出し、星を包んだ所で横に跳んだ。
軽い跳躍だ。

だが、効果的といえるものだ。
目でとらえられないから、とりあえず動く。

そして、超高速であるが故にいきなり、軌道修正は出来ない。
自分の横を光の奔流が通る。

そのまま、背中を狙う。

いささか卑怯かもしれないが気にしない。

……勝負とは非情なものだからな！

そう思い、振りかえったら、

「!?!」

……いない!?!

視界の中。黄昏色に輝く大通りに星はいない。
だが、おかしいものがあつた。

それは、通りの真ん中の地面にあるもので。

……くぼみ!?!。

何かで地面を強く突いたような跡だ。

何か、なんて決まっている。

槍だ。

翠の脳裏によぎるのは先ほどの星の跳躍だ。
それに従い上を見れば、

「!?!」

翠の真上。地面と垂直で頭を下になる姿勢だ。
その姿勢で星は笑みを浮かべ、

「昇れ、『龍牙』!!」

すでに概念は展開され、もはや避けることは敵わない。
だから、

「『銀閃』!!」

叫ぶ名は己の分身ともいえる十字槍だ。
それを、

「ああ……!!」

全力で下から振り抜いた。
黄昏の世界を銀光斬り裂く。
それは直刀槍へと行き、

「!!」

激突し、光がぶちまけられた。

・
・
・
・
・

戦闘を観察していた『全竜』侍女部隊の茶髪の女性は見る。
ぶちまけられた光が晴れ、相対者の二人を。

それぞれ星も翠もどちらも体から血を流しているがその両足で立っている。

無事だ。

だが、無事で無いのは、

「槍が――」

十字槍も直刀槍も刃の部分が砕け、槍としての機能を果たせなくなっている。

……これは……。

相対のルールにより、

「趙雲様、馬超様。両者、武装大破により――」

一息、告げた。

「引き分けです!!」

第三十四章 槍と槍（後書き）

相對第一戦目 星対翠をお送りしました。

感想待っています。

第三十五章 やりたいこと（前書き）

やるべきことではない。
やりたいことをやれ。

第三十五章 やりたいこと

陽は未だ沈まない。

洛陽の街の北東。

主に軽食の屋台が多くある通り。

その通りにある民家の屋根の上に少女はいた。

赤い髪、首飾りに小さな体の少女は胡坐をかいて、大きな袋を抱えていた。

その中は大量の饅頭。

それらを食しながら街並みを見つめる。

「はぐつ、あむあむ」

拳大の饅頭が僅か数口で消えていく。

彼女の後ろには空の袋がいくつも転がっている。

「こいつ、うまいのだー」

彼女が気にいったのは顔入り饅頭。

不敵な笑みを浮かべる悪役だったり、ぼーとした天下無双だったり、お茶が美味しい王さまだったり、偉そうな皇帝だったり様々だ。

国の重鎮が描かれていて食べにくい、異様にうまいので民にも人気の逸品だ。
が、

「……」

頭の悪そうな笑みを浮かべた少年のは食べなかった。

後ろの空袋に放り込み、

「おい、じろ」

「!？」

頭に打撃を食らった。

・・・

「何すんだー！」

「お前が人の顔が入った饅頭捨てるからだろ！」

「後で馬とかに食べさせるからいいのだー！」

「食わねえのかよ！」

赤髪の少女に拳骨を振り下ろしたのは赤髪の少年だった。
着流しのような格好だ。

歯をむき出しにしつつ、

「ちゃんと食べ！」

「本人の前で食べるかなのだ！」

「食えるわ！ ウチの総長なんて、副長膝に乗せながら副長饅頭食
いながらイチヤイチヤしてるぜ!？」

「あんな変態王と一緒にするなのだー！」

「ひ、否定が出来ねえ……！」

叫び合っていたら、饅頭の袋が屋根から転げ落ちた。

「あ」

二人で飛び付いた。
が、

「どけ！」

「邪魔なのだ！」

空中でぶつかり、袋と一緒に屋根から落ちた。

・
・
・
・
・

「おい」

「？」

屋根から転げ落ちた二人は通りに空白地帯が出来ていた。
仰向けで頭のでっぺんをぶつけ合いながら

「俺と戦って俺が勝ったら全部食えよ」

「こっちが勝つたらご飯をおごれなのだ」

「いいぜ」

「いいのだ」

周りの人々に遠巻きに眺められながら、

「夕だ」

「鈴々は鈴々なのだ！」

概念空間に入り、視線が消えた。

同時に武器を取り出し、

「！」

跳ね起きた。

・
・
・
・
・

無人となった通りの端の屋台が吹き飛んだ。

夕のトンファー、鈴々の矛の激突の衝撃によるものだ。
激突し、衝撃によりのけ反りながら二人とも跳躍した。
屋根に着地し、

「！」

走る。

疾走と跳躍により屋根の上を駆ける。

「おお……！」

叫びを上げながら、二人は衝撃を生みながら交差する。
その中で夕は思う。

……重いなこいつ！

一撃一撃がとてつもなく重い。

彼女の武装である丈八蛇矛。

小さな体格に似合わぬ長大な武器だ。

下手をすればその重さに持って行かれそうになるが、

……遠心力ってヤツか！

無理に振り回そうとせずに自身が回ることによって軌道を制御する。

回転により威力が増し、さらに今は疾走による慣性も力とする。

加えて彼女自身も怪力だ。

理解しているのか本能かはわからないが厄介だ。

厄介だが、負けていないし、

……関係ねえ！

「根性・用ー意！」

気合いは自分で掛け、

「両腕・強化……！」

自分で答える。

両腕が光を纏う。

「!？」

鈴々の目が見開かれる。

心の中でアホ面だと笑いながら、腕を振りかぶり、

「気合い、一発……！」

体重を乗せた一撃をぶち込んだ

「う、ぐっ……！」

矛で受け止められるが、受け止めきれない。
体が浮き、

「ぶっ飛べ……！」

ぶっ飛ぶ。

屋根の上をバウンドしながら、民家に突っ込んだ。

・
・
・
・
・

「い、たあ……！」

突っ込んだ民家の中で呻く。

仰向けに倒れている。

骨が何本かいつていた。

……またなのだ……！

反董卓連合の時の洛陽での戦いするときもあの両腕強化に後れを取った。

まず概念能力というのがいまいちよくわからない。
難しいことは苦手だ。

戦う事と食べることは好きなのだが。

しょうがない、と割り切っていたが、

……アイツがわかつているのにわからないのは癪なのだ。

どうかんがえても夕は自分よりバカなはずだ。

間違いない、絶対だ。

それでも、夕が使いこなしているのは何か理由があるはずだ。

夕の行動を思い返してみれば。

……叫びまくっていたのだ。

ふと、閃いた。

「……叫ぶのは、得意なのだ」

叫ぶことは決まっている。

立ち上がる。

同時に首から掛けた賢石が光を放った。

概念能力が鈴々に答えたのだ。

その事に笑みを浮かべつつ、

「……！」

矛を振った。

・
・
・
・
・

「うお……！？」

吹き飛ばした鈴々を追って民家に近づいたら、その民家がぶっ飛んだ。

三度の衝撃音と共に。

……なんだあ！？

そして、見た。

矛を振り抜いた姿勢の鈴々を。

その顔には、

……何か、掴んだか。

ニヤリとした笑みが浮かんでいた。

……上等……！

「行くぜ、チビ！」

「来いのだ、どチビ！」

両のトンファーを打ち鳴らし、行く。

跳躍し、腕を振りかぶり、

「オラッア！」

ぶち込む。

先ほどは鈴々を吹き飛ばした一撃だが、

「突撃！」

激突、拮抗。

全身を使った突きに止められる。

両者の武器から光と衝撃波が生まれる。

光は黄昏の世界を照らし、衝撃波は周囲の民家を吹き飛ばす。

「粉・砕！」

二撃目。

先ほどより纏う光が増した。

……やべえ！

半ば本能的に跳んだ。

ギリギリで回避し、矛が地面に突き刺さる。

そして、

「おいおい」

矛が突きたてられた所を中心に半径五メートルほどが粉碎された。
地面が半球状に碎かれる。

それを見届けながら通りの屋台の上に着地する。

彼我の距離は十分にあるが、

「勝利なのだ……！」

三撃目。

矛が振られた。

「！？」

振られた矛の軌道上に半月状の光が生まれる。

割砕の光だった。

それに触れた民家は轟音と共に碎け割れる。

それも数十件単位でだ。

洛陽の街の三十メートル程の民家が縦にスライスされる。

夕は両のトンファーで受け止めるも、

「つつ……！」

もろに受ける。

両腕を縦にし顔の前で構えたまま吹き飛んだ。
瓦礫の中に突っ込んだ。

体中から血を流し、額には玉の汗も浮かぶが、
……ハ、ハハ。

「ハハハハハ！」

飛び起きて、

「サイッコーだぜ！」

……

突撃の一撃目を受け流す。

粉碎の二撃目は跳躍で避け、

「オラッ！」

勝利の三撃目は振られる前に潰す。
だが、それにより体勢が甘くなり、

「甘いのだ！」

石突きの一撃が腹に入った。

「ガッ！」

骨が軋むが、

「まだまだあ！」

構わずに前に出る。

……楽しいなあ！

殴り合い、吹き飛ばし、吹き飛ばされる。

昔似たような事があった。

まだ夕が全竜副長ではなくただの悪ガキだった頃の話だ。

周り村の子供を集めて悪さをしていた。

強かったから誰も止められなくて、ちょっとした盗みしかない
小悪党だったから罪の意識は無かった。

結局、目指す場所が無くて迷走していたのだ。

やりたいことが欲しかった。

それを自覚していても、独りで抱えていた時だった。

——お前が噂の悪ガキか？

白い手甲と不敵な笑みが印象的な少年だった。

夕が拠点にしていた廃れた砦に乗り込んできた。

——何者だ、てめえ。

その問いに、

——俺か？ 悪役、の見習いだ。

見習いかよ、と笑った気がする。

——ああ、そうだ。小悪党との格の違いよ見せつけてやろう。

——……上等！

どれだけ殴り合っただろうか。

一晩は殴り合った気がする。

すでに夕の仲間は少年の仲間に取り押さえられていた。

少年は息は荒く、地べたに座り込んでいた。

そして、夕は大の字で倒れていた。

指一つ動かすのも億劫な状態で。

——いいか、やりたいことないなら探さなきゃだめだろうが。指
啜えて待つてんじゃねえよ。

自分の意思で前に進まなければ意味が無いのだと。

そう教えられた。

それから、前に進むために全竜に入った。

そして。

今この瞬間にやりたいことはある。

それは、

……コイツをぶっ飛ばす！

そのために動いた。

・
・
・
・
・
・

「でやああ！」

叫びと共に矛を振った。
突撃の一撃目は逸らされた。
粉碎の二撃目も避けられた。
今までと同じだが、跳躍の行き場所が違った。

「！」

自身の真上だ。
視界から消えた。
だが、

……甘いのだ！
勝利の三撃目は諦める。
諦めも肝心だ。

ご飯を食べるときに、まだ食べれても店に食材が無くなったら
しょうが無いのだ。

夕の狙いはわかる。
頭上からの一撃だろう。
相対前にも食らった。

だが、同じ一撃を食らうほど甘くないのだ。
だから、矛を頭上に掲げ衝撃に備えようとしたら、

「ばあーか」

声と共に矛が引つ張られた。
上を見る。

上に跳んだ夕がトンファーを振りおろしていた。
トの字型の長い方を持って。
持ち手部分を矛に引っかけて引き上げたのだ。

それにより、鈴々の身体は伸びて、夕の身体が落ちてくる。
そして、

「根性……！」

鳩尾に根性の一撃が入り、意識が途切れた。

・
・
・
・
・

鈴々が吹き飛んだあとには、
首が屋根に突っ込んだ身体があり、

「……よいつしょ」

引っこ抜いた。

それはもちろん夕で、周りを見渡し、

「お。いたいた」

吹き飛んだ鈴々を見つけると、笑みを浮かべるが、

「あ」

何かに気付いたように、頬をかき、

「どうやって、饅頭食わせるかな……」

困ったように呟いた。

第三十五章 やりたいこと（後書き）

大分、お待たせしました！

更新再開したいと思います。

第三十六章 奉仕するために（前書き）

たとえ人の形をしただけだとしても
主から感謝を得たいという感情は
この胸に確かに宿っています - -

第三十六章 奉仕するために

洛陽の東端。

祭りの気配からすこし離れた茶店。

長身の少女がいた。

青の短髪を持つ少女は遠くから聞こえる祭りの音を聞きながら団子をほおばる。

笛の音や太鼓の音、人々の笑い声の頬を緩ませながら湯呑を手に取り、

「む、空か」

「お注ぎしましょう」

後ろに振り向く。

そこには紅髪の侍女服の女性がおり、一瞬目を見張るが、

「ああ、お願いしよう」

・・・

「いい茶だな」

「T e s・総長の自作のモノです。品名は『マロ茶葉』」

「まろ……?」

「お気になさらず。——所詮戯言ですので」

「厳しいな」

苦笑するも、

「侍女ですので。主人を甘やかすことなどしません」

「なるほど」

見事。

そう思いながら団子をほおばる。

きちんと嚙んで飲み込み、お茶で流す。

空になった皿を店員に返し、外に出る。

紅髪の女性も後に続いた。

.....

店から少し離れた空き地。

街を囲む城壁もすぐそばの所で二人は対峙する。

「それでは僭越ながら私がお相手させていただきます。侍女風情ではご不満かと思いますが、どうかご勘弁を」

「不満など無いさ。私も華琳様に仕える身だ。むしろ見習いたいぐらいだよ」

「……もつたいないお言葉です」

一礼。

そして、腕を振る。

両裾からそれぞれ四本のナイフが滑り落ち、指に挟む。
では、と前置きし。

「この身は主のために咲く花にございます。しかし主から聞いた永遠に咲き誇る花ではありません」

それゆえに。

「咲き誇りましょう、主人が感謝のために。一人では得られぬ感謝の花束を抱くために」

行きましょう。

「主から送られし椿の名の下に」

行きましょう。

「……私も行こう。我が王の為、秋蘭の名の下に」

弓が構えられた。

互いに笑みを浮かべる
そして、

「！」

世界の切り替わりと同時に刃と矢がぶつかり合う。

.....

基本的には弾幕のぶつかり合いだ。

椿はナイフで。

秋蘭は矢で。

動き回りながら投げ合う。

それでも、

……やはり、こちらが不利か！

こちらは弓矢で秋蘭の技量をもつてしても一度では五矢が限界だ。

だが、椿の場合は違う。

重力制御による射出。

それにより時に十本以上の刃が飛来する。

五本落としても、五本以上飛んでくるのだ。

体術を以って凌ぐが厳しいものがある。

……徒手空拳が苦手などと言っている場合ではないな。

思わず苦笑が浮かぶ。

これまで二度交戦したが二度とも遅れをとった。

だが、今度はそうもいかない。

出し惜しみは無しで全力で行く。

そのために叫ぶ。

己が愛弓の名を。

「餓えを満たせ、『餓狼爪』！」

一矢いる。

光を纏った矢だ。

「！」

その光に眉をひそめつつも、迎撃の為にナイフを射出する。
その数は十七。

光を警戒した数だった。

それらは矢へと飛来し、

「！？」

光に触れた瞬間に破碎された。

同時に光が増し、速度も増す。

椿が目を見開き、回避するも、

「遅いな」

僅かに間に合わず、肩を掠め突きぬけた。

.....

「く……」

肩の痛みに齒を噛みしめる。

流れ出る血は侍女服を紅く染める。

そしてその肩には、まるで何かの爪に掻き毟られたような傷がある。

……なるほど。

「餓えを満たした爪による掻き毟りとは……意外にえげつない能力

ですね」

「そついうな。実は気にしているんだ」

秋蘭は苦笑しているが実に厄介な能力だ。

……こちらの攻撃が相手の攻撃力に加算されると判断します。
うかつに攻撃できない。

……さて、どうしましょうか。

・
・
・
・
・

彼女はとある地方の県令の屋敷に仕えていた。

名前は無く、ただ機械的に、それこそ人形のように生きていた。
家事はほとんどやっていたし、護衛のような事もやっていた。

口ではとても言えないことも。

その県令は悪政を振っていた。

治安が乱れてもなにもせず己の好き放題にしていた。

民が反旗を翻しても子飼いの兵たちが制圧した。

そのせいだったのだろう。

ある日、突如として現れた集団に屋敷を制圧されたのは。

屋敷の中、主を背にし、悪役見習いの少年に言っただ。

——私は何も感じない、何も考えないタダの人形ですので。

——ああ！？ 何言っでやがる！ 今時人形だって自分で考えて動くぜ！？

無感を込めた言葉に悪役見習いの少年は怒ったように言った。

言っていることが理解できなかった。

——何を言っているんですか？ 一体ただの人形がなんのために動くというのですか？

——なんだよ、決まってるだろ。

主の感謝を得るためだ、と誇らしげに言った。
そんなものは得たこと無かった。

——それは…… 一体どういうものですか？

——さあ？ 知りたかったら、自分で知ってみるよ。

知りたいと思った。

だからとりあえず自分の背にいた県令を突きだした。

——いいのか？

——構いません、その代わり教えてください。人形だとしても感情を持てるかどうかを。

その願いに、少年は笑みを以って応えた。

——T e s t < テスタメント > .

その時に椿という名を得た。

それからは『全竜』の一員となった、
そして、今。

感情を持っていると自信を持って言える。

それは、

……主と主からの感謝のための勝利を……！

・
・
・
・
・
・

視界の中、椿が大きく手を振った。

ナイフが三本飛来するが、

……甘い！

光を纏った矢が行く。

ナイフを飲み込み、椿へと飛ぶ。

それを上への跳躍でかわす椿。

だが、

「空中では避けられないだろう！」

そう思い、空中にいる椿に矢を放つ。

だが、

「いえいえ、案外簡単に避けれますよ」

軽い勢いと共に空中を蹴った。

「!?!」

「お忘れですか？ 私が主から授けられた賢石は重力操作。それを応用すれば……」

跳躍の勢いが減った所で再び跳躍。

「空中を跳ぶことも可能ですし」

両手を大きく広げた。

「武装展——開！」

同時に樁の周囲に展開されるのは、

「出し惜しみ無しの品ですがどうでしょう？」

大量の武装。

それは剣であったり、槍であったり、斧であったり、矢でもある。
多種多様の武装が数十種。

それが秋蘭の視界を埋め尽くしている。
だが、

「相手にとって不足はない……！」

限界まで弓を振りしぼる。

同時に。

「お召し上がりください」

「飢えを満たせ、『餓狼爪』！」

武装の瀑布と光の一矢が激突した。

・・・

光が晴れる。

周囲に転がるのは鉄クズだ。

「……お見事です。一応私の切り札だったんですが」

「いや……ぎりぎりだった。その証拠にまだ決着はついていない」

両者ボロボロだった。

椿は全身に掻き毟られたような傷があり、秋蘭は体中に切り傷がある。

それでも互いに自分の足で立っているし、椿の重力操作賢石も秋蘭の『餓狼爪』も健在だ。

だが、

「いいえ、決着は付きました」

「何……っ!？」

椿の言葉と同時に、上空から小さな風切り音。

そして、秋蘭の身体がぶっ飛ぶ。

数メートル以上足が地面から離れ、何とか立ち膝で着地するが、己の腹部に突きたてられたナイフに驚愕する。

「こ、れ……は……?」

「先ほどの切り札ならば、これはいわば奥の手です。先ほどの武装群の射出時と同等の重力を以って射出させていただきました。当然ながらその刃一本に重力を込めたため威力は今までの非ではあり

ません」

淡々と語る椿。

秋蘭から流れる赤い血を見据え、

「お眠りください、秋蘭様。この身が主から感謝を得るために」

「ふ、私も、華琳様に褒めてほしかったんだが、な」

体から力が抜ける。

仰向けに倒れこむ時に。

「姉者……あとは任せた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5567q/>

流転の悪役

2011年9月6日01時57分発行